

910.2
Sa 445
(8)

文學士 坂本健一述

近世俗文學史

早稻田大學出版部藏版

近世俗文學史目次

第一 總叙	一
第二 前期	一九
第一章の一 前期小説草子の起源	二〇
第一章の二 浮世草子の一	五七
第一章の三 浮世草子の二	八二
第一章の四 浮世草子の三	一二二
第三 後期		
第二章の一 草雙紙、小本	一五四
第二章の二 實錄、讀本	一六八
第二章の三 合卷、滑稽本、人情本	一七七

910.25 Sa 445 k(1)

近世俗文學史

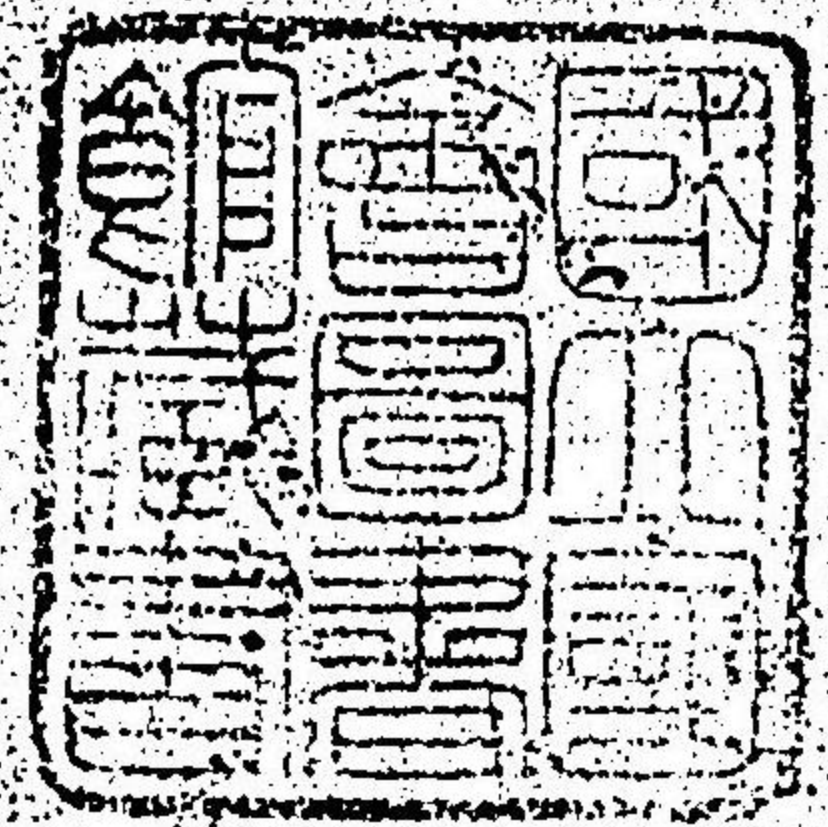
坂本健一述

第一 總叙

近世俗文學史の始に、之に關する諸種の事柄を一括して總叙一章を設く、嚴密に論ずれば、開講に關する凡例も、史中の議論も、區々の別はあれど、皆此に取こめて。

諸般の學の大に開け盛に起りしは、近き世の事として、文學の研究などいふも、日尙淺きは、いふ迄もあらず。されば日本の文學史も、三上高津兩氏合著の『日本文學史』上下二卷が、抑我文學史の始を爲してこのかた、年を數へて僅に滿十又一年。其間に大和田氏の『日本大文學史』の如き、内容の多量なるものより、簡明にして更に要を得たる幾多先進の此種の著作を數ふれば、よしや、瓊瑾は、兎に角、部分と全般との別は、措きて、十種より二十種近くを得可けんも、なほ初出の四號活字千頁の一書の外。

近世俗文學史 總叙



337183

に出づると太多からず。本校の講義録中のものゝ如きは洵に稀有の述作たり。異風特俗、文辭不通の外人が日本文学史の著を公にせし

A History of Japanese Literature, by W. G. Aston.

手際の如きは更に妙なり。されば文学史研究の爲に海外留學の教授すらある盛時といへば盛時なり、尙草莽を距ると幾許ならぬ現今、殊に復雜なる近世、江戸時代のとりわけ鎖末の事柄多き俗文学の來歴を叙せんは、特志専門の士たりとも易事に非ず。况してや純文学の一樹をも味ひ得ぬ吾曹が固陋寡聞敢て自圖らず、諸大家の間に立ちて讀者諸君に對せんとするは、洵に嗚呼の業たるを知るも、聊だに諸君が研究の同伴ともならば望外の幸なり。

いふまでもなく、人間文化史上の一現象たれば、文運の降替盛衰遂に時と地との外に出でず。禮儀三百威儀三千、禮文の繁縟なりしも、名物度數、蟲魚草木の微に及びて記誦訓詁の詳密鎖末に流れしも、周と漢と時勢の變なり、山東相を出し、山西將を出す、南北畫風の異なるも地氣の差なり。昔趙翼に地氣論ありて天下大勢の動くを論じき。文運は密に天下の降替と消長し、常に威權の中心と移動す。わが中世、京鎌倉あり。京の盛なるは平安王朝文学の昌榮を起こし、鎌倉武士道の京風に

克つや武者物語の男々しきは宮殿文学の女々しきに代り、荒びたる東夷の言の葉も詞華に入りて、清和か宇多か源氏の君はまた光る君に非ず。時を經とし地を緯として、縦横錯綜羅織せる文学の史は此に絢爛の文あり、彼に散漫の地あり、繁簡幾段變化移轉の奇を出して、而も藕絲相牽くが如く、前後相聯貫したれば、密雲滿天星の光幽けかりし亂離百年の戰國を經て、慶元假武以後三百年武江政府の昌平に歸するや、江戸上方は依然として京鎌倉の昔を偲ぶに足る。文運の轉變推移亦然く之に伴へり。此實に人文と時勢と地氣といはゞ三才相具の因果、終に離る可からざる義にて、近世江戸の文学を觀るにも、豫め意を此に用ひざるを得ず。

此講題して『近世俗文学史』といふ。時間の變移を報ずる自鳴鐘はありとも、時代より時代に移るを宇宙に報ずる時辰機は莫しと言へるが如く、人間の歴史は今更ならねど、逝く水の流已まぬが如く、うたかたの消え且結ひ、急湍激流あれば、停水滙湖となるもありて、時期を畫する定則なし。但事變によりて假に分界の標示を爲す、述者の便宜、聽者の便宜なり。故に此に近世といふは外ならず、慶元以後維新に至る、文恬武熙の二百五十年、大數よりいふ所謂徳川幕府佐命の治世三百年を指せ

るにて、語を換ふれば江戸時代なり。蓋頭を回して我邦過去文運の變遷を見れば、維新以後明治の聖代は物質的進歩の甚迅なる、軌近世界的潮流の猛勢なる諸方面特種の事情なれば暫く之を措きて、開國以來維新以往文學の盛時といはれ、論ずるまでもあらず、前に王朝時代、後に江戸時代なり。見られよ、雄渾崇大なる萬葉の四千五百餘首は、假に悉く金玉、後世到底及びなしとするも、惜む可し、藤原寧樂の朝廷はよく後昆に誇示し得る散文を有せざるなり。三十一文字の短詩形に拘泥せる後の歌界を蔑視し得んも、その豪宕なる長歌の雄篇、後の園秀が物語の詳密なる散文の委曲を缺かずや。彼の歌と此歌とを比するを已めよ。山城の文學は實に大和の文學よりも豊富なりき。平城の詞華は平安のそのの半面に秀でしに過ぎざりき。然り、實に王朝の物語、草子、日記、和歌は時地相湊合して一段の錦繡精巧絢爛人の視聽を聳動す可し。されど一波一瀾起仆斷續の間に推移して、數百年の後江戸文學起るに及びては、之を平安時代に比すれば、平安時代を以て寧樂の盛世に比するが如けむ、否更に太しき差異を見るに易し。熟ら世運の趨向を視るに、内より外に向ひ上より下に及ぶ進歩の潮勢は歴々として指す可し。周の時天子の權は

四

五刑に移り、五刑の權は卿大夫に移り、卿大夫の權は游説の客士に移り、遂に布衣徒卒一躍して天位に登りて漢家四百年の基業を開きしは史家の等しく認むるところ。畏けれども藤氏政を専らにせしも、其末實權地下の輕輩たる武門に叛し、將軍の威輕くして陪臣國命を執り、建武以後南北の亂六十餘州を震蕩するや、舊門閥悉く傾覆し、所謂下克上の極處は尾州中村の賤族より、位人臣を窮むる太閤を出せり。是政權實力下推の情なり。而も現世の勢當時の大潮流なれば、豈現代思潮の波瀾、思索の花實たる文化の上に及ばざらむや。果然、室町氏の中葉より、久しく縉紳の手に在り、宮掖の内を出でざりし文學は、亂を僧院の間に避けざれば、是を武人の家に受けて、餘命を修羅、鬪諍の日に繋ぎて、文學思想は大亂によりて四方に傳播せられ上下に波及せり。乃知る可し、亂後の天下を経営せんが爲に江戸の老將軍が道德政治の大綱を提舉して、學者を登庸し、學問を獎勵するや、鎌倉以來國學の樞機を掌握せし冷泉家の末流、藤の惺窩が不思議にも漢學を以て將軍の知遇を受け、學問復興の端を解くや、獨儒學に止らずして、國學の復舊と爲り、獨り儒學國學に限らずして、新文運は中流以下の爲に所謂俗文學を展出せり。我邦の戯曲、小説、俳諧、其

他の小品は此に至りて始めて見る可し。而も二十一代集の流は絶へずして加ふるに寧樂萬葉時代の昔を復へさんとするあり、中古王朝の古文を擬するあり、隣邦の古文詩を講述模倣して、唐宋直傳の古作者に凌駕するあり、經術哲理諸科の學亦始めて大に盛にして、餘末西洋のそれと觸接するに到る。豈維新前に於ける二千五百年間文學の盛を論じて江戸時代を第一に推さざるを得んや。而して淺劣の才、固陋の聞を以て此に述べんとする俗文學は、實は其時代文學なり、後の國文學なりと謂ふも左のみ過言に非ず。何ぞや、中古文學の末は流れて此俗文學に入りしもの、此一類の文學を外にして、上を受け下を起す文學の連鎖は殆んど無し。當世の貴んで重しとする雅文辭は悉く擬古の文辭のみ、推して高しとする漢文詩は固より隣邦のもの、況んや二者の末尙此賤しまれし俗間の文學に陥りて、一轉再轉して今に至れるをや。

然りと雖も、翻つて之を思ふに、異なる哉、俗文學の名や。如是の名目、素有り得可きや否、有り得るも當れりや否。實は自知らず、唯世俗の稱呼に従ひて暫く假に云ふのみ。然らば何をか指す。戯曲、院本、小説、俳狂文句、之に類似の輕文學をいふ。

則江戸時代に於ける漢學國學の系統に屬せる外の文學にして、社會が階級制度を存し上下を區劃せしために、彼の保守復古擬古陳套には反して進新創意にてありながら下流文學と貶せられ、其結果又自下流社會の嗜好に投合して不知不識卑陋に流れ、本來の質より云へば、上流文學よりは却つて純美文學の境に在りながら、半以上戯作の名の下に、士君子の爲に貶しめられ居し平民文學なり。蓋し俗は土俗の俗にて續なり、傳へて相習ふ、ならはしなり。故に或は好惡取舍動靜亡常……謂之俗と云ひ、又は俗者含血之類像之而生、故言語歌謡異聲、鼓舞動作殊形、或直、或邪、或善、或淫也と云ひ、當時社會風尚の如何によりて定まるものなれば、或は卑陋なることあらんも、明白に其時俗の思潮を表出せる時代文學には、或意味に於て寧適切なる名ならめ。若し辯を強ゆれば俗文學ならぬ者は時代文學に非ずといはれ、可笑しかる可きも、半面の理なるを奈何せむ。尙若し近世俗文學といふは近き世俗文學と讀まば又讀まる可きほどの意なりとして敢て追迫せず。其史は上記の範圍の文學の變遷を叙するものとして已まむ。

斯くて歌謡一面の寧樂文學は散文を得て兩面具足せし平安文學となり、上流一

八
方の平安以後の文學は江戸時代に至りて上下二流並行となりしも、なほ上下混一に到らざりしが、兎に角此に下流平民時俗普通の文學は發達して、以て維新後今日の新局面を開く先提とはなりき。此の如きは階級制度の末路に當れる徳川三百年間社會の趨勢、いはゞ階級平等過渡時代に已むを得ざる現象にて、碁を圍み琴を彈じ、謡曲能會を樂しむ上流の上品に對して、將碁を指し三絃を彈き芝居物眞似に快を盡くす下流の下品、尙例之は狩野土佐派の古雅なる畫に對して、當流新様の卑俗なる浮世繪あるが如きのみ。雅俗上下豈初より別あらむ習風の久しき人と物と自兩岐に出で、階級の陋制ながく其疎通を妨げしのみ。

然れども既に云へる如く、近世を江戸時代と限りしは素便宜に出づ。漆々絶へざる流水の源に溯れば、江戸時代の俗文學とて、其來由なかる可けむや。之を後世より論ずればこそ雅なれ、上品なれ、源氏榮華の諸物語は王朝公家盛代の世俗物語、源平盛衰記、平家物語、太平記は武家時代の俗を描せし時代小説なり。歌謡の類亦全じ。それ等の末轉化して徳川幕府の世所謂俗文學とはなれり。故に系統を論ずれば實錄風の小説は鎌倉足利時代の演義歴史の後なり、淨瑠璃院本は物語謡曲

より統を引き、浮世草紙、草雙紙は古くは繪卷物を祖とし、新しくは御伽草子を父とし、院本より脚本出て、實錄物よりは讀本小説轉化し、俳諧はもと連歌より起りて發句となり、其末下りて柳風の俗に落ち狂句のこれより轉出せしは恰も狂歌狂文のが歌雅文に於けるに同じ。其變化轉遷の詳は尙後に各章の下に説く可きも、陽はたゞ黑暗々たる玄雲密なりし室町時代にも、下層思潮の暗流は甚盛にして、文界の新氣運風に動きて徳川江戸の盛を致すに到りしを忘る可からず。

昔者雅典の黄金時代去つてアレキサンドリア學藝の藪淵となり、四蠻羅馬を蹂躪せし日、經藝の士雲の如く東ヒザンチオンに向ひ、長安、雒陽或は榮え或は衰へ、江南江北華發し實熟する、皆地氣の盛衰に伴ひて遷移し、世運の張弛と消長する、文運の泰否。古今を通じ東西に亘りて免れざるところなり。我邦氣運の西より東し、南より北せしは史上の大趨勢、殆んど争ひ難し。但鎌倉の京に對するや、關左草莽を招く尙久しからず、西に奎星光幽けくして又東方の文運なほ盛ならず、早くも承久の播遷、蒙族の侵掠を経て天下南北の大亂となりしが、後徳川氏の起るや、勢再び回りにて躋之にすぎ治泰三百年に及ばんとして文化遂に東せり。現時東都の學教

天下に冠絶して京阪及ばざるもの、假令政權のよる所に會するも、なほ洵に江戸の盛に負ふ所多きを知らざる可からず。而も事は動かし易く想は移り難し、社會思潮の流轉はつねに國家事變の推移の如く急ならず。故に江戸開府の後凡そ百餘年、元祿寶永正徳の際に至るまで武江の繁華は猶京大阪に過ぐる能はず。従つて文藝學術の中心も西に残りて尙東に移されず。之を事實に徴せよ、明善院惺窩の門に出て、博識強記、關左文物の草創たりし林道春は、夙に江戸將軍に聘慶長十一年せられて註記の職は備はりしも、京師の學徒、講習堂を堀川に開きし松永昌三は、貞門の開祖、長頭丸が子にして、其門下に出て東下きて盛を林家に競ひし木門の主木下順庵とともに皆京人なり。紀州の儒官、那波道圓は、播磨の人、尾陽に聘せられし堀杏庵は、近江に出づ。谷時中等一派の南學は、土佐に行はれ、寛文延寶の交朱學を奉じて當世學風の駁雜を排き、嚴厲一代を風靡せし山崎闇齋は、京人、其學は南學に出づ。中江藤樹の始めて陸王の學を説き、其門下より俊秀經世の偉才熊澤蕃山を出だし、學行化澤亞聖の稱を江州に得、學究の習を脱して經倫の功業を備陽に立て、貞享元祿の間篤學敦行の伊藤仁齋あり。豈京都中心の時代に非ずや。次に之

を國學に觀るも亦然り。當代上行の文學にて儒學は道德政治の大本、學界の大幹なれば、他の諸學藝と同じく國學も之と相繫縁し相反激して降替せしは自然の趨勢なり。蓋二條冷泉の秘事、有職古實の奥儀は、輦轂の下に在るも與かり聞くを得ざれば、國學の東せざるは儒學よりも甚しきものあるは素より其所のみ。古今傳授の細川玄旨の門に關西國學の土として出てたるは實に儒の昌三の父、松永貞徳にして、次で大阪に下何邊長流、釋契沖の二人出でて復古派の魁を爲せしは、之と相前後して全じく二條冷泉家の拘束を蔑視せし東武の隱家茂睡が及ばざるところ。北村季吟貞徳に學び出藍の奇才を抱き、元祿の初年關東に下りしは、木下順庵が東下と相前後して形蹟亦頗る相肖たるも、遂に木門の儒界に於けるが如くならず。歿年に於て伊藤仁齋に後るゝ三十年なる荷田春滿が、洛南稻荷山に崛起して儒學の興るに感奮し、東山に國學校を起し、芳菲なほ東に移らざる斯道を以て、遂に江戸の湯島の聖堂に相對せんとせし日、關左の國學末見るに足らず。豈關西中心の時代に非ずや。然るに延寶以後三四十年間、京師の文物華實備はり、儉薄の土俗之に培ふ

長流は貞享三年歿、
 契沖は元祿十四年歿、
 示寂は二條冷泉の父、
 永三は五年歿す、
 茂睡は長流の父、
 北村季吟は貞徳の門下、
 順庵は木下順庵の字、
 昌三は松永貞徳の父、
 昌三の父、松永貞徳にして、次で大阪に下何邊長流、釋契沖の二人出でて復古派の魁を爲せしは、之と相前後して全じく二條冷泉家の拘束を蔑視せし東武の隱家茂睡が及ばざるところ。北村季吟貞徳に學び出藍の奇才を抱き、元祿の初年關東に下りしは、木下順庵が東下と相前後して形蹟亦頗る相肖たるも、遂に木門の儒界に於けるが如くならず。歿年に於て伊藤仁齋に後るゝ三十年なる荷田春滿が、洛南稻荷山に崛起して儒學の興るに感奮し、東山に國學校を起し、芳菲なほ東に移らざる斯道を以て、遂に江戸の湯島の聖堂に相對せんとせし日、關左の國學末見るに足らず。豈關西中心の時代に非ずや。然るに延寶以後三四十年間、京師の文物華實備はり、儉薄の土俗之に培ふ

に足らず、儒學東遷の漸は水戸史館開創、林家木門の盛と相待ち、元祿寶永の間、綱吉將軍、英學の下に所謂常憲院時代の文物燦然、眼を奪ふと雖も、其學者は十に八九、關西の産にして學統皆上方の移植に過ぎざりしに、江戸府の蓄積已に洽く、豐富餘あるに當り、儒員は士人に列し、蓄髮して俗に歸し、幕府官學の規模定まり、諸藩皆爲に風靡し、國學の建設、儒者の招聘、一時の風尚と爲るに及び、享保年間、萩生徂徠、江戸に興り、古文辭を以て古經の楷梯と爲し、自一家言を立て、復古學を唱へて、盛代の好尚に投じて、大平を粉飾せんとするや、門下の俊才、太宰春臺、平野金華以下、多くは東國の人、若しくは東國に縁故あるの士にして、關左の學遂に興れり。蓋しその始關左は、風氣健剛、俠武にして、下に文なく、林家學權を壟斷して、門族の外に出づるを防ぎしも、元祿以降、江戸の繁華、前古に超絶して、京都を凌ぎ、昌平年久しくして、武門學士を重んぜしより、從來講業を生と爲して、祿仕を甘んぜざりし者も、貧苦の中に世を終ふるを迂とし、功名を求めん爲、東に嚮ひしより、木門の盛、林家を壓し、譚園の學起るに至りて、文運の東漸成れり。之を徂徠の力なりと云ふと雖も、亦時勢の變にあらざるや。然り。國學に加茂眞淵あり。荷田春滿が建學の業を果さずして、歿す

や、之に従ひ學びたりし加茂眞淵は、田安侯に仕へて、江戸に家し、絶倫の異才を以て、高古の文辭を作りて、四方を風靡して、江戸の國學大に起る。蓋し儒界の徂徠と頗る相似たり。而して、譚園縣居二大家、年紀相距る約三十年、歿年相距る四十年のみ。

徂徠は享保十三年
歿、享年六十三、眞淵
は明和六年歿、享年
七十三

以上はわが所謂俗文學以外のものなりと雖も、文學中心變遷の論なり。若し夫庶民の嗜尚に投じ、戯好に適する下行の俗文學に至りては、此變遷推移更に甚しきものあり。當代の儒學國學に縁故深き、貞徳は實に又近世連俳の祖にして、寛永承應間の俳壇は實に貞門の獨占に歸し、次で西山宗因、大阪に談林の一派を立て、松尾芭蕉が初、貞風を慕ひ、中頃談林に學び、終に所謂正風を江戸に唱ふるに至り、貞享文祿は三派競争の世にして、且東遷の氣運を示せり。之を小説に見よ。天和貞享文祿を盛世とせし、井原西鶴は大阪の人たるはいふを待たず。其浮世草子の先を開き、し、假名草子の作者、山岡元隣、淺井了善等も、上方の産にして、其浮世草子の後をつぎ、し、西澤一風、都の錦、錦文流、北條團水、みな大阪に出て、八文字屋本は京都より出で、更に下りて、稍流派を異にせる上田秋成も、京阪の間に生歿せり。近松門左衛門院本

を浪華に作りし亦此時に在り。而して江戸に在るところは何ぞ。管僅に岡清兵衛の金平物語、近藤清春の赤本等にすぎざりき。亦關西を中心となすに非ずや。西鶴は仁齋より少きと十數歳、門左衛門は徂徠より古きと亦十數歳、八文字屋本が多敷を作せし江島屋其積は荷田春滿より二歳の兄にして年を同うして世を去り、竹田出雲は眞淵より老ると六歳。略上下兩行文學の盛世相當るを見る可く、其積自笑南嶺の徒逝きて、明和安永以後八文字屋本衰へ。門左衛門浪華に出て、後九十年にして、院本も豊竹二座の操ともにも漸く衰頹せしは、亦明和安永以後なり。而して關西俗文學の漸衰此の如きに當り江戸の下流文學界を見れば多田爺が『遊子方言』、『洒落本』の起源を開き、建部綾足が『本朝水滸傳』、『讀本小説』の先驅を爲して、江戸の俗文學を興したるは、共に明和安永の際にして、其前數年間に當代後期の俗文學の大家たる山東京傳、十返舎一九、曲亭馬琴、並木五瓶等相續ぎて生れ、其後數年の間に式亭三馬、次て柳亭種彦は生れたるなり。故に國學の風雲を一變して東西轉移の大關鍵を爲せし加茂眞淵の歿年は恰も戯曲小説界に於ける前後轉振の

南嶺は寛延三年歿す、加茂眞淵は五十歳、恰も田安侯に聘せられし年に當り。

『遊子方言』は明和七年、
『本朝水滸傳』は安永二年梓行

時機に相當せり。また一奇と謂ふ可き歟。

以上儒學の先づ東漸し、國學の從つて關左に移植し、俗文學も亦遂に京阪を棄てて武江に後期の全盛を開かんとするに至れるを略述せり。然るに儒學は談門の傳播より學者の黨争となり、文章布衣の手に落ちて文化中心の動搖を致し、更に關西實力の濫蓄を見るに至り、國學も西に本居宣長の古學古道を説くあり、下りて桂園派の和歌遙に平田流の神道と相對して天下の耳目を聳動するあり、必ずしも一び東都に移されし華實は常しへに之と終始すといはざるも、俗文學は此に於ては稍異なり。何ぞや。儒學は如何に布衣に落つるも遂に市井庶民の戯玩に適せず。蓋し天祿以降豊富の極致に達して幕府の資力漸く細く諸侯の府庫亦既に窮き、功利の臣用ひられ經濟の談行はれ、貨權實力井市に落ちて買人の手に歸せしかば、時勢は空理よりも實利を先とするにぞ、八代將軍已に有司の政を好みて儒士の空談を喜ばず、祿仕の學は自衰へて市井の學時勢に應じて起りぬ。修辭考據の漸く年を逐ふて盛なるは此によれり。奈何せむ儒の學主とせるは經世にあり、其修辭はまた時俗の文詞に非ず。然らば國學はよく市井の民庶に入る可き歟。神道の説

は説道經世の類、歌文は詩誦の屬、徵古有職亦一種の考據學にして、同じく時俗の者に非ず。彼は隣邦教學の様、此は古文學の倣たるを以てして、ともに學者の門戸を出て難し。然らば社會思潮の流行に順ひて、民庶好尚の趨勢に應ずるは何ぞといは、戯曲小説其他の時俗文學に外ならず。蓋し爲政の大本たり、上流の儀表たる經學國學は或は立制に従ふて隆替す可く、或は大家の出歿學派の起仆に由りて盛衰し、假令政權の中樞たる首都のそれに及ばざるも、尙地方の重鎮要地に起るを得可しと雖も、獨世態人情と密接の關係ある俗文學は、時風民俗に於て天下列藩士庶の模倣の標準と爲す都門の外に立ち難し。文學の中心一び東武江に遷りて後、尙鴻儒歌客の京阪に崛起し、間、尾濃鎮西に名を得るあるも、江戸市井の豊盛殷富なほ地方の後に落ちず、華奢なる嗜好、輕靡なる風尚の大都の面目を維持する間、その俗文學の天下を風靡して敵なかりしや、因より其ところなり。若し三百年泰平の後、維新の震蕩、西南を以て東北に克つ之餘勢、貨權とともに政權をも併せて西せしめたらん歟、既に中心動搖の儒經學、國學につぎて俗文學、或は西し南せしならんも、知す可からざるも、大勢此に到らずして、大阪遷都論は席上の空論に了り、江戸は東京

とりなししかば、西南の學者も東し京阪の歌學も風華に従ふて東下せるにぞ、亡びし江戸の俗文學は新に東京現代の新文學を繼嗣に得たるに非ずや。されば上行の學は此史の範圍にあらざれば、暫く措く、下行の俗文學が當世學術東遷の大勢に漏れずして東し、其東する前、東せし後、各一期を爲せりといふに誤らず。

但以上説く所は時勢と地氣とに順應して近世文學の東遷せしを證し、以て以下の敘述に前後地を異にせる二期を分たんの意に外ならず。その東西に於ける變遷推移の詳は別に章を改めて説く可く、此に論ずる要なければいはず。或は小説にありて延寶以前を天和安永浮世草紙の時代と區別して前期を兩分し、江戸時代と對立せしむるあり。或は淨瑠璃に於て天和以前を貞享寶曆間の極盛時より分ちて明和以後と三段の變遷となすあるも、此には共に採らず。暫く天和、元祿、享保前後京阪の盛時と、文化文政を極盛とせる江戸時代とに別ち、更に其中各別の變遷隆替につきて期を小分せんとす。蓋し異見に非ず、小説戯曲などを別てる一種別の史と俗文學といふ總史との間、已むを得ざるの差別なり。

是本史開講の總叙。尙云ひ漏らせしものは各章各節の下に述べ可く、本史講了

の上は更に結論一編を設けて、顧みて俗文學と他の文學及社會風尚の變遷との關係等につきて愚見を述べ可し。請ふ先前期の發端より入らむ。

第一 前期

總叙に畧説せしが如き事情の下に、近世俗文學の史を前後兩期に分ちしと雖も、素より叙述の便宜、聽者の便宜に過ぎず。此期に説かんものは過渡時代の物語、實録體小説、御伽草子、浮世草子、淨瑠璃正本と院本と、貞門談林と鼎立して遂に之に克ちし正風俳諧、及び元祿前後の小作雜著を包括す。従つて其時代も浮世草子の終局は畧院本の衰頹期と相合ふあれば、物語類は夙に少くなり、實祿物は遂に後に及び、俳諧に於ける江戸上方座の分裂など、前後錯綜して吻合せざるものあるも是非なし。自然の變化は人爲を以て律す可からず。各物によりて系統をたどり一起一仆波瀾を見る可く、若し彼の波瀾と此の波瀾と相似、相及ぼすあり、前波後瀾相望むわらば、消息を其間に解するを得んのみ、而も大體に於て前期は自前期たる可し。今便宜の爲此期中につきて小説風のもの、を先とし、戯曲院本の類を中とし、歌謠詩形あるものを後として説かむとすれど、其間或は彼此相亘るものなきを得ず、又相離れざるを得ず。此の如きは能ふ丈、別叙をなさんと志すも、なほ聽者に於て参照の勞を採られんことを切望にたへず。

第一章の二 前期小説草子の起源

當代に出で、俗文學の先途を開きし最早き著書は實經談にて、石田治部少輔三成の臣山田志摩の女にて寛文中八十餘歳にて卒せしあんなが見聞を記せる『あんな物語』、大阪にて伏君の侍女たりし菊が實歷をかける『あきく物語』、断片の談柄を集めしものには、元和九年の頃板倉侯の爲に安樂庵策傳が編みし『醒醉笑』あり。半史實に近きを以て實録物の泰斗として、事變を距るとなほ太遠からざる當時の世人に歎び迎へられたる小瀬甫庵の『太開記』も當世の巷説を種に作り物語として一篇の結構を具へたる小説『藻屑物語』も、ともに寛永二年に出で、院本正本の始ともいふ可く、淨瑠璃の名の起原なりとも云ひ想はれたる『淨瑠璃御前十二段草子』、さては説經與七郎が正本『三莊太夫』の世に出でしも、亦此前後に在り。淨瑠璃正本の上は別章に譲りて暫く云はざるも、之より始まりて寛永降りて寛文延寶に及び

平林氏京都野願寺
中林院住僧
醒醉笑の撰者
九年正月八日
九

附録の人物は元
和二年の成物記
ともしは、大開記
りしは、寛永二年
の序は、寛永二年
の初は、寛永二年
の流は、寛永二年
の喜は、寛永二年
の州は、寛永二年
の賀は、寛永二年
の加は、寛永二年
の七は、寛永二年
の八は、寛永二年
の月は、寛永二年
の七は、寛永二年
の八は、寛永二年
の九は、寛永二年

元和貞享以前に幾多の草子續々世に出でたり。されば『醒醉笑』は『平二段草子』、『三莊太夫』のことに詳し、以下に略す。元和貞享以前に幾多の草子續々世に出でたり。されば『醒醉笑』は『平二段草子』、『三莊太夫』のことに詳し、以下に略す。元和貞享以前に幾多の草子續々世に出でたり。されば『醒醉笑』は『平二段草子』、『三莊太夫』のことに詳し、以下に略す。

然らば寛永、正保は如何なる世ぞと問はゞ、少くも徳川史の一篇を読みし者は幕府草創の世たりと答ふるに躊躇せざるとともに、文學また未開けざるの時たるを知るに難からず。試に年表を覽よ。大阪冬夏の御陣は未だ十年の昔に過ぎず、權現様御他界ありて、愷窩先生逝き、福島殿の改易はたゞ昨今の噂に消えやらぬ、寛永の始は北村學吟、山崎闇齋の生れし年なり。三代將軍の世上野に大成殿を建てられし寛永十年には松永貞徳は六十三、林道春は五十一、浪華に國學復興の魁となるべき下河邊長流は十歳の總角、契沖阿闍梨はなほ生れず、江戸の隠士戸田茂睡は僅に五歳の髻見なり。更に十年を経て寛永の末諸家系圖の成りし時は契沖は四歳井原西鶴は二歳。翌くれば正保元年、長崎の人和泉屋半三郎が江戸に出て、書店を池の端に開き、古本の賣買を始めし年は、伊賀に松尾芭蕉が呱呱の聲を挙げし年に相當せり。後數年にして木下長嘯卒して、近松門左衛門生れ、慶安の隠謀ありて四

代嚴有公(家綱)の世と明曆に道春卒し、萬治に昌三逝き、寛文に到りて其角、文章、鬼貫、李由等俳界一方の雄一時に生れ、八文字舎本の名に高き自笑、淨瑠璃作者の一人、紀海音も、西澤一風も皆寛文の中ころ數年の間に相次で生れ出でぬ。されば寛永より寛文、延寶に至るまで五六十年間は、徳川幕府大猷、嚴有二代創業の後を享けて守成の始を慎しめる世には、江都の豊富漸く積蓄して、なほ未常憲院(五世綱吉)時代の極盛に達せず、儒學の氣運東に遷らず、國學もなほ復興の隆勢に向はざる代に、しあれば、従つて俗文學の田園は僅に荒蕪の地を拓きて、耘り耕し種蒔き培ひて、苞芽年とともに長せんとする間に屬せり。花は今蕾もかたし。その開き出づる紅紫、繚亂の三春の節は、元和貞享以後に在り。故に此間に出でし若子の艸紙は、假令多く揚ぐるに足るものなしとするも、當に到らんとする未來の昌運を豫期して、平民文學の前途を慶して可なり。

既に草莽を去る遠からず、勢蕪雜なり。あらゆる雜草は、ちのがじ、生ひ茂らんとするも、とり出て、これといふ可きはなし。尙舟筏を用ふるの大江をなさず、その源は甲の洄流、乙の溪水、右より、左より、流れよりて何れをか本、何れをか支、別つ

可くもあらず。たゞ多く、多く落ちて集りて、楚に入らんとはするなれ。寛文、延寶以前の様はこれなり。世界の歴史を繙かば、四方航交の功負ふと多き磁針の用と、戰術の變化を起こせし火藥の發明とともに、思想界の壘壁を打破して、中世暗黒の世より近世の文明の光を發せしものを印刷術と爲すを知らむ實に我近世文學の昌運も印刷版行の盛によりて盛とはなりき。爲政の大本たる儒經、宗教の至寶たる内典より上流貴族の用たる古國學の文のまきくもみな出版のこと行はるゝに至りて始めて、廣く知られ多く讀まるゝなれば、まして下流のもの、貧しきもの、見る可く樂む可き庶民文學に到りては、割腕の業興るに非れば、遂に盛世に達し難きは、理の暗易きとなり。翻つて我邦印刷術を史上に徴するに、夙に天平勝寶年間に律三、大部、天平寶字年中には百萬塔用陀羅尼、神護景雲年中には東西塔用無垢淨光陀羅尼の板刻印刷ありて、印刷術の端を啓きしが如くなれども、實は文學は朝堂上流の手に限られし世の、文書刊行の要ありて起りしには、おらで、佛教一時隆典の勢に乗じて、偶然此に及びしにすぎざりしかば、忽にして斯術廢れて、遂に中絶し、遂に下りて南北朝の頃、室町幕府の末年、豪強文治に意ありて、文教を保護する者、間々書籍印

行のことを企てしも亦盛なるに至らざりき。然るに徳川氏江都開府の後に至りては典墳の探求に急に普く天下の遺書を集めんとし文教の興隆に専らにして活字板行の業は儒者の招聘學校文庫の開始とともに盛に起れり。試に駿府記を繕く者おらば夙に慶長十九年の條中だけでも十餘條の遺書に關する記事を發見す可く慶長元和の間十七年間には『日本書紀』『貞觀政要』『東鑑』『周易』『孔子家語』『武經七書』『群書治要』『大藏一覽』等大部の古書の活字刊行に附せられしもの太多くましてや慶元冬夏の陣以後天下統一昌平の時に遭ひては江戸將軍家が世益權現様の遺志を紹述したるは明に『寛永諸家系圖傳』『本朝通鑑』等の大編纂を出せしに徴するも爭

ふ可からず。萬治寛文に至りては愈益盛なり。さるからに勢何時までか政治書たる儒經の訓點傍訓に止る可き。わが古文學復興の氣運も動かす可く源氏大和伊勢の諸物語の出版その註釋とともに多く世に出で就中雙が岡の法師が遺著は朱學性理の説用ひられて老佛に歸着せる世として其神儒佛綜合の世間觀を迎へられてはしなくも世にもてはやされしとはいへ貞享に至る間に十三種の註釋書あるに至りしを想へば如何に當世古書註釋業の盛なりしかは類推すると難からじ。實に因果の理法は争はれず系統なきもの突如として來る無し徳川文學は復興の古文學に負ふところ多くして或方面にては後期の末に至るまでなほ舊套を脱せざるなればまして此頃の作物は『徒然草』に摸し『伊勢物語』に擬し其他近くは室町時代の物語のあとを追ふて体裁文字は只管に中古の諸艸紙物語に倣ひて出でたりしを知る可

全九日、今度諸家の記録御寫につきて日本後紀、弘仁、貞觀の格式、類聚、三代格、等仙洞に之ありや否、南光坊を以て仰せ遺さる、同十日、今日仙洞より類聚、三代格、六卷、聖武より後一條の院まで、年代畧十九卷、類聚、國史二卷、古語拾遺等、南光坊院使と爲りて持參夜に及びて道春御前に於て之を讀む、十二月廿六日、傳長老御前に出づ、今度仰せ出さる、一、記録等の内、古事本紀、古事記、續日本紀、文德實錄、三代實錄、江家次第、明月記、續文粹、菅家文章、四宮記、釋日本紀、内裡式、山槐記、類聚、三代格等之を獻る、

同書慶長十九年條に、四月五日、群書治要、貞觀政要、續日本紀、延喜式、御前より五山の衆に出だし、公家武家の法度、御前より日進、上治、要、續日本紀、延喜式等の二十冊、御前に日進、上治、要、續日本紀、延喜式等の爲に諸公家の記録、皆書寫之ある可き由、六月二日、今日卷本の綴、日本紀、不足の所、十卷、此内、五山の衆に仰せて書き寫し、綴、か、め、給ひ、御前に捧ぐ、八月十九日、律令、到來、是は、金澤、文庫の本、關白秀次之を執り、今出川殿に遺さる、九月七日、今日舟橋秀賢死去によつて、繼目の御禮として、舟橋大炊介參若遺物として、十月廿七日、今日、五山の衆、五十人、南禪寺金地院に於て、諸家の記録、一、本、三部、宛寫さし、め、一部は禁中、一部は江戸、一部は駿府に置、か、し、め、玉ふ可き由、傳長老、道春之を奉はる、十一月六日、今日吉田の神龍院、諸家の系圖七冊之を進上す、

し。是一源流なり。品の上下雅俗は暫くいはず、短詩形なる我和歌俳諧は小品にして大作に非ず。故に戦國亂離兵馬恫惚の際、なほ感慨のもれてたやすく詩歌連俳となりしが、拙にもあれ劣にもあれ、やゝ結構を備へし物語艸紙は、載枕の片手間には成り難かりき。然るに大坂陣の後は得意の士は太平昌樂の餘、失意の夫は遺恨發憤の切なるまゝに、欄握りし手に筆執りて、何をがなと想へば、まづ心に浮ぶは近者興亡の蹟、實歴の譚、眼に映ずるは應仁以來百餘年來放棄して顧みられざりし史材にて、拾ふに易く説くに安し。乃報恩の爲に、追憶の爲に、教訓の爲に、褒貶の爲に筆を落すところは歴史物語、實見譚に在り。思へば維新以來三十年元勳古老の實歴談は今の世に迎へらるゝを見ても、寛永正保頃の世に立ちし人々が、或は身まのあたり見もし、父祖より聞及びもせし昔の軍ものがたり、覺書が好尚に適せしや疑なし。さればこそ『平家物語』『太平記』を讀みし世は『太閤記』『北條五代記』を讀むの思切にして感興深きを知り、假令實歴に基づき事實の正確なるなきにあらざるも、嗜好と流行と、さては御當家にさしさわりの件々によりて、事實の幾分は曲げらるゝも、趣味の苟くも多からんことを勉めて、文辭を飾り、實録實歴なる美名の下

に、後の幾多の實録小説の源となりし書を歓迎し、著述するに至れり。則歴史文學にて、亦一源なり。今更ならねど、戦國は無情なり、興亡は無常なり。血を流せし武夫はやがて涙を垂るゝの世捨人たる可し。朝の封侯は夕に匹夫の爲に辱めらる。骨て振りかざせし白刃の紫電の影よりも、果敢なきは身の轉變の電光の如く迅速なるを感じ、修羅の衢の喊聲は討つものにも、討たるものにも、同じ哀の種。されば遁世も、懺悔も、追吊も、泰平の人は亂離の人に若かず、茲に攻伐の手柄話を爲す傍には過去を懺悔し、追吊し、現世の罪を滅し、當來の爲に福音をか説んず、心掛の起るも理なきに非ず。况や人心百年の亂に倦みて、身太平の世に閑を得て、往日喋血の蹟を顧みる、幕初には文教を以て武斷に代へ、力めて荒男の心を和げんとする程に、此機此氣に乗じて、佛菩薩の雲靈、寺刹の緣起、出家遁世の經緯を説くの文學出る、詢に偶然に非ずして、はゞ佛教文學ともいふ可きものも、當代俗文學の大江の一支源とはなれり。然れども源泉は此に止らず。經學の採用に伴ひて、漢土の文辭も千又余年の面目を起し、直ちに彼の文學を翻譯せる『棠陰比事物語』は慶安四年版、(一)と、ともに寛文『御八相物語』の如きあれば、材を彼に採りて、翻譯せし『伽婢子』の類あり、は慶安四年版、(一)と、ともに寛文

り。更に異様なるは西洋文學の移植とも、大袈裟にいはいふ可き、『伊曾保物語』の出版あり。斯く内外古今に通じて、假實精疎を撰ばず、苟くも文藝の材たる可きものは八方に探り、註釋、翻譯、翻案、出來得可き手を盡くして、博覽綜合を務めて蕪雜を辭せず。此を以て文章も述作も、古に擬し外を模せざれば、當世の通用を旨とせるのみにて、其目的只管文界の草莽を拓きて文學思想を普及するにあれば、當世の著者には博識の學者或は之ならんも、創作の天才、獨詣の文章は此時に望む可くもあらず。故に雅馴なる古詞を用ひし前代の諸作、眞字を雜用して傍訓を便とする後の諸作の間に於て多く假名書なるによりて、假名草子の名稱を得たる寛永以降延寶に到る五十餘年間述作の諸著が多面多様にして蕪雜なるは素より其ところ、實に將に來らんとする、西鶴の浮世草子以下の盛運に到達する經路階梯のみ。

以上は前期俗文學散文の準備時代なる寛永延寶間所謂假名草子のあらはれし總叙の概要のみ。而して此假名草子はいはゞ浮世草子以下の爲の陳吳に過ぎざれば其提唱先發の功は到底没す可からざるも、其業はさして詳論す可きほどの價値あるにあらず、また一々批評するほどの餘裕は此になし。故に其中の著はれたる

もの、心つきたる節々につきて若干條を費やして、前期の盛時たる浮世草子の世に及ばむ。若し夫或は一條盡きて次條に移れば時代の前後もある可く類によりて彼此附記するもあれば内外本末顛倒の感もあらんも、こは唯叙述の便宜によりて次第せしなれば讀者の前後参照されんことを請ふ。

抑當時の諸作は未だ整然たる類別の下に繋ぐ可きほどには發達せずして、一部の中に幾多の異りたる話柄を列載せし話本の多ければ、内容の區別は充分になし難く、たゞ大概の體裁と略内容の様とを參酌して、兎に角一部一條の續物語と、其條々は假令優に前者に拮抗するに足るもあれど、なほ他の雜多なる談片と蒐錄列載せられしものとの二つに別ち得可し。今まづ後者より始めむ。世に近世戯作の起原を如鑑子の『可笑記』に始まるよしをいふは、實際當時の情勢にまことに然るものありしならんも、時代を以て前後を論ずれば、安樂庵米傳が『醒睡笑』も、イソップ寓意譚の翻譯も、さては一部一趣向のものにて、『薄雪物語』『藻屑物語』『二人比丘尼』も『可笑記』に先ちて世に出でたり。『醒睡笑』は寛永五年板倉侯の奥

元和元年の頃安樂庵米傳の所望いたし承候へば別而付て書に據れば、元和元年頃より筆を起し、一兩年を経て成りたるも

御書集候而草子に
いたし給候やうに
申候處一兩年過ハ
冊に調給紛失可仕
也存典に書付置
寛永五年三月十七日
重宗

のにて、著者の自序には元和九年とあれば、兎に角元和の中ごろ
になりしものと云ふ可く、『可笑記』大本の出版の年は策傳歿去
の年に當りて前後約二十年の差あり。策傳が名は安樂康烈と
ともに茶道に高きも其話の上手なるを知る人稀なればとて『近
世奇跡考』に之を紹介せし京傳は此書を萬治元年の上木と記せるも、世に元和寛永
の諸版ありといへば、述作に於ては素より世に出でし『可笑記』の後にはある可か
らず。何れにしても今を距ること二百八十餘年の昔に成りし此書を以て戯作の
始となすも強に過當にあらじと信ずるなり。

自序にも、奥書にも明示せる如く『醒睡笑』は八巻にて、題號の意は、策傳自是年七十
にて、柴の扉の明暮心をやすむるひましく、こしかたしるせし筆の跡を見れば、をの
づから睡を醒まして笑ふ、さるまゝにや是を醒睡笑となづけたりといへるにて明
なり。活字本も出来て世に知られたれど、茲に其目を舉ぐれば、

- 卷の一、 なつけ親方、貧人行跡、徳、香太郎、賢立て、
- 卷の二、 調物いんげんものの由來、落書、ふはとのる、鉄副子、無智の僧、祝過るもいな物
- 卷の三、 文字知顔、不文字、文の品々、自墮落、活僧、

卷の四、 聞多批判、以屋那批判、曾而那以合點、唯有、

卷の五、 疑心、上月、人はそだち、

卷の六、 兒の噂、若道不知、戀の道、情氣、陰ない秘密、推は違ふた、うそつき

卷の七、 思の外をいふ、いひ損はならぬ、似合たのぞみ、廢忘、謔、舞、

卷の八、 頓作、平家、かすり、秀句、茶の湯、祝濟多、

等四十餘類に別ちて毎類數條のをかき談話をのせたり。例之は曾而那以合點
といふ下に

兒に髪をゆひて参らす侍従ある朝我をば何程ふびんに思し召すやとふ、見櫛の齒に
水をつけ、其髪を落し、此露程大切なるよしあれば、曲もなや、なんぼう奉公いたすも、いたづ
らことやと深く怒みける時、

塵といふこころをまらぬはかなさよきゆるばかりにおもふわが身を、

などあるが如し。又其數多き中には今もなほ世俗に残れるものも少からず、純副
子の條に

小僧あり、小夜ふけて長棹をもち庭をあなたこなたふりまはし坊主是を見つけ、それは何
事をするそととふ、空のほしがほしきにうちおとさんとするにおちぬといへば、さて
鈍なるやつや、それ程さくばなふてなるものか、そこかは棹がとくまい、やれへあがれ
といわれた、おてしはさも候へ師匠の指南有がたし

など是なり。又中には戦國末の諸家の逸話など見聞のまゝをかしきを探りたるも多し、降りて延寶天和の頃京は祇園眞葛が原に聽者の耳を樂しませ、人嘲や來た野の露の五郎兵衛が夷落に知られし名物の話、さては元祿のころ江戸に書き残す『鹿の巻筆』の武左衛門が仕形話など、相傳承して、此策傳が『醒睡笑』は話本のはじめたるとともに、また俗文學のはじめといふを得可し。たとひ滑稽と諷刺と、訓誡との別はありとも當時の俗文學の一流は半かゝる雜談の排列にすぎざれば。

次にイソップ寓意譚の翻譯古く慶元の際に在りしが如きも、その今世にある『伊曾保物語』の板行は遙に下りて万治年間に在ればまづ『可笑記』を先にせむ。

『めやすき草紙』には大和物語、宇治拾遺、清輔が雜談、今は昔物語よしの拾遺、雜々拾遺、著聞集、十訓抄、曉筆記など有といへども此等にいへる言の葉は、久しく目馴れて聞ふれて珍らしからねばとて、如儡子はじめて可笑記を作り、昭儀坊亦御伽婢子を著はし」と、都の錦は其作『御伽百物語』に書きし通、『可笑記』五冊は如儡子の作なり。寛永十三年の作。版本には寛永十九年の板。別に刊時不詳なる繪入の小本あり。全篇古今の雜談を筆にまかせて書き綴り毎條の冒頭に「むかしさる人の云るは、む

かし云々とかき出し、其さま『伊勢物語』の起首に似て、かき様は稍「枕の草子」めきたるところなきにあらざるも、感慨所思を抒へ、或は事を寓し、世を諷する邊は當時流行の『法然草』にならひしが如き。如儡子は湯村式部といふ武士にて、酒田の城主東禪寺右馬頭を母かたの舅といひ、上杉家の臣大井右近をちといひ、『關ヶ原軍記大全』の選者瑞龍軒怒翁の親族といふも、其經歷詳ならず。たゞ何等かの事情にて牢人となりて江戸に來りしが如き。或は淺井了意が此書の『評判』の作ありしによりて誤りしにや、如儡子を以て了意の別號と爲すは誤れるに似たり。其文の一端を示さば

むかし人のいへるは世間にくきはあまりあるものく、風ひるれおとるかす蠅、鼻たれわ
るさするせがれ、出家の女房をみるまなぐり、わか衆の大食、蚊のはそごゑのまくらよぐる、
どうよく邪道のおうな、出來出頭のおため者、此外さまくある可し、

蓋し此より以前『清水物語』『祇園物語』などありたれど、文摸古に失し、着眼狭に過ぎて多く世に行はれず。『可笑記』一ひ出て、世の歡び迎ふるところとなり、山岡元隣、淺井了意の諸作つぎ起れり。都の錦が當代戯作の先唱を此書にかけしも偶然にあらず。然れども彼イソップの英譯は此際既に成りしが如く、元隣の作に此英譯と相肖

たるものあればまづ此西歐文學の一篇を説きて「誰が身の上」「小さかつき」に及ばむ。但如備子別に『百八町記』の作あれども佳作におらざれば此にいはず。

『伊曾保物語』は名の示すが如く、西歐に名高きインフ寓意譚の英譯なるが、此寓意譚の我邦に入りしは餘程古きことと思しく、夙に繪巻物となりて傳はれるは足利の幕末大内氏が私に外國と交通せし頃渡來せしものにて、慶長頃の出來なる可しといふ。然るに『伊曾保物語』と題して、上中下三冊繪入の假名草子となりて板行せられしは萬治二年なり。卷頭に先づ伊曾保が經歷を叙し、次々に種々比喩寓意譚を譯出し、譚中の人物國名まで覺來なくも原文をうつし、文脈晦澁にして何となく重々しき様は當時にありて随分困難なる翻譯なりしに似たり。或は彼繪巻物より寫したるにやと思はれんも、其文の微細にして重々しきは、全く別に原書より新譯せしものに似たり。近世洋書界の先達たる司馬江漢が『春波樓筆記』に伊曾保の譯書は二百餘年前に在りといへるを採れば、遅くも慶長年間に當れば、其何れの譯なりしや明ならぬも、之を寛永島原の一亂に想ひ合すれば、此書は恐らく、基督

司馬江漢は文政元年十月卒年七十二にて歿したれば二百餘年前は慶長年間に當る。

教徒の手によりて何時しか我邦に入りしものならむ。蓋し中世西歐基督教の僧侶は希臘羅馬の古物語にて教訓の話柄となるものを説教に用ゐしこと盛にて、彼のメスタローヌムの如きも其著きものなれば、全じく寓意の教草となる伊曾保の物語の宣教弘法の徒の齎し來りしにあらざるを知る可き。去年なりと覺ゆ尾崎紅葉氏は當早稻田に縁ある文士講談會にて『武藏の名香、亞刺比亞の林檎、東西短慮の刃』といふ題目の下に江戸幕初、亞刺比亞譚の一書、少くも譚の筋の邦人の間に入りしにあらざと述べられし様なり。就てなほ臆説を
常時(昨年)の讀賣新聞に連載し、近き頃に春陽堂より出る。告あり
違ふすれば足利末葉のお伽草子にある『一寸法師』の如きも或は西人の筋を紛れ入れしにあらざやとさへ疑はる可く、其他西鶴の物語にも唐山の種は勿論阿蘭陀渡り臭きものあり。要するに西歐の俗間に流布せし談柄は基督教とともに此頃多く我邦に入りしにて、ひとり此『伊曾保物語』のみに限らざりしに似たりと覺しく、若し島原の亂より引きて邪宗門禁止令のなかりせば、なほ續きて入る可き西歐文學とともに、幾多の『伊曾保物語』を殘したるらめと疑はるゝはわが一家の妄見歟。當時の狀勢を推考する人の宜しく注意す可き點

なる可し。然るに不幸なるかな禁教鎖國の方針定まりてより、西歐文學移植の途絶え、「伊曾保物語」が當時に及ぼしたる影響さへ如何なりけむ知られざるに終りぬ。但其頃に出て他の教訓ものといふは、淺井了意、山岡元隣の諸作を始として多くは諷刺の意を寓したれば、かゝる物語は一般に讀む可き教訓書少き當世の時尚に適せしならむ。

山岡元隣の作『誰が身の上』六冊は明暦三年の板にて、一編の旨意は省戒にあり、二十四歳の青年作者が筆としては『可笑記』の脈を受けた

元隣は寛永八年伊勢山田に生る、寛文十一年六月歿年四十二。

る名作なり。元隣は有名なる北村季吟に従ひて國學歌俳の道に遊びしかば、其著は當時國學界の風潮に従ひて、多くは古文の註釋書なりしが、中に就きて彼青木宗胡が林道春の『野槌』十三卷より「核華せし」鐵槌四卷にもとづきて『壽命院抄』『野槌』『慰草』『長頭丸抄』『盤齋抄』一寛文十二年四月上木『文段抄』等徒然草諸抄の要領を參取して重撰せし、徒然草鐵槌増補は、斯界屈指の良書として世に用ひられ、其他歌俳の著述も數部ありて、一貞享二年刻、本領は國學者にあるも、眼を世態人情に着け、卑事俚言に教訓諷刺の意を托して此

著あるに至れり。故に當世の教訓草子中に於て名作として後世に残りしが、其書なほ隨筆の体裁を脱せず。然るに今一種の戯作『小さかづき』に至りては更に一段の進境を示せり。元隣は上述の如く學者にして又老莊玄妙の旨を喜びしかば、博識を衒ひ學問を誇るの迹は『誰が身の上』にも亦此『小さかづき』にも顯然として、さも重々しきを瑕とせばす可きが『小さかづき』の中にて特に人の眼をひくは其寓言の小話を集めたる點に於てかの『伊曾保物語』と等親たるのみならず、其寓言の或はすべては彼物語と歸趣を同うしたるさへあるとなり。『小さかづき』は板行年月明ならず、延寶四年の再版には『おま夜の友』と改題せり。『小さかづき』といふ標題は序に『世の人のなさけくみしる小扨下戸も上戸ももてあそぶべし』といへる意なり。元隣が『誰が身の上』『小さかづき』等教訓的小話の脈絡を續ぎて、當時最多くの通俗文學の作ありし淺井了意は更に支那小話の翻譯道中記の滑稽等を始めたり。然れども前已に述べし如く、此前後別に歴史的物語、佛教的物語、さては足利末期を経て續の如き中世雅文の系統を維存し來りし事情の物語幾種かありしを忘る可からず。

『浦庵の』太閤記』が徳川前世の最近の詳を盡くして最大なる歴史的物語たりしは云々までもなく當時浪士の餘業武人の子孫が筆に出でし類似の軍物語又甚妙からざりしも茲には省く可し。但此等の歴史的にして而も單に戦争を主とせしにあらざる二三を擧げんか。『聚樂物語』は秀次の上を記るし、『清水物語』は清水冠者義高のことを述べ、『浮雲物語』は織田信長のことを中古物語様の摸古文に描寫したり。又之より一層小説に近きも、なほ材を史上の著名なる人物事件に托せしものには『百合若大臣』『小栗物語』『武田物語』『辨慶物語』の類なり。

『聚樂物語』は世に知られたればいはず。『清水物語』は古寫本にて、一本六十餘丁、卷末に

此さうしこらんするかた、はれんふつをとなへひしゆやうにおほしめすへきもの

寛永十四年五月吉日

水尺田〇一團

とありて、標題なし、假に清水物語と名くるは、冠者義高がことを描したればなり。

『浮雲物語』寛文元年九月下旬、寺町二條下町高田彌兵衛開板三本、その目の

卷上、まつ葉、

藤波井夏虫、

雲井の月、

征の宿、

こけころも、

かみがき、

旅の僧、

山がへり、

三芳野の花、

なが物照、

夜の村雲、

東下り、

御幸井高麗入、

なごいへるにて、如何に優しげなる文字もて、天資すゝとき織田右府が生涯を寫せるかを推し知る可きなり。但御幸井高麗入の條は勿論秀吉の上『百合若大臣』は嵯峨帝の時左大臣きんみつ、大和の國初瀬の觀音に禱りて男子出生し、『夏の中の若なれば花にもよそへて育てよとて百合若と名付けし其生長せし時』むこくのむくりが蜂起して四萬艘の船とも多くのむくり取乗りりやうさうとくわすいと、ふくもどはしるくも、かれ四人か大將にて筑紫の博多に船を寄せ攻め入るとこそ聞えけれ』は百合若軍功を立つるとをかきたれども、素より『聚樂』『清水』さては『浮雲物語』の如く事實に近きものにあらず。因に曰ふ、百合若大臣とは誰が子にや、諸國に傳説あり、或は日本武尊ならんなどいふ俗説なり、劇曲神史にて一部の主眼となれるには、近松葉林子の『百合若』野守鏡を始として、下りて、江戶山の『百合若丸弓勢名譽』三、南仙樂、池満人の『百合若多武殿』志満人の『百合若軍法』等、江戶

作者が爲に度々引出『武田物語』一卷は上常兩州の大將武田太郎信義謀叛の始末『小栗』辨慶は標題の如し。

中古物語文の後を襲へる最後世の小説に近き趣向素より簡單ながら一部始終の筋通りたる物語の類には寛永二年に『藻屑物語』先づ出てたり。其あら筋をいはゞ櫻川侍従の御許に伊丹右京といふ容色すゞれし小姓同じ小姓の舟川采女と語らひ戀の遺恨にて細野主を打果せしかば、今戸慶養寺にて切腹申し付けられたるに采女之を傳へ聞きて太く悲しみ頓て慶養寺に馳せ至りて右京に殉せる一條にて、後貞享四年板西鶴の『本朝若風俗』卷の三の四『藥は利かぬ房枕念比の中立春の夜は蘭討十六八の花一度に散る事』も亦此心中立の類末なり。曲亭馬琴が此『藻屑物語』にかきそへし『蛇の足』に西鶴の筋と同じきを示して『願ふに件の右京采女が事當時の人口に膾炙せしならむ』と曰ひ、此頃までは戦國の餘風なほ失せずして人々の勇敢なり、こゝを以て女色を好むをゆるしとして男色を歎べるなる可し』といへるは、此物語のみならず、當時に尙種類ある兒小姓、男色物語の總評に代ふ可し。蓋是彼室町幕府の末葉よりの風にて、其頃世に出てし『鳥部山物語』『松帆浦物語』など

と兒物語の系統に屬す。西鶴の『本朝若風俗』と雖も亦同事情同風尙の下に出て、同系統たる可し。然れども戀は衆道の契に限らず、今も昔の物語繰り返へし來ては唯ゆるしとて、已むにあらざ、それかあらぬか寛永九年には著名なる『薄雪物語』出てたり。物語の筋は、後三十年を隔て、寛文四年の板恨之助草子』のと同じく、或男清水に詣て、薄雪といふ女を見そめ、遂に本意を遂げつれど、薄雪身まかりければ、男は髪を下ろして高野山に入れりといふ女色の筋なり。『一本菊』萬治元年板上下は天曆の頃、三條高倉右大臣の夫人は御門の御女式部卿の宮にて云々、『花の縁物語』(寛文六年板)は何がしの左京といふ男、都に上りて、大和屋何甲の女を見染むる云々、『好色花の落合』は武藏國宮戸川の邊に住む池田左京進頼仲といふ者、げんちんといふ僧に連れられて、是も都に登り、藻鹽の君といふ女にあふとにて、皆女色を経としたる物語、單簡なる中古物語の摸擬に過

『花の縁物語』に

姉の小路とやら、うちすくるところに、たがすむ宿ともしらず、あしからぬ家のおくふ
かく木立ものふりて、心あるさまなるを、さし入りて見れば、おくの方に、かたちいとよ
き女のはな山吹のきよげなるを、かことばかりにうけかけ、ちりすきたる花の精をな
がめおりにて、

ふめばおし、ふまれば人のとひがたみ、風ふきわけ、花のまらゆき
とよみしふることを口すまひながら、そばなる高欄にそとよりかゝりたるけはひそ
るに心をつくし、夢にもせめてと戀ひしたひし東山の花のえにし、露まがふべくも
あらず、左京何となくむれうちさわぎて立より侍れば、女見る人ありとくるしげにて、
うちへまぎれいりしを云々

などあるにて、内容と文体と合せ推すに足りなむ歎。而して此等の中に就きて趣
向の稍複雑にて、後の讀本小説の簡なるに近きは『堀江物語』などなる可し。『堀江物
語』寛文七^ノ十一月吉日野田彌兵衛板行は上、中、下三卷。物語の畧は、上野の國の住
人に原の新左衛門といふ六千町を治行する長者に太郎以下男子三人と娘一人あ
り、下野の國しはやの郡三千町を治行する堀江の守の殿頼方の男堀江の三郎頼純
は『辱なくも清和天皇に八代八幡太郎義家には四代の後胤』に當りしが原が娘を娶
りて伉儷睦むく月若といふ男子を生みしに何の科にや堀江家の治行没收せられ

て僅に堀江數百町の主と零落せしかば貪欲なる新左衛門は今更に娘を呉れしを
悔ひて之を引取らんと思ふ折しも藤原の中納言の獨子三位の中將國司と爲りて
下向し、原が娘の美人なるを聞きて原に所望し、相馬の何某等をして太郎等の頼純
を誘ひ討たしむ、頼純太郎等兄弟三人を討ち取りしも衆寡敵せず堀江に討たれ妻
は欺き寄せられ、國司に迫まられて自害す、國司相馬をして月若を捕へて山谷の淵
に捨つ、乳母尋ね彷徨ひて淵に至れば惡龍住みしも義に感じて月若を救ひ助く、奥
州岩瀬の權の守子なきを嘆き熊野詣してかへるさ月若の落魄せるを得、かへり養
ひて子と爲す、後月若成長して事の來由を聞き相馬を殺し、原に迫りて怨を露らす
といふ處に在り。

此外『あゝそめ川』はもらの中將、『美人くらべ』しくれの宴、『櫻木ものかたり』
などあり。國文學復古の趨勢また此等に波及せしところ決して越からざるはい
ふまでもあらず、延寶九年には『源氏明石物語』貞享三年には『にせ物語』全五年には
『衣更着物語』等出でたるに推知さる。『衣更着物語』の上巻は。

昔あちそひたまひし源氏給合のたぐひは古めかしくむつかしければ、たゞきとせよひ

たる名どころの近き遊きを別たす、折にふれたることどもをあらくしくかゝせて、弱子の給合に新しく興し侍らんとて云々、きささの十日あまり、梅は散り櫻は運き春の空雨さへいたうふりつゝきて徒然なる頃、みやこの西お室の御所にして彼御遊を催し玉ふ云々、

とありて、繪と歌と左右十二月廿四番の合もの下巻は不思議の繪扇子を持ち來りて繪様の判断を求めしに、或は業平と曰ひ、或は光源氏と曰ひ、終に東より下りし巫女を招きて判せしむといふにて、推知の一端を得可し。『にせ物語』はいふまでもなく『伊勢物語』に擬せり。其滑稽頗る可笑し。

むかし東の五てうにあふきやのかゝむつらふありけり、西の洞院にくすしありけり、それは本道にてあらて、はりにこゝるふかゝりけるゆへに、行とふらひけるを正月の十日ばかりのほと、ほかとはれにけり、はれとこるはきけど、人の見るへきところにもあらざりければ、なほうしとおもひついなむありける、またのとしの正月には、目とはなとの間に出てはれて、たちて見、おて見みれと、去年に似るべくもあらてうちわらひてあはらほれもいたきに、つらのゆかむまてわらひて、去年をおもひ出てよめる、

つらやあらぬはなやむかしのはなしらぬ
わがみひとつはもとのみにして
とよみて、夜のはのくとおくるになくくおきにけり、

此等の類細に探れば、なほ云ふ可きも、さして重要なことにもあらねば此に措きて、次に佛教的諸作より教訓物に及ばむ。

當時の佛教的平民文學の諸作に出づ可き理は上段に曰へり。その作の最早きは『七人比丘尼』、『あた物語』、其次に發揮せられしは鈴木正三が『二人比丘尼』、『因果物語』、『念佛草紙』の諸作、其系を引き脈を傳ふるものは、『爲愚痴物語』、『海上物語』、『大佛物語』、『殺戒物語』、『阿彌陀はたか物語』、『法華安心糺物語』、『三井寺物語』など甚多し。『七人比丘尼』は作者と時代と不明なれど、或は寛永十二年板との説ありて、又の名を『懺悔物語』と曰ひ、卷中載する要旨は、北朝の貞和年間、信濃なる善光寺街道に旅舎の主たる、こ阿彌陀佛といへる比丘尼、こん阿彌陀佛以下四五人の比丘尼を手助として、人々に湯接待を爲しながら、各罪障懺悔の爲めに語りし、身の上ばなし七ヶ條を連ねしものにて、足利時代に出てたる、『三人僧物語』に胚胎せしとぞ。次で寛永十七年春平爲春の著、『あた物語』(御池通俵屋町松屋六右衛門版出づ其跋文に、

此物語兩卷者東關之注三浦長門守平爲春通稱御卷

徳川時代俗文學史 第二前期 第一章の一 前期小説草子の起源

平爲春とは通稱正木勝兵衛
父三浦左近太夫那時母は北條
民隆の女、天正元年小田原に生
る、承應元年七月紀州に卒す、享

定卷所製而與女子也、披而見之則詎三寶於諸鳥而貌年八十法名大雲院日健、
得者也

といへる如く、諸鳥に寄せて佛教の理を説き訓誡を垂れたるものなり。然れども最篤く三寶に歸依して、世間の法をも之を以て説かんとせしは鈴木正三なり。正三は通稱九太夫、參河武士にて關ヶ原、大阪、冬夏の陣に従ひて軍功を立て、元和の始大番士たりしも、夙に佛教に歸依し、元和九年或は六病と稱して致仕し、出家して名を正三と改め、遍歴十餘年還りて參河國石平山思真寺に住し、石平道人と號し、慶安元年江戸に下り、明暦元年に歿す、著作十餘部みな佛道を説きて、其管に當來の益福を得る便のみならず、又よく現世に於て廣大無量の利益ある由を説く。此の人此主義なれば、宜こそ『因果物語』二人比丘尼等の作なりたれ。『因果物語』(寛文元年の版三冊は怨念妄執の纏綿して霧れやらぬありさまを、世の出來事に假托したる小話集にて、『二人比丘尼』(寛文四年版)二冊は戦死したる下野の武士の妻、夫の最期の場を吊ひ、不幸なる寡婦に遭遇し、暫時共に住みしが、其臘婦も失せて、愈世を果敢なみて尼となる、といへる佛教主義の談にて、共に正三が『七部の書』の中なり。正三

『又てうす問答』『破吉利支丹』(寛文二年版)等の著あり、取
て擧ぐるに足らざれども、當時に於ける非吉利支丹の
著として見る可ければ、單に佛教を尊崇して、他教に對
せしことなき古來の佛教文學に異なるを知る知し。
正三が七部の書といふは、『百
安杖』、『龍の草分』、『因果物語』三、
『破吉利支丹』二、『二人比丘尼』二、
『念佛草紙』三、『萬民徳用』一なり。

されど正三は其著『萬民徳用』『三寶論』等に於て佛法によりて世間をも説く可し
とし、『佛法不異世間法、世間法不異佛法』といへる經文を本據と爲せども、未だ儒術の
更に世間法に適切なるを説かず。其之あるは『大佛物語』(寛永二十年暮春版)を始と
せむ歟。『大佛物語』

三世不可得は今のこころを知れとかや、ればんの姿かけなむ人の心そ佛なれ、時し
も今日はきさらぎや中の五日のことなれば、予も亦鳥の巢を立出て、大佛詣と志し、佛
に一禮を爲し、心にもものして後見れば、二玉門のほとりに(中略)立やすらへる若僧と(中
略)としこるまどわねばかりの人(名は一貫)

との間に始まりし問答をしるし、一貫の言ふ

道といふはたゞ善惡二に在り、

本無一物一生二、仁與不仁風馬車

といはしめ、佛神儒を以て世間を訓誡せり。曾我休自が『爲愚癡物語』亦儒佛を兼ね
説きて世教と爲す。『爲愚癡物語』寛文二年、柳馬場二條下ル町、吉野屋權兵衛刊行は
一部八冊にして、其序の畧には

昔よりの我朝の俗によりて和語の草子を見んとすれば、仇々しき好色のをなしるし
て、惡道にひき入るおとし穴なれば、かれも好む可きことと覺えず、唐土のたゞしき書
籍を見んも、文をまなはされば、よむことかたし、今此物語を得て、そのこゝろをうか
ひはがるに、(中略)心をなほしやすく、行ひやすきこそ、まことの道なれど、かれに比し、こ
れにたとへて上中下の機根に應下てしめされぬるとあきらかなり、まことにわか如
きのおろかものも道の心をあらましさとすやうなれば、愚癡の爲に知らしむると、爲
愚癡となつつけられしも宜なるかな、(中略)云々といへば、其こゝろをもつてはしめに序
せよ(中略)とのそまれければ、いなひかたくて、いやしき、缺唇の口よりことばをもらし
ぬるものならんかし。

と曰ひ、第一卷の目錄に、

- 一、人間の善惡は陰陽より起ると。二、陰陽の氣胸中一寸四方にあると。三、儒道天命の
- と。四、佛法因果のと。五、天竺はらぬい國、寶沙門誅罰のと。六、自力他力のと。七、許
- 由果父のと。八、梨平支比丘のと。九、貧福共に渡世の苦は變らざると。十、貧福は人
- によつて心によらざると。十一、我身をつまやかにして人を食らざると。十二、よめ

がしうとめにはやなると。十三、貧して道をしらざれば天の道にそむくと。十四、天の道
をしる人はまつしきを苦しまざると。十五、ちえは人ごとに有事。十六、養生の道しるも。

などあるにて、明かに儒佛を参酌して所謂教訓草子となれり。蓋當時一般に讀む
可き教訓書は甚少く、寛永の末より正保、萬治、寛文の際に至り、追々假名文の教訓草
子流行し來りぬ。殊に中江藤樹の『鑑草』、北村季吟の『唐の烈女傳』、辻原元甫の『女四
書』の如きは全く婦女の爲に作られし假名草子にて、休自が物語も亦一種の教訓的
著作なり。然れども若し人或は當時の俗文學に此種の教訓草子を云々するを難
せんか、道德教訓は江戸政治の大本にして、書を俗間に著はすもの概言を此に立て、
若くば此に托する春水の狂訓亭の末に於てすら見る可きを想ひ合さば、敢て失當
とせられざらむ。况や此等物語中の文脈と話説とは直ちに續き起る諸作と相連
因せるをや。更に况や草創の時代此の如き一草一卉なほ尊む可きをや。而して
此等教訓草子作家の領袖ともいふ可く、又別に一新面を俗文學に開きし率先者と
もいふ可きは、淺井了意なり。

淺井了意の傳は明白ならず、諸書を参照して畧知り得可きところをいはし、號を

松雲子、瓢水子などいひ洛の本性寺照儀坊に住し、寛永十四年に『可笑記』を評したる程の年頃にて、天祿四年に至り遽然として示寂せしと云へば餘程長壽の人たりけむ。故に其生涯は殆んど所謂假名草子時代と始終し、寛文の盛時を経て最多くの著作を出せり。但其文章の平易流暢なるを讀み、其著『東海道名所記』若しは『浮世物語』などの滑稽失策を見れば、風俗を知り、人情に通じ最世故に圓熟して平和なる好僧よく風塵の内外に出入して、此長壽を得、其諸作を殘したるに似たり。著書を讀みて著者を云々せば或は失當なきを保せずと雖ども、豈其大跡を摸探し得ざらむや。『膝栗毛』に一九を想見し得ば、『名所記』の樂阿彌、『浮世物語』の浮世房に了意の髣髴たる儼なしとせむ。

了意の著作は太富めり。佛書にして其著と云はるゝもの大約十數部、殆んど二百冊、軍書に四部六十五冊、古文註釋に四部四十一冊、教訓草子、戯作、雜書に二十餘種、百二三十冊。中に就きて教訓草子の目を擧ぐば、『孝行物語』萬治三年版、六冊、『堪忍

記』八冊、『本朝女鑑』寛文元年版、十二冊、『大和二十四孝』十二冊、『新語園』十冊等あり。然れ共了意の名作は却つて名所記及戯作に在り、且以上説く所の如く佛教若しくは儒佛兩道より主として教訓の爲にせし假名草子の寛文前後に輩出せしを示せば、事既に足れるを以て、了意に就きては名所記、戯作につきて數頁を費やして已まむ。然れ共記す可し、上述の假名草子が教訓を垂るゝと、もに當時の俗文學の一部を占む可きと同じく、教訓草子ならざる假名草子にも尙教訓の意を沒せざるを。了意の戯作雜書は『東海道名所記』萬治元年著作歟、『百物語』萬治二年版、『可笑記』評判』萬治三年版、『武藏燈』萬治四年版、『江戸名所記』寛文二年版、『京雀』寛文五年版、『伽婢子』寛文六年版、『浮世物語』延寶九年版、『大はり子』元祿四年版、『曾呂利狂歌話』『かなめ石』わかうそ』元祿十六年版等あり。中に就きて『東海道名所記』は名作にて最世に知らる。此書は萬治寛文頃の刊行にて萬治元年頃の作と覺し。樂阿彌陀佛といふ僧が上方より船路を江戸に行きて、市中を見物し、さて都に歸らんと芝口に出で、旅の男と道連になり、ともに東海道を上る道中記なり。其中より一節

番中坂の下の條に『九年巳前庚寅の年』云々とあり、庚寅は慶安三年なればなり。

を抜き出さんに、神奈川の條下に

町のはづれ右の方道ばたに、武蔵相模の境あり、坂のしたに、なか村といふ町あり、樂阿彌申しけるは、はづめて此海道を通るものは、こゝにて餅をくふものぢや、この故に此坂を焼餅坂と名づく、まづ、やすみびてら茶屋にこしかけ焼餅をもくひ給へとて、男をつれて茶屋の内へ入りぬ、家の内きたなくして、茶屋のかゝも顔のかゝり、あらくまいうて、貝がらのやうに見ゆ、しかもかほさかなる女房なりければ、男いかにかにぶあしらいな茶やのおかゝトやといへば、只今亭主といさかい侍りとかたる、男とりあへず

家はむさし、さがみる人のかほつきに、これや女夫のいさかひの坂、とよみて焼餅をくふ、樂阿彌この歌のかへしをせばやと思ひ、うめきすめきて案トつと餅をもくはず、やうくかくぞいひける、

むさしとて案のかゝみる人はいさかいはてしちきりきの餅
此坂はむさしさがみの境なるをよめるにや

などあるが如し。『江戸名所記』は亦之と同じ体裁にて、唯江戸といふ丈の差なり。ともに文章には潤色あれども平易にして、滑稽最輕妙に、且事實は傳聞其儘なれば、假令所傳に架空ありとも著者に捏造なく、よく當時の人情風俗地理の實を描せり。故に或は以て、烏丸光廣卿の竹齋草紙に倣へども、細かに体制を察すれば、竹齋は幸ね寓言なるも此書は實を得て風土景物歴々視るが如きを以て彼に優れりと爲す

は、評し得て正鵠に中れりと謂つ可き歟。後の一九の『膝栗毛』などもまた趣向を此に採りしかとも想はるゝ。但『京叢』は中川喜雲の『京わらべ』(明曆四年版)にならひて泄れたるを補ひしといふも、『京わらべ』の外に一步を出てざれば、さのみ賞すべきものにあらざる。

『東海道名所記』の樂阿彌陀佛の如く一編を連貫する爲に浮世房といふ主人を作り、彼樂阿彌と殆ど同じく著者了意が面影を見る可きものは、『浮世物語』六冊なり。物語の始に

今はむかし國風の歌に、いなものトやこゝるはわれがものなれど、まゝにならぬはと、高きもいやしきも、男も女も、老たるも若きも、皆うたひ侍べる、思ふとかなわればこそ、うき世なれといふ歌も侍べり、よろづにつけて、こゝるにかなはずまゝにならればこそ、浮世とはいふめれ、香を隔て、眼をかくとかや、痒きところ、手に手のと、かぬごとく、あたるやうにしてゆきたらず、しんきなものにて我ながら身も心もわがまゝにならぬものなり、まして世の中のこと、ひとつともわか氣にかなふをなし、さればこそ、浮世なれといへば、いやこの義理ではない、世にすめば、なにはにつけて、よしあしな見か、いかないな、いかに、一寸さきは、かかなり、なんのへちまの皮思ひおきは、腹の病、當座、いかにやらして、月露花紅葉に、かぢむかひ、歌をうたひ酒のか、うきに、いいてない

か手まへのすり切い苦にならず、いかかいらぬかたでの水にながらぬ、い願望の如
いなる之を浮世となづくるなりといへるを、それ者は聞て、誠にそれくと感下けり、
といへは、洵に當世太平の民が花の下にて春眠るやうにうか／＼と暮らす浮世を
いひ盡したりと謂ふ可く、水谷不倒君が云へる如く、これ後に起る可き西鶴其碩等
が描寫する戯作浮世草子の世界此に盡きたりともいひつ可し。而して主人公浮
世房の成たちを述べては

今はむかし浮世房とてうきにうきたるひやうきなる法師ありけり、その俗姓はい
とけなき時よりよくはなたれければ、藤うちの子孫なりともいふ、又幼き時はれづみ
まいかうしがくれなをして、人の家ののきのしたにおきふしせしかば、たちばなうぢか
といふ人もあり、又やゝもすればかどわきにすみけるほどに、平氏の一族かともいふ、
それにてはあるまじ、たまにまんぢうをすきければ、源氏の流なるべしととり／＼に申
けり

といふ。此をかしき氏素姓を並べ立てたる男俗の名を浮きに浮かれし瓢太郎と
いひ、若き時は放蕩に耽り、博奕もうては傾城狂もし、徒若黨になりしも、かがて他人
と喧嘩して浪人し、浮世房となり、諸方を遍歴し、諸種の境界に立ちて滑稽に世を諷
し人を諷めなどする一部始終をついれり。斯くて浮世房は曾呂利のおどけたる

風も見え、『伊曾保物語』の遍歴訓誡の條も見へ、何處やらが樂阿彌陀に似て、さては了
意に宵通たるらんと思ほし。

終に了意の作中に採る可きは、『伽婢子』が材を聖宗吉の『剪燈新話』其他に採りて、翻
案を爲し、一面に支那文學の移植に盡くすとともに、所謂百ものがたり、おとぎばな
しの趨勢を作りしこと是なり。但假名草子にて支那文學より移せしものに、當時
慶安四年版の『棠陰比事物語』寛文六年版の『釋伽八相物語』などありしが、了意が『伽婢
子』の翻案は最巧に、文章の平易流暢なる、此種著作中の白眉とも謂ひ得可し。『犬張
子』亦此種類なり。次て作者不詳の『新伽婢子』天和二年版あり、柳絲堂の『拾遺伽
婢子』元祿十三年版ありて皆了意の此書にならひて出づ。而して此等は山岡元隣
の『古今百物語』(貞享三年)、俳林子の『諸國新百物語』(元祿五年版)、文會堂の『玉簪子』
(全九九年版)、都の錦の『御伽百物語』(全十四年版)、青木鷺水の『近代伽百物語』(寶永三
年版等)と系統を同せり。古き版に『めさまし物語』五冊あり、又此類に屬す、何れの時
にや知らず。

寛永以降天和貞享に至る五六十年間江戸幕府の草創時代とともに、なほ草莽を

拓植して初めて起りつゝある小説草子界の状況は略上述の如し。是より東武の江府常憲院殿の貞享元祿の春を迎へて、押照そや浪華渦に西鶴が浮世草子、其系を引き脈絡に繋りて京浪華の戯作の花盛りに、太平の日遅く、八文字舎の屋を潤はす富賑へたる前期の盛時に入る可し。

第一章の二 浮世草子の一

寛永以降茲に始んど六十年、豊富初めて足り、世は泰平の春を樂む常憲院御世の始、天和二年、浪華の井原西鶴「好色一代男」八冊を著して、假名草子の世界は浮世草子にうつれり。

人世百年にして天下の形勢は概一轉す、其半を以てすれば興隆の運に向ひしものは盛榮に達す可く、般豐の極に達せしものはよく銷沈の下底に墜つるに足る。慶元の後既に六十年を過ぐ、白刃を踏み水火に出入せし當年の猛者は幾んど皆黄土に埋もれて白骨空し。算勘の利は漸く劔戟の鋭に代らんとする端緒を生ず。俗文學は此に於て盛なる可きなり。而して其先づ大坂に起り京師に榮えしや、最地の自然氣の必須に順應せしと謂ふ可し。蓋し東武は武將覇業の地、勢權ある者は武士、言動云爲尙荒し、假令馬上の將軍文治を馴致せんと力むとも、武門政治は武門政治なり、高尙にして嚴めしき儒道の文すら多くは行はれざるに何の違か優雅の風尙を生じ得む。京師は幾百星霜を経て其間幾度か戎馬に荒殘せられたるも

なほ傳來の文學趣味を失はず、天下學藝の本宗たり、唯夫室町氏の治を失ひてより、新政起らず、新生意あるなく、唯焚餘の遺材を守り、中世の古風舊尙を顧みるが故に、權勢の中心東遷してより、多く振はず。獨浪華は京、江戸の間に立ちて彼に生せず、此に得られざる一勢力を保てり。足利の末、山口、大内氏の起るや、さなきだに上世以降我國史上に地中海の形勢を占むる潮戸内の來往繁く、泉州左海は京師の出口、西海の要津とて、商賈繁榮し、町人の勢力大に、内自利に營々として外武を執つて、自衛の道を講じ、あさく凶暴の武夫に對抗して屈せず、殆んど彼中世にありとし聞きし自由市の觀をさへ具へたりしに、豊太閤の天下を一定して居を大阪に相するに及び、此左海の町人を移して市民となせしより、貨權富力此地に移る、徳川氏の始に當り、慶元の一亂に大阪の主は亡びしも、大阪の民は恨みず、實力の豊富は衰餘の京は素より及ばず、新興の江戸尙未敵し難かり。此の如くにして大阪は京、江戸と鼎立す。而して江戸の權は將軍より下武家に在り、京師の尊はいふまでもなく、地下の卑しきものに在らず、獨大阪は京、江戸より見る、地下の素町人が實權の要府たり。若し假に徳川時代一般の見を以て品類の等を立てんに、國學の京に、經學の江戸に

必然起り、且行はる可きが如く、大阪に起る可きは誰が目にも、勢洒落たる卑近平易なる俗文學たるを知る可し。蓋し寛永以降續出せし、武家の談佛儒の訓誡を主とせし假名草子すら、概ね京阪に出でたるを見れば、浮世と名の付く當世の俗を穿ちしもの、必ずや江戸に出でず、さればとて公家守舊の京よりは寧ろ、町人の大阪に出でたるは地氣の順應を得しと謂ふ可きのみ。

了意が『浮世物語』に「うきにういてなぐさみ、手まへのすり切も苦にならずしづみいらぬこゝろだての水に流るゝ瓢箪の如くなる、これを浮世と名づくるなり」といへるが如く、泰平の世を心長閑けく暮らす當世様を浮世と見なし、其様を寫せる草子は自寛文以降武士と出家とを代表し、教誡訓示の義を寓せし假名草子とは異なり。後八文字屋本行はれて浮世本、浮世雙紙の名見ゆれば、西鶴の『一代男』以後此種に屬するものを總稱して嗜好の名目なれば、浮世艸紙とはいふなり。而して此浮世草子の出世に最恰好なる大阪の地に、才氣縱横の西鶴が充分世故を嘗めたる世さかり、四十二歳、此草子を作りて俗文學界に新生命を與へたり。

然らば西鶴は何れの處より出たりといふに、俳諧者より出づ。西鶴は井原氏通

稱詳ならず、初の名は鶴永、後雅髪して西鶴と改む。延寶五年館林宰相(綱吉)に女鶴姫君誕生ありて、全じき八年、宰相將軍宣下ありしかば、元祿三年鶴字を諱むととなり、西鶴も亦西鶴と改めしといふ。又松壽軒の號あり、リ此北村信節の『嬉遊笑覽』に見ゆ。住吉社頭に二萬三千句を獨吟して自二萬翁とも號す。浪華館屋町に住す。元祿六年癸酉八月十日歿行年五十二歳なりきといへば、寛永十九年壬午其後の師西山宗因浪華に居をトせし年に生れたるなり。抑鎌倉以後歌道衰頽して三玉集時代に至りては到底救ふに道なきに、室町氏の中葉以後連歌之に代りて盛に流行し廣く民間文學趣味の流布を致し、引ひて當代に及び、俗文學の素因を爲し、左海の町人、大阪の賈商は優雅とはいへ、俗に遠くして興薄き和歌よりは卑近にして、平易に耳近くして可笑味ある連歌に趨り、連歌一變して俳諧と爲り、西山宗因浪華に據りて一旗幟を立て、檀林の霸柄を握り、京江戸の貞徳流と戦ふと四十年。西鶴乃明曆の頃より宗因の門に入り、詞藻富贍豪氣縱横、二萬翁と誇稱し、『世を擧げて群雀噪々』と罵倒し、或は『阿蘭陀西鶴』と罵らる隨流、中府委批難の『俳諧破邪』(延寶七年版)に阿蘭陀いも自取つて號と爲せしといふほどに俳界の驍將たる四鶴云々

と二十餘年、三十年に近かり。然れども天和二年彌生の末師宗因歿し、全じ年『神無月の末』云々と筆を止めし西鶴が戯作浮世草子『一代男』世に出たれば、其以前俳諧に關するとは斯には曰はず、暫く遅月が『俳諧水滸傳』に宗因北に檀林を築きて洒落の變風を世上に布かんと欲して略中未だ俳風一統の治を得ざる中に其齡早古稀に過ぎて且暮も危くおもはざるなし、西鶴しばらく柄を執るに似たれども、彼は其才双紙雜話の文章に長じて、梅翁歿後の主たるに堪へず』と曰へるに任せて、俳諧の生活を省略し、直ちに浮世草子の作者たる井原西鶴の上に及ばむ。

西鶴歿してより今に至りて實に二百十年。近時に至るまで其名埋もれたりしかば、是非の論も、其事績も、多くは茲十餘年間に盛なり。されば戯作の如きも、年處の久しきと署名なきと此等の事情とによりてなほ知られずして埋らせしものもありしかば明ならず。現に世に傳ふるところを以てすれば、『好色一代男』を最先出

被天連四鶴云々と罵れり。隨流は松月庵と號す、中島源左工門直勝直、京都の人。然るに四鶴は其『櫻小夜嵐』に歌題作四鶴作と自署せるよし、但四鶴の作なりや否明ならず。
遅月は釋如日、號は照雲、空阿上人と稱す。浪華の人。文化九年九月歿。

と爲す。時は天和二年にして、西鶴は既に四十一歳の初老なり。之より後剩すところの年月僅に十又一年、其戯作を板行の年月順に列擧すれば、『好色二代男』貞享元年板『好色三代男』貞享三年板『好色一代女』同年板『好色五人女』一名『當世女容氣』全年板『本朝二十不孝』一名『新因果物語』全年板『男色大鑑』一名『本朝若風俗』貞享四年板『武道傳來記』全年版『武家義理物語』全年版『懷視』全年版『好色旅日記』全年版『好色艶縁者』全年版『日本永代藏』貞享五

此二書は四編作なるべしとの説

年版『色里三所世帯』全年版『新可笑記』元祿元年『本朝櫻陰秘事』元祿二年『一目玉鉾』全上『置土産』元祿五年版『世間胸算用』全年版『織留』一名『本朝町人鑑』元祿七年版『西鶴俗つれづれ』元祿八年版『萬の文反古』元祿九年版『西鶴諸國はなし』一名『大下馬』版行年月不詳なれども此頃の作と覺ほし等約二十餘部の著作ありて、太しきは一年に數種の出版さへあり。假令豪氣横溢二萬三千句を吐く春蠶の絲よりも易き松壽軒が健筆と雖も、其時々、戯墨にあらざらんと曰はむは蓋し想像に過ぎたるが如けむ。寧ろ四十年來抱懐し來りしところを、晩年十萬裘に披瀝し去りたるものと爲す可し。乃知る、西鶴の浮世艸子著作は晩年の業なるを。既

に晩年の業最目まぐるしき程なるを以て、『小夜嵐物語』元祿十一年版『浮世榮花一代男』全六年附『新小夜嵐』正徳五年版『續小夜嵐』年號未詳歐羅陀西鶴作とあるよし以下若干部の偽作か、贗作かはた實に西鶴の作にして名を脱逸し、作の巧拙の度を失して、其作なりや否明ならずなりしか、知るに由なきに至りけむものも生じたれ。或は曰ふ、西鶴の浮世艸子の着想は所謂「わけの聖」なりける西鶴のこととて疾くよりありしならんも、流石に其始は好色本のことにしあれば、師宗因の存生中は憚りて世に公にせざりしが、其身まかるや直ちに筆を執りしならむ、梅園堂の『元祿太平記』元祿十五年版に『西鶴存生の時、池野屋二郎右衛門より好色浮世躍といふ草子を六冊にたのまれ、いまだ寫本を一巻も渡さずして前銀三百兩かり』たる事を記せるを以て推せば、生計の爲に流行を逐ひ風尚に投じて筆を着けしにて、其始の作、就中好色本には名を署せず、序文をも掲げざるこそ其一體なれと。或は當時の事情左るものありしならむ歟。蓋し明暦萬治の頃、遊女の名寄あり、延寶の頃、龜山笑山が『色道大鑑』あり、世は漸く華奢風流に趨りて好色の雑談、武邊の夜話に代り來れる時、公家の雅趣なく、武人の健豪を缺く、浪華の市井に先づ咲むは一輪花の姿

の世之助が經歷なるも是非なし、唯必然の勢、偶西鶴が奇才の看取するところとなりしなり。

西鶴が初作題して『好色一代男』といふ。

櫻も散るに歎き、月は限ありていさ山爰に但馬の國か。ほる里のほとりに、浮世の
ことをほかにして、色道二つに、れてもさめても夢助とかへなよばれて、名古屋山三、加
賀の人などと、七ッ紋の莖にくみして、身は酒にひたし、一條通り夜ふけて、戻橋ある時
は若衆てたち、姿をかへて墨染の長袖、又は立髪かづら、化物が通るとは誠にこれぞか
し、それも彦七が顔して、願くばかみ殺るされてもと通へば、なほ見捨てがたくて、其こ
る名高きなかにも、かつらぎ、おぼる三夕、おもひく、に身うけして、嘘眼に引こみ、或は
東山の、かたかけ、又は藤の柱、ひそかにすみなして、契はかさなりて、此うちのはらより
生れて、世之介と名によぶ、あちはにかきしるすまでもなし、知る人は知るぞかし、ふた
りの寵愛てうちく、おぶりのあたさま定まり、四つの年の霜月は、髪置、袴着の春もす
ぎて、痘瘡の神いのればあとなく、六つの年へて、明くれは七歳の夏の夜の、慶賀の枕を
除け

て、幼き戀のはじまりより、六十歳

伊豆の國より日和見すまし、天和二年神無月の末に行方しれずなりに
ける女護島渡りまで、世之介といふ浮世男を一條の絲、一枝の串にして、箇々異色種

々殊様の珠玉を貫けるが如く、五十四場の艶話を連ねて、一部八巻とは爲せり。前
に假名艸子の章下に幾度かいへる如く、當時の諸艸子は一部の結構を具ふるより
は各條に主題あり、命意あり、たゞ相集まりて一編を爲すに過ぎざりしが、此作に至
りて世之介あるはなほ『浮世物語』に浮世房あるに比して太しき逕庭あるを知らず。
然りと雖も之を一方より見れば、彼王朝の最大作紫女の『源氏物語』の面影は此作に
通へるを見る。俗文學の其始より國學儒學の餘滴を受けて、民間俗事に托寓せる
は争ふ可くもあらず、夙に『可笑記』は『徒然草』に模し、『世物語』は『伊勢物語』に擬し、
『浮世物語』の毎節のかきだしもまた古物語に學びたれば、こゝに好色の世を描かん
と想は、先づすきとすきことらの本書かの紫女がすまひこそ、此上なき模型なる
を知らむ。蓋し『源氏物語』は王朝宮庭の真相を描きし、當時の寫實、場と主人と優雅
なるたけ、事も文も優雅なれ、『一代男』は浪華町人社會の現世相の直寫、世下り社會も
下りたれば、光る源氏の君は世之介となりて、椒房は華街、銀殿は青樓とかはれど、其
取材の法と結構の布置と幾干の差もなし。水谷不倒君は『一代男』と『源氏物語』との
間に事件の相似たる點を擧ぐれば、其三の卷、口舌の事ふれ、にて世之介が人の女を

戀ひて不義を仕掛たるは『源氏物語』の「空蟬」の條と符合し、四の卷因果の關守以下の二三章は、夕顔の卷に髣髴たるところあり、前後こそ異なれ、夢の太刀風は源氏が何がしの院にて變怪に出逢ふところ、形見の水櫛は夕顔が物の怪に驚はれて身まかりしところに似たり、とまで曰はれたり。されども、し浮世の戀の種々を擧げて五十に餘らば、假令殊更に趣向を真似るまでもなし、何とて其間に彼此似通ひしもの生ぜざる可き。故に唯曰はむ強ちに此を以て彼に一々に宛つるまでもなし、全體の趣向に於て王朝のすきものかたりは、西鶴が好色艸子の前身たりしならんと。或は八冊の『二代男』を以て五十四帖の『源氏物語』に擬し難しと云ふ勿れ、彼も此も一部の趣向にからまりし變化なく、たゞ色々の玉を貫きとめし迄なれば、百八の念珠も、十珠の根懸も、同じ道理にて、たゞ一、二に價あるばかり、『二代男』『三代男』を合せなば、其數量に於ても紫女の著に匹敵すべしと云ふに及はず、七歳より六十歳まで五十四年の艶話五十四條はやがて五十帖に通ふと云ひ去りても可なり。或は西鶴は俳諧者、俳諧の妙は一卷を通じてあるにあらざりて、專句にあり、句と句との移りに在り、西鶴の富贍なる俳才は句と句との狭き間の小變化には餘り横溢して、散じ

て浮世艸子となりしに似たり、每章の着想、結構、言廻しまて總て附合の呼吸を以て之を出せしが如しとは、是『一代女』に對する尾崎紅葉君の批評なれど、また移して此『二代男』の評にも代ふ可し。『二代男』に就いては以上にて畧其要を盡くしたり、且文辭も上に擧げしところにて一斑を見るに足れば、更に引かず、諸作につきて一二言を費やして已まむ。

『二代男』は一名を『諸艶大鑑』といふ、すべて四十條、八冊、貞享元年の版にて、『一代男』と中一年を隔て、世に出でたり。落月庵西吟の序あり、曰く

二柱のはじめは鏡臺の陰下地とおぼえ、稻頁鳥は羽の無い牛の事かと、吾すむ里は津の國、櫻塚の人にたづねても空耳潰して天に指し、地に土氣離れず、臂を曲げて桔槔の水より外を知らず、ひろき離波の海に、手はとゞけども、人の心は辭みごとく、辭ます、或時鷓鴣の許にゆきて秋の夜の樂慶、月にはきかしても、よそにはもちらさぬ、むかし此文枕とかいやりすてられし中にて人かふかきのあるを取あつめて、あらましに寫して、面白を挽くわらがるに、よみてきかせ侍るに、よめそしり、田よりかけあがり、大笑已ます、歌をかたけて手放つぞかし、

本文は

我化して死し又化して生、母は今の都の若後家、西の洞院のひとつ前と浮名のたつ

名がくれなし、父は一代男とて、子の初産もきかず、取揚婆の手よりすぐに臨産にまきながら六角堂の門前に捨てられ、慶安四年の憂き秋夜の霜、朝の風にいたみ、眼の知る命を犬も不思議に喰殺してありける。

子の拾はれて『親の顔は見ぬ初夢』に『女護鳥に住む美面鳥』の告をうけ、『今三十餘まで臺所見ず暮らし』たる男の相もかはらず、父の子なり、一生を遊蕩に暮らせしはなし、『全部八冊世の慰草を何かなと尋ねて忍ぶ草、靡き草、皆とひ草、これを集め令開板者也』と奥書せり。『三代男』五冊は貞享三年の版、また『一代男』『二代男』がいたく世間の嗜好に投じたるより、引續きての作、『六十二帖の物語寫し終れば、障子外にうかみし有様自ら消へて一物もなし』と結び捨てたり。

彼一代は二代と一年を隔て、二代は三代と又一年を隔て、世に出たれば、西鶴も風尚嗜好に誘はれて書きしもの、始は左のみはとて多く作らざりしに似たり。然るに貞享三年三代の好色男世に生るゝととも、別に『二代女』『五人女』『二十不孝』の相伴ひてあらはれしを見れば、はしなきすさひのはしなくも才筆世を驚倒して好色本の聲譽洛紙の價を狂はして大流行となりしならむ、而して男は既に書き盡くして三代に及びたれば、さてこそ、之に對する好色女の上に轉じたるらめ。

『好色一代女』は西鶴四十五歳の作、六冊、貞享三年板。開卷第二『老女隱家、都に是沙汰の女尋ねて昔物語を聞けば一代のいたづら』云々と題して、二人の男老女の庵をあとづれて其越方の身の上ばなしを聞くといふ梓を設けたるが、彼『一代男』等と異なるばかり、話頭は老女が若くして官女の召使となりしに起り、果は夜發にまでなりさがり、京の大雲寺の五百羅漢に詣で一代あひ見し男を認めるに終る趣向、實に『一代男』の對とも曰ふ可し。或は此一書とり分舛裁製本の立派なれば、前後の状況より推して之を西鶴の全盛時代ならんと推量せし説は、蓋し當れるなり。『好色五人女』又の名は『當世女容氣』また同年の版ながら、前の四書とは稍趣を異にして、當世五人の女の情事を五冊にかきわけて、其事に上りしは清十郎あなづ、梅やあせん茂平あさん吉三あ七源五兵衛あまんなり。此等の主人公はみな久しく江戸文學者慣用のヒロインとなり、近松、海音等の淨瑠璃にも、さては狂言にも、下りては後期の讀本にも、人情本にも編まれたれば、若し把つて彼此と比較せば、作者の筆力優劣の差等を認むるを得ん。

或説に小まん源五兵衛の心中は元禄九年八月なりといへども、此書、之に先つと十一年なれば、いかゞ。近松葉林子の『源五兵衛あまん薩殿歌』(竹本座)は寶永元年正月狂言作

例之は『五人女』の第一『戀は開夜を盡の國室律にかくれなき男』とくけ帯よりあらはるゝ文姫路に都まさりの女と書かれし清十郎と夏が太鼓による獅子舞はや業は小袖幕の濡場ありて、状箱は宿に置いて來た男、心あての世帯大きに遠ひ、命のうちの七百兩のかね、世にはやり歌、聞ば哀に、むかひ通るは清十郎でないか笠がよく似たすげ笠が、やはんは、のけらく、笑ひ、うるはしき姿いつとなく取亂しての笠物狂ひ、廿五の四月二十八日に身を失ひし清十郎が爲に、十六の夏衣墨染にしてのけし一篇を取り出だして試に『笠物狂』『歌念佛』の夏清十郎と比較せんか、將た八文字屋本に模せし京傳が『風流伽三味線』に泉州堺田島屋の娘手代と描かれし夏清十郎若くば馬琴が『常夏艸紙』に島田某が娘に生れし夏、それが敵の清十郎との惡縁の因縁談に比べ

者未詳の『おまん源五兵衛奉分船』(全)は後五年を経て出づ
お七の火刑は天和三年三月といへば、四年前のことなり。
是も海音の『八百屋お七歌祭文』(豐竹座)は寶永元年二月、狂言、其『戀緋櫻』は享保十七年。
おなつ清十郎は寶永二年十一月『笠物狂』(竹本座作者未詳)ありて後四年を経て寶永六年正月に粟林子が『五十年忌歌念佛』(竹本座)出てたり。
五十年忌といへば萬治二年の情事歟。
おまん茂兵衛の牢舎申付られしは貞享二年五月にて、粟林子の『大經師普曆』は寶永三年九月狂言(竹本座)なり。

見んか、各其特色を認むるに難からじ。

以上男に三部女に二部、合せて五部三十二冊の好色本は既に明々白地に好色の二字を冠して風尙に投じ看官を引くものから、一面には到底當局者の注目を免る能はず、果せる哉、風教紊亂の廉を以て其幾部はさしとめの厄を見るに至りきとぞ。其年月は詳ならぬものから、なほ『二代男』『五人女』などが別名あるは、後に改題せしが如く、殊に好色の二字を冠する書、女色に關する作の此に己みて、來る年は同じく是も色には數へられながら龍陽分桃の契より、堅げなる武家のはなしに變じたるにて、禁令の此際にありしならむを推量せらる。貞享四年の作も三年と同じく數に於て四なり。然れども去年には四部中、好色ならぬは一部の『二十不孝』に過ぎずして、今年には四部中、色艶の談柄を集めしは反りて『男色大鑑』二部のみ、夫さへわざと女色をさけて男色と世界をかへたり。『男色大鑑』はまた『本朝若風俗』といひ、一部八冊、西鶴自卷頭に序して曰く、

日本紀愚眼に眺けば、天地はトめてなれる時一の物なれり、形葦芽の如し、是則神となる、國常立尊ともをす、それより三代は陽の道ひとりなして衆道の根元を顯はせり、天神四代よりして陰陽みだりに交りて男女の神いでき給ひ、なんぞ下髪のみかし、當流

の投島田、梅花の油くさき浮世風に挽へる柳の腰、紅の湯具、あたら眼を汚しぬ、是等は美少人のなき國の事、欠陰、居の親仁の説のたぐひなるべし、血氣壯の時間を交はすべきものにあらず、總べて若道の有難き門に入る事おそし、

と其辭氣何ぞ奮然たる。若し前に五部の書なくして、西鶴はじめて此書を作さば、世西鶴を以て獨衆道の爲に氣を吐く者と爲さん、前に既に五部の書極めて男女の際を説き、今擅に此誘言を爲す、作者其書の爲にするところなりとはいへ、豈彼禁令なるものありて、之を憤りしにあらざるを知らむや。此書の内容は其標題の明示せる如く、一冊五條、總べて四十條の念者漸なり。文章は前の五書に比して齒切よく事柄とともに勇ましく見ゆれば、前章假名草子の條下に述べし縁によりて彼『藻屑物語』と同材工の伊丹舟川兩少年の上を寫せし、三の巻『藥はきかぬ房枕』の末、所謂十六、八の花一度に散る、わたりを茲に掲げて、文例と爲さむ。

采女は事のあらむ前日より御暇申請て神奈川の母の許にまかりけるに、左馬助方より文急ぎで始終をかきつけ、此際、浅草の慶養寺にて切腹と申遣はしけり、返事にいちはやく御通知うれしさのよし申して、其身は母に暇も乞はず、早舟をかりて御寺に着しかば、夜もしらぐとあけぬ、山門廊下の影に佇み事の様子をきくに、見法師の集りてとりとくに沙汰しけるは、今こゝへ容顔なまめかしき若衆の腹をこそ切れ、實に斜に

かたはなるだに、人の親のならひいかと思ふめるに、まして理に過ぎていみづければ、さこそ二人の嘆き給ふらめ、哀さなどいふなきにぞ、いと涙深きに見物き聞へて集りければ、身をひそめて待ちけるに、新しき乗物大勢つき、ありて外門に昇据えて、ゆたかに出しけはい、又なくはなやかなり、白う清らかなる唐綾の織物にあだなる露草の縫づくし、淺黄上下、折目たゞしくうらゝかに、そこらを見渡し給ふに、卒塔婆の敷のたちけるは、家々の涙ぞかし、寺中の左の方に、咲おくれたるにやあらん、山櫻の残少きを詠めて、幾昔年花梢殘待後春是人心と吟下たるは、采女なる人を啣ちていふなる可し、錦の縁とりし、塵に塵して介錯の吉川勘解由を招き、髪的美しげなる押切り、塵紙につゝみて、是なむ都堀川の母の許へ、今はの形見と便りにいひおくりたまはれとさしおくところへ、和尚紫衣をまくり手して生者必滅の理を示したまへば、此世に長生を保つ美人髪絲を免かれず、容色新なる本意達して自劍の上に伏すこと、是成佛と、秋より背地の短尺取出し、心静に巻かへし、硯を乞ひて、春は花、秋は月にとたはふれて、詠めしこともゆめのまた夢とかきおきて、いなや腹かき切れば介錯して立のくに、采女はしりかゝり、頼むとばかり聲して腹かきやぶれば、是も首かけてうちぬ、今年十六十八を一期として寛永の春の末に闇とはなりぬ、年頃めしつかはれし家の子ども、此哀におもひあひて差違へるもあり、また誓切つて世をすて主人の菩提を弔ひけるとなり、今に至るまで浅草の慶養寺に二人の墓をつきこめ、辭世の歌を位牌におして、東の空に名を高く残しぬ、志賀左馬助も世にありて詮なしとおもふほとにかきのこし

て、七日にあたりむなしくなりぬ、いらくあはれ此時見ることぞかし、

七四

西鶴が専男女の情事を描寫せるものは此外『色里三所世帯』等尙一二あれど、著名なるは大凡上の六部なり。其書は多くは假名草子と同じ体裁にて、挿畫は菱川師宣の妙手をかりしもありといへど大抵は詩繪師源三郎の筆に成る。其賣價は『一代男』八冊銀五匁、『二代男』五冊銀四匁五分、『三代男』五冊銀三匁、『五人女』五冊銀三匁五分、『一代女』六冊銀三匁五分、『男色大鑑』八冊銀八匁等なりしといへり。

『浮世繪類考』に曰く、元禄五年の刻本に此名詩繪師源三郎あり、西鶴が作の繪本の挿繪に名をあらはさずといへども多くは此人の畫なり云々。

『男色大鑑』と同年に出てたる武邊の艸子の二は『武道傳來記』といへる、諸國に名高き敵討八冊及び『武家義理物語』六冊にて、標題の示す通りの武張りしもの之を前年まで作りし好色本と比すれば、いかに急激に變調せしやを知らむ。他の一は『懷視』(五冊)にて、出版年月不詳の『大下馬』(一名『諸國はなし』)とともに、主として不思議なるものを蒐輯したり。好色の一類變じて武邊物語に移り、更に轉じて此種に及ぶ、著者が八面鋒の鋭きこと洵に尋常の才に非ず。之より先既に不思議なる談柄を蒐録

して、後のお伽艸子、怪談物の爲に道を開きし、了意が『伽婢子』元隣が『百物語評判』等ありしが、西鶴の慧才なるはやくも又此に着目せしなり。彼『伽婢子』の中『剪燈新話』の翻案多しと曰ひしが、此二書また支那の小話を採りたるに少からず。中一年を隔て、版行せし『本朝櫻陰比事』(五冊)は板倉所司代の裁判沙汰を綴りたるが、其名よりして既に『棠陰比事』の翻案なるを示せり。或は曰く、西鶴が傑作とも得意の作とも、兎に角好色本隆盛の頂時に出てたる『一代女』は明人の『痴婆子傳』より出てたるならんと。古今東西暗合といふともあれば、相似ればとて必ずしも出自と定め難けれど、斯く様々の點より推し、且西鶴が僅少の月日に多量の話柄を蒐輯列載して此幾種の作を爲したるを見れば、假令自和漢内外の書を精讀せずとするも、少くとも當人見聞の外に正史野乘の所傳と海外の説部に間直接に得しところを摺撫せりと爲さざるべからず。

されば馬琴が評して『此人肚裏に一字の文學なし』と云ひしは、例の人を人とも思はざる曲亭が眼より見ての評にて、さばかり無識の西鶴にあらず。或は貞享二年版の『宗祇諸國物語』と云ふも西鶴の作かといへど、如何にや確證無し。

然るに既に數方面を書き盡くせし西鶴は漸く華奢の極をきはめて一轉して入悟の境に接し來りしが如く、貞享五年(則元祿元年)の『日本永代藏』(六冊)之れより稍程經て歿去の前年(元祿五年)の初春出版になりし『世間胸算用』(五冊)『置土産』(五冊)歿去の前四月(元祿七年卯月版)に世に出てし『織留』(六冊)の中、前二冊を『町人鑑』、後四冊を『世の人心』と題すなどは、皆世間の裏面を穿ちたる真面目の材多く、假令ば前には散々に遊び散らして豪遊一擲千金の蕩子が後にはやがて粹の果の堅意見といふ状態を示す、但此作の變化か、作者心境の進移かは知らず、兎に角浮世艸子開拓者が最後の一轉なり。斯くて後幾もなくして、人間五十年の究り、それさへ我にはあまりたるに、ましてや

浮世の月見過しにけり末二年

と辭世の句を留めて、元祿六年癸酉八月十日に、五十二歳の秋風に誘はれて詞林の稍寒く、西鶴は八丁目寺町誓願寺に一基の石碑となりぬ。此時戯曲に巢林子あり、俳界に芭蕉ありて、共に西鶴とは年齒相若く、元祿文學の常憲院代の文物を粉飾

寺、同寺本堂西の裏手に「仙鶴四鶴居士」と題し「下山鶴平北條園水建之」と刻せる碑ありとぞ。松尾芭蕉は元祿七年

したる實に故あり。西鶴没して後、梅園堂が筆さがなき、地獄巡りを爲したりしや否は知らず、江戸の其角が爲には、難波江に生れて住よしのくまなき月をめて、前の魚のあざらけきを釣せて景寫嘆時の想感今懸今、末二年、浮世の月を見過ぎたり鶴といひ置けん折にふれては顔なつかし、今は故人になりぬ」と吊せられ、門人とはいへ、北條園水には京より下坂して、七年の間亡きあとの草庵を守られ遺稿は其手によりて世に出てぬ、假令後世の毀譽紛々たりとも、西鶴以て瞑す可き歟。西鶴歿せし翌年世に出てし遺稿『織留』には園水筆をとりて

四地生涯のうち、述作するところの假名草子、棟に充、牛に汗して世にはびこる中に、日本永代藏、本町町人鑑、世の人心、これを三部の書と名づく、永代藏は其功なりて後町人鑑、世の人心、半書遺して、過ぎし榮月に此世

十月、享年五十一にて歿したれば、四鶴よりは二歳の弟。近松巢林子は元祿六年に四十五歳なれば、四鶴よりは若きこと七歳、芭蕉よりは五歳若し。
 十梅園堂が『元祿太平記』(録十五年版)に、四鶴地獄巡りの一段を著はせり。
 其角が『句兄弟』(元祿七年版)に、『綱は花は見ぬ里もありけふの月、綱は花は江戸に生れてけふの月』の句を兄弟に合せし評につけて此文あり。時に其角は三十四歳。
 園水は京都の人、四鶴歿せし時、年三十一。

を去りぬキ、兩部の書殘されし半宛をとり合せて一部となし云々

と添書せるにて西鶴が晩年の方針と計畫とを覗ふ可く又團水の師に對する情と、此遺稿の成りし大概とを知るに足る。然るに此鎗屋町の大家一ひ世を去りて後遺稿と稱するもの若くは生前の年月を署して其名を假る艸子多く出てしが如く、何れか眞何れか僞後世諸家の甄別明ならざるもの趣からず遂に總稱して之を西鶴ものといひて己む猶八文屋ものといふが如し。元祿八年初春版の『俗つれぐ』(五冊)も門人が先師の遺稿と稱し、同じき九年の『萬の文反古』(五冊)も其著といふ。越えて元祿十一年の『小夜嵐物語』(十冊)にも奥に西鶴の名を署したれど如何はしきものなり。翌十二年首夏開板の『名殘之夜』(五冊)にはまた團水の序ありて

洛陽を去つて七年、浪華四姉が草庵を守る、雨の夜跡は消せぬ紀念の反古のうちより一書を探り得たり、賭國の新譯、例の狂言をなせるせり、みづから草を染むれば、故人にあふこゝろばせして函底に籠置き折節ことの寢覺の友とす、是を傳へ聞き香林某來つて強て求めけるにまかせて梓に行ふことなり、

といへり。七年守庵の曉則是元祿十二年に當る。實に之を西鶴著稿の名殘と做す可き歟。

西鶴の浮世艸子と生涯と、畧上に述べたり。之を要するに僅に十又二年に足らざる間に二十餘部の作は既に多しとす可し。然るに櫻柳弄花の韵事、偷香竊密の癡情を描きて好色本の新世界を開き、分桃の會契は見物語一流の陳套を脱し、怪異譚は和漢古今を摺撫し、世間的教訓は能く當代平民生活の微を摘み陰を發し、燃犀の眼光到徹せざるなく、快利の争鋒穿ち得て剩すところなきに至りては更に奇才第一を推さざるを得ず。次に西鶴の文章は如何といふに、一言之を評すれば、天稟の奇才に任せて縦横に書きなぐつたりと云ふ可し、従つて自他の混同も賓主の錯雜も、能所の紛淆も至るところにありて、其極或は佻儻難澁、意味の殆んど通じ難き迄に甚しきところありと雖も、其細緻如何にして斯の如きを得、其豪壯何によりて彼が如きと思ふ程もありて、格調は整はざるも、筋勁道健、到底他の得て模す可からざるものあり。所謂氣を以て勝つ、異彩の奇文にして、其嘗て住吉社頭に二萬三千句口を衝て出でし底の氣魄は何處までも横溢し、決して前人の陳套を逐ふの痕なし。或は其文の難解を以て俳諧の調を以て當代の俗語を雜へ綴りたるに歸する者あり。又或は物語體の古文の痕跡未充分に拂拭せられず、雅俗半熟なるが故と爲す

あり。皆一面の理なる可し。然れども想ふに主因は作者縦横の奇才端なく此異彩ある奇文となりしにて彼男女の戀を描きては念契なきが如く轉じて衆道に及べば女人を罵倒し武邊を語れば氣骨稜々たる天晴武士平民を述べれば世に算勘の外道なきが様に、仙人も妖怪も事に應じ境に臨みて出づるも、布置も脚色も案排せぬ作者の文辭また氣に任じ筆に従ひて此特異の手段に出でたる寧ろ當然にして性しむに足らず。故に文辭取る可しとするも更に一層取る可きは文字外の妙なり。蓋し此邊の事に關しては近時世に詳を盡くし細を折きしもの多ければ贅辨を須ひざる可し。次に此浮世艸子が文明史上の資料に豊富なるともまた絮説の要無し。

終に西鶴非難の聲が歿後數年を出でずして朱拙の「けふを昔」元祿十二年版にはじまりて梅蘭堂の「元祿太平記」に高く、曲亭馬琴に盛に、果は明治の聖世に及びて尙且其書を禁ぜらるゝに至りしは、其材の猥褻鄙陋なりしに由る。然れども馬琴は實際群作者と撰を異にせし通り、自亦高く標致し、古

「今日を昔」に曰く「あまつまへ晩年には好色の書を作りて活計の謀としたる罪人、處あるもの誰か悪まざらむ」と云々

今の俗文學を壓倒して他を他とも思はねば、他人が見てさへ猥褻なりとせし西鶴を、其儒蒙の見解を以て批判するに、何とて「一寸も容赦す可き飽くまで云はでやまざる可し。されど『肚裏に一字の文學なし』といへども、『よく世上に渡りて戯作の冊子あまた著はし』と云ひ、『人々今日目前に見るところを述べて滑稽を盡くす』とは西鶴より「はじまれり」と云ひ、「西鶴身まかりて後攝陽の梅蘭堂の諸葛太平記といふものに西鶴が地獄めぐりといふ事を作り設けて、甚しく嘲諷してけりしかれども、其書を見れば西鶴に及はざると遠し」と評し、更に當時の戯作を總括して、箕山、鷲水、其角、團水、立圃、不角、昌三、了意、文流、か徒、著述あまたあれども、戯作の方は西鶴殊に勝れたりと論斷し去る。假令其猥褻を惡むこと甚だしとも、西鶴が能を認めたりと謂ふ可し。故に到底伊太利亞三大家の一たる「カモッパチ」を除きては、猥褻の嫌ありながら審美學上の價值を失墮せざるもの甚稀なるに、西鶴は獨り能く此中に旗幟を樹て得たりと爲す森鷗外先生の評を以て正しとす可し。

「カモッパチ」は千三百十三年(正和二)乃至千三百七十五年(天授元年)の人。デカメロンの著者。

第壹章の二 浮世草子の二

浪華の西鶴俳諧より出で、奇才横溢筆を浮世の社會相に着け好色の兩道武家町家教訓に奇異譚に儘に十餘年の間に諸種の物語を出だし所謂浮世草子の一派を開きし近世俗文學の主要部を占むる小説前期の盛世を開きしかば其元祿六年五十二歳を一期として世を辭してより京浪華に其統を繼ぎ流を汲むもの紛々として輩出し派を分ち異を競ひ浮世草子の隆昌を致せり。之を一方より觀れば摸倣なり摸倣は屋上屋を架して終に創始の範圍を脱し難く原始の妙致に凌駕し難く幾多の浮世草子はまた西鶴が摸倣にして西鶴物を抜く能はざるあり。然れども更に一方よりいはゞ西鶴は斯流の源泉なり後に流を汲むものは素より末流なりと雖も末流自末流の變化と風致とを備ふ。迂回婉轉幾段の變化ありて或は分派或は合派また見る可きあり見ざる可からざるを西鶴以後の浮世草子の運命と爲す。所謂前期京坂俗文學の盛は西鶴に始まりて八文字屋其他諸作者の駢出に旺なり。西鶴の末年浮世草子の續出する世未だ之に倣ひ之に敵し之に類し之に

異を立つる者もある無く十餘年間文壇は其才筆の縱橫風靡するところたりき。蓋し未之あるにいとまなかりしなり。然るに西鶴は世を辭して名聲暗々として益鳴り世はなほ浮世草子にあきたらずして益喜びて此種の著作を迎へんとして已まず。名を好み利を射るに巧なる者は文辭ある者は素より之なき者は人に囑しても此時尙に投せんとするは自然の理なり。さればまづ世に出でしものは所謂西鶴の遺著遺稿若しくは遺著遺稿と稱したる偽作寧ろ擬作にして其中には幾多眞の西鶴の稿として世に信ぜられたりしものまた現に信ぜられ居るものある可し。されば此間に此等の述作に従事せし無名の作者摸倣家ありしなり。されど何時までか世に無き西鶴の名を冒す可き幾ならずして浮世草子の作者はつぎつぎに世に顯はれいでたり。今悉く當時の著作者を指擧するはもとより不可能のことにして且不要のことなれば遺れる著述に就きて略著名なるものを擧ぐれば都の錦錦文流西澤朝義月尋堂西鶴の遺慮を守りし門下の秀才北條團水仁齊に儒業を受けし復古學者の一人林文會堂野口立甫が俳諧の門生たる青木鷺水作者ならねど作者の名を負ひし八文字舎此八文字舎が爲に筆を執りし江島屋其碩以下

の人々なる可し。

浮世草子といへば八文字屋本といふ實に八文字屋本は西鶴の著をすら掩ひて以前は西鶴ものをも別ち稱せざりし程にて其以外の諸作者のものゝ如きもとより此名目の下に彙類せられ八文字屋本の作者其碩の詞に「傾城色三味線又は曲三味線禁短氣の類なぐさみの書各々様の御意にいら八文字屋は是より浮世本評判本の名取りの様に罷りなり」などいひたり。されど實際は浮世草子は西鶴本の首唱に起りて後にこそ八文字屋が名取りとなりたれ西鶴歿後は八文字舎以外に幾多の浮世草子作者を出したるにていはゞ群雄割據の姿なり。さらば此割據の狀勢は幾久しきやといふにもとより並出相侵して利害相及ぶ程の社會にもあらねば截然たる時期を別ち難きも大かたのなりゆきより見て約十五六年ながくも二十年を出でざる間と爲す可き歟。何となれば奇骨峻々たる都の錦は寶永の末には世に亡き人の數に入りしが如く西澤朝義の著作一も下條を見よ。元祿の末より寶永年間に多くして正徳年間は見當らず享保に入りては寥々たるものにて專淨瑠璃作者となり錦文派も正徳に及ばず北條團水は正徳元年に黃

土の客となり鷲水の作も板行年月の明白なるは寶永にして文會堂のは正徳の始なり。而して八文字屋自笑と江島屋基碩との確執は寶永正徳の際に起りて浮世草子の全昧を出板書肆の名を以て蔽ふまでの勢ある八文字屋の歴史に一轉機を生じ八文字屋本の性質に一變化を來たしたり。是實に西鶴の歿年より十又八年のことなり。故に今西鶴の歿年正徳の始にいたるまでを一括して浮世草子の第二期とせんは強ちに不當にあらじと信ず。又若し西鶴本八文字屋本といふ系統の續合よりいはいまづ直ちに八文字屋の上を述べ可きも八文字屋は獨他の諸作者の凋落に後れて世に繼續せしが故に連續の便を圖りて今は先づ主として此十八年間に就てし作者の方面より説く可し。

浮世草子の祖ともいふ可き西鶴の著は後世非難の聲喧しきが其始りは梅園堂の作「元祿太平記」(元祿十五年板)に始まる。都の錦の名と事と實にまた此書に見えたり。抑都の錦がことは近時にいたるまでその氏名さへ詳ならざりしが嘗て當校より「早稲田文學雜誌」の出でし時櫻庭萱村氏の「小説家の人物」といふ一篇中に此作者の逸聞を載せたり。其要は攝州大阪生れの穴戸鐵舟といふ者何事をか巧

み出しけむ、元祿十六年江戸に於て召捕られ遠島の申渡を受け、薩州山野の金山へ徙され、金山を遁れ去らんとしてまた捕へられ牢屋に入れられしが獄中の苦に堪へず、寧ろ早く死せんことを願ひて差し出したる訴狀一篇を掲げたるうちに『私事京都にて都の錦と申候、由緒は諸藝太平記と申ものに有之云々』とあるを以て、始めて都の錦といふは此、実戸鐵舟の號なると明なるを證せるなり。且其終に附記されて『薩州藩市來辰右衛門といふ人、都の錦の詩歌等持傳へたる中に實永七年と記したるあり、首を刎ねられんとを願ひてより七年は確かに生たるなれど、其後のとをかきとめたるものあらずといふ』とあれば、實永の末正徳の前に歿せしに似たり。而して其所謂『諸藝太平記』といふは西鶴を罵倒したる『元祿太平記』にはあらずや。後世曲亭馬琴の西鶴を批評せし『燕石雜志』に『攝陽の梅蘭堂の諸藝太平記といふものに西鶴が地獄めく』といふとをつくり設けて甚しく嘲弄してけり』と明記せるは實に『元祿太平記』のとなればなり。若し然り

と。『元祿太平記』に『惜かな都の錦其功いくばくもあらずして行年廿七歳をかぎり四海の波の泡と消る云々』とあれど、『元祿太平記』を元祿十五年の板とすれば吻合せず、且此新狀に自署して、寛永元載と曰ひ申三十歳、これもあはず此年三十歳なれば延寶二

とすれば鐵舟が死に臨みて尙書中の記を以て自證せんとするを見れば著者は實に鐵舟か、其書中西鶴を貶しながら、都の錦を世に紹介したる西澤一風を稱揚し、亦訴狀に至るまでも此書の記事を以て都の錦の上を證して正しと爲す可し。

自伊藤仁齋より經書を學びしといひて、此書中に、伊藤源助古今無雙の大儒なりといひ、其門下則鐵舟の同門

たる林文會堂が學をたへたるなど、皆『諸藝太平記』則『元祿太平記』の鐵舟則都の錦の作なるを思はしむ。よしや梅蘭堂は都の錦ならぬまでも、都の錦たる鐵舟自は訴狀に『口業の爲假名書物を著作いたし書林に與へ其禮物を請渡世候事二年六月』と云ひ、『元祿太平記』には『當春より都に都の錦といへるもの出來たり、和文を發明して西鶴を輔けんと思ふ』といひ、著述數部の名を擧げたるにて、都の錦と號するは、實戸鐵舟が號にて、其鐵舟が浮世草子の作者たりしを見る可し。然れども書中に

實の生なるべしとあれば二十九歳にて遠流されしなり。却つて廿七歳の誤字とせば、實永八年にて、實に此頃こそ四海の波の泡と消えしならむ。但し『元祿太平記』は自分に知れるなれば十五年の版とは兩立せざる説なり。後考を俟つ。

當春とは元祿十四年なり、元祿十六年江戸にて捕へられたれば二年半といふ年月相當せり。

評して「本より此男都の錦和漢の書に涉りければ中誠に文質彬々として面白く可笑く、あはれに殊勝におぼへ侍る西鶴なくなりしとて其道絶へしにもあらず中ひたもの新しき趣向をかきつゝくるを、是ぞ此都の錦が智恵袋、口を開けば滅多に秀句をいふ」などいへるを見れば、西鶴を輔けんと思ふにはあらずして西鶴に代らんと思ふ覇氣充分に、柳櫻をこきませし都の錦の花々しき名に浪華の梅のあとをつぎて、一しは花々しき出立を見せんと企なりけらし。惜しいかな、奇骨ある壯年の武士は終に口業の爲に草子作者たるに甘んずる能はず、幾ならずして他に立身の地を求めんとて東都に去り、従つて罪人と爲りしかば、僅に二年半の歳月を作者にすとして「元祿會我物語」「大和莊子」「御前お伽婢子」「風流神代卷」の數部を残したるに過ぎざりき。以上一作者の傳に關して稍絮説に過ぐる嫌ありと雖も、その作「大和莊子」は假名艸子、教訓もの、「御前お伽婢子」は了意が「伽婢子」の一流をつぎしおとぎばなし百物語の類、「風流神代記」及び「元祿會我物語」は則將に起らんとする傳奇的浮世草子の先驅を爲すものにて、其作者が取つて代らんとするの意氣を想見す可く、以て西鶴歿後に其道西鶴とともに失せたるにあらずして世に出づる俗

文學界の趨勢を察するに足りなむ。况んや鐵舟の如き奇骨の士、若し老熟に至るまで其奇才を驅せたらんには誠に得難き作者と爲りたらんもまたはかりがたきをや。都の錦自稱の由緒を世に公にせし「元祿太平記」はまた「實にや都の錦が元口より新式五卷書、御前義經記、寛潤會我、女大名丹前能の作者西澤九左衛門が作りし文にそ遙に勝ぐれてきこへ侍る」とたゞへたることあれば、まづ此九左衛門則所謂西澤朝義が作を紹介してひきて八文字屋に及ばむ。

元祿の末より寶永を盛りとして浮世草子の作者に西澤與志、同じく朝義といふ作者ありとせば、我邦作者が戯語を弄するになれたる讀者は直ちに與志は朝義の略なるを悟らざらむ。果せるかな「茶傾ひそり顔」「寶永中ごろの板」には「さいはい朝與志筆まめなればざつと一作あそばして」と明にせり。さてこの與志が編と署せる「御前義經記」を「元祿太平記」にあげて作者西澤九左衛門と爲せば、所謂正本屋山本九左衛門にて、則淨瑠璃作者の文者三傑の一人に數へられたる一風がとたるや明なり。年配を以てすれば、朝義は青木鷲水より七歳の弟、團水よりは二歳の弟なれども、八文字屋自笑には一歳の兄、江島屋其磧には二歳の兄なり。朝義は寛文五年の生

團水は直ちに西鶴の後をうけしも、著作に於て朝義と比較す可からざるなほ、驚水の如く、他の三人中にては最年長たる朝義は、西鶴の遺稿と稱するものなほ世に出づる元祿の未幾多の著作を大阪に出だして、京の八文字屋に先ちて世に知られた。而して朝義と略時代を同うして、數部の浮世草子を出だしたるはまた浪華の俳人たりし錦文流にして、文流は元祿の末より享保の初に亘りて近松巢林子と同時に竹本座の淨瑠璃作者たりしが、朝義も亦八文字屋の盛時より漸く迹を草子作者にたちて豊竹座の作者となり、數曲の淨瑠璃を作りしは相似たる歸趣と謂ふ可し。こゝには暫くともに草子作者としてしるし、淨瑠璃には及ばず。朝義本姓は山本名は九左衛門或は(九右衛門)ところは大阪なれど、或は心齋橋南四丁目、或は京二條通寺町西へ入、山本九兵衛とあるに對して、高麗橋二丁目出店として住所は移轉せしが如く、通稱を正本屋と呼ぶ書林版元の主人にて書肆たる點に於ては八文字屋もまた同じけれど、自笑の虛名なるに反して

朝義則一風の淨瑠璃の初作「非筒屋源六戀の寒暄」は元祿十六年正月の新狂言と「淨瑠璃」に見ゆればのち享保の諸作に至るまで二十年に近くとだえたるが如し、然るに「外題年鑑」には「戀の寒暄」を享保八年に繫けたり、これ實に近きものにあらざる乎。

朝義は實名に元祿、寶永、享保を通じて下行文學界の一家たりしなり。

抑當時の浮世草子といへば、其主系は野傾二道の外に出てず、假令出でしとするも、なほ好色の乃、乃至好色めかしたるもの、外に出てず、流石に西鶴は八面をかきわけたるも、最先に世を驚かし世に歡迎せられしは好色の二字を題せるものにてありしが、此に及びても「武道傳來記」「永代藏」の系統は少し。然れども實は野傾の内情を穿ち、狹斜の趣味を描きながら、名を古物語、もしくは好色以外の諸作に托するものは此頃より生じたり。従つて當時世上の實事を稍風流化して、極論すれば好色の分子を加へ、若しくは皮を粧ひて述作したる、稍後期の讀本小説に近きものをも雜へ來りしは、浮世草子の内容の一轉機漸く動くものといひ得可き歟。遮莫朝義文流、乃至八文字屋の初盛は未だ好色系の盛大にしあれば、朝義の作の如きは半ば此少變化をうけしものなるも、他の半ばは八文字屋一流純然たる好色本なり。之に比して文流の稍遜色あるは好色系を隔ると朝義より遠く、且一面には浮世草子を作るといふに竹本座に關係したればならむ歟、その座摩社頭に住して錦頃軒と號する俳人たりしといふ略傳を以て推量するに、或は別になほ俳界に多少の擊

縛ありしやも知る可からず、たゞ詳にしがたきのみ。

茲にいふ多少の變化を題號若しくは内容に得たる浮世草子とは、嚮の奇士鐵舟の作『風流神代記』等を先縦として、朝義の『御前義經記』元祿十五年板、『風流今平家』同十六年版、『風流三國志』寶永五年板、『御前二代曾我』同六年版、文流の『風流今兼好』寛永二年版、青木鷲水の『風流吉日鏡曾我』年月不詳等を一群と爲し、後來正徳享保に至りて變化せし八文字屋もの、假之は『風流訛平家』正徳五年版、『風流七小町』享保四年板など、等類たり。其内容は表題の示すが如く名を古書に採り古事に托して浮世の人情、更に忌憚なくいはゞ野郎傾城の噂をも穿つものにて、好色が御前、風流といふ一見高雅に似たる名を蒙りしにて、いはゞ赤裸々たるもの、巧者にも人前をつくる見えを爲すに至りしが如き變化なり。なほたとはゞ西鶴の好色本より後期の洒落本に近く一步を移したるものにて、自然の推移の一段なり。更に一言せむに、内容の質よりいはゞ好色本に異ならずして、形則結構より見れば傳奇小説に類似したる、傳奇的浮世草紙と稱し得可きものにて、彼『一代男』、『一代女』の類を好色本といはゞ此種は假に風流書と名く可き歟。而して此風流草子の屬にして

上にあげしところに比して傳奇的分子の一層多く前者の洒落本に近きが如くこれは讀本に近きものは、朝義の『達髮五人男』永寶二年板、『熊坂今物語』享保十四年版、文流の『棠大門屋敷』寶永二年板、『熊谷女編笠』同三年版等にして是亦鐵舟の『元祿曾我』と一系に屬せり。大阪の作者たる朝義が當時にありて五人男といへば直ちにそれと知らる可き、達髮五人男五冊は、三年前に刑せられて、浮名直ちに岡本文彌宇治嘉太夫座にうたはれし、雁金文七等が上をかけるもの、『熊坂今物語』五冊は何時頃にか、崎陽丸山の遊廓にて喧嘩を爲せし熊坂兄弟の事實を片岡仁左衛門が演じたるを草子に綴りしもの、『棠大門屋敷』五冊は浪華の豪商淀屋辰五郎が事蹟にて、『熊谷女編笠』五冊は寶永三年六月因州鳥取の女京下立賣堀河にて姉の敵を討ちし事實を作りしものなれば、かの『御前義經記』、『風流今兼好』などの如く、義經兼好など古き人若しくは古き書名に擬して當世の粹を穿ち通を描きしに比して多

る。雁金文七等の處刑は元祿十五年八月二十六日にて、下らぬとながら一件の實録は山東京傳の『搜奇錄』の二に出たり。處刑の翌九月直ちに岡本文彌座にては『雁金文七』に、宇治嘉太夫座にては『離波五人男』と外題を掲げ、大入をとりしは、實に此書の出板前三年のことなり。後三十七年を経て寛保二年に竹田出雲等の『男作五雁金』竹本座に

少の徑庭なくんばあらず。蓋し文章といひ、若眼といひ、内容を比較せば以上の諸作は到底浮世草子の開祖ともいふ可き西鶴の作には及ばず、かへつて或は其末流を汲み、その糟粕を嘗むるの譏あるもあらむ。たゞ西鶴の作は殆んど皆連珠的(一絲を以て幾多の話柄をゆるく貫きとめて、一の話柄と他の話柄とは殆んど相關せず、絲を断てば各別に一條の物語を爲す)にして未だ一編を通じたる脚色はあらざりしに、これ等の諸作は多く一部一條の結構を有し、中に就きて實際に近き『熊坂今物語』『熊谷女編笠』の如きは最後の續きもの讀本に近き性質と脚色とを具ふるに至れり。八文字屋が役者評判記傾城もの、敷をつくせしあとに續きて此種の草子若干を出すに至りしを想ひ合はせて、朝義、文流等その魁たりしといふを得可し。

興行せられ歌舞伎にては享保十五年に中村座に『名月五人男』あり、
 初代の仁左衛門を『俳世』の接木によれば、仁左衛門は寶永正徳をさかりとしたる人なり。
 淀屋辰五郎の死は『名人忌辰録』によれば元祿十年四月三十日なり。

以上略いはゆる傳奇的浮世草子のたち場を叙したり。朝義の諸作中に元祿十

三年版の『御前義經記』八冊同じき十六年版の『風流今平家』六冊あり。暫く此源平二書を對して、御前風草流子の内容如何を紹介せむ。『御前義經記』は一名を『風流義經記』といへど、さる大名の酒盛に飽きし上、浮太郎冠者實名與志朝義の戯に作りしこの假名草子を御前にて讀むといふより御前と名付くるよし、則是も風流草子の一なり、題名に明なる如く『義經記』のすぢによりて、西鶴『一代男』以後『新式五卷書』までのいろ艸紙に『洩れたるを拾ひ、或は男色のちもはく、又は風呂屋のつとめ、茶や女のこと、しかみ顔重寶記なども古し、其かはりたる耳學問して、愚なる智恵を振ふてかきあつめたるもしほ草』(自序)にして、よみはじめ面影うつる東光坊元九郎今義雅立より、面影うつるよし經最期、兄弟の妹脊探まで皆、『義經記』にからませたり。例之ば五の卷に難波津風呂屋、勸進帳と題しては十二軒の風呂屋より十二人の女を選び出し、能狂言の安宅をやつして、めんくが身の上を懺悔し、これ一番を客のもてなしとすといひて、風呂女の名寄をば安宅の山伏に擬し、

「もつたいらしいところが破經
 一、いやしからぬところが北の方

難波のきよ様
 大黒のちか様

- 一、やりはなしなところが武蔵坊辨慶
 - 一、忠實らしいで龜井の六郎
 - 一、そらぬところて兼房
 - 一、すなところて鈴木三郎
 - 一、浮氣らしいで鷺の尾
 - 一、しさいらしい所が伊勢の三郎
 - 一、分別らしい顔が熊井太郎
 - 一、智恵の有さうな所が駿河の二郎
 - 一、呑込だところが片岡の八郎
 - 一、四角四面なところが常陸房
- 丁子のらん様
 - 大黒のさが様
 - 桔梗のきし様
 - 同しゆん様
 - がくの小三様
 - 同ちよ様
 - 柳のきんさま
 - 扇子のおぎ様
 - 同きよ様
 - 伊勢のらん様

といひ謡曲安宅の章句を擬しては

難波津や風呂の櫓きそめもえさして、くゆるおもひをかたらん、御供の人々には大黒のちか、桔梗のきし、丁子のらん、柳のきん、かくの小さん、浮氣の雲姿に迷ふ風情してわれに劣らぬ呂州の色、あときき揃へ十二人、つとめにかざる重れ衣裳とやうく、さまくそめちらし堀の港の中宿屋、皆うちよせてなびきあふ、あづるの里につきにけり、などかき、勸進帳は

それつちく、呂州の色をかながみるに日まし月ましいたりなきわめ、陸路をふむと更になし、おほる染につかみ鹿の子、日野羽二重は一むやし、見る目にかゝるともなく、紅葉

ともに身をふかし云々

とかきいだせり。また『風流今平家』は一名『町人身の手鑑』といひて、戦府の豪富江戸谷中に隠居してまな女の、これも慰に替女の琴三味線に合せて謠ふ今様の平家物かたりにて、内容はもとより奢侈に耽りて没落したる町人の身の上ばなしを『平家物語』のすぢに合せてかきしものなり。従つて開卷の文辭も彼有名なる

諸行無常の鐘の聲じやくめつめらくの響あり、婆羅双樹の花のいる、盛者必衰のことはり、おこる者久しからず、人界のありさまは夢幻の如し、猛き人も遂には亡ぶとなり

といふ文を用ひ、また主なる人物も、清盛に伊丹入道、重盛に重右衛門、宗盛に宗右衛門、重衡に友之助などを當て、それくの経緯を擬倣せり。想ふに平家の驕奢と義經の風流とは元祿以降の社會に其家其人をまのあたり見ると妙からず、之を

々。近世傳奇の物語には源平時代に假托する者最多く、後八文字屋本にも『風流平家』、『義經風流鑑』などなり。また遊女の安宅に擬するとは『傾城色三味線』(元祿十四年版)にも下の關にて『上方のお客様への御馳走、都にては一万兩でもならぬとを銀一枚でお氣の張らぬおなぐさみ』とて『當流義經北國落、附り色狂ひは身のためにあだかのみなと井に富樫が關を通り者のより合』と題する狂言を爲すことを出だせり。或は其頃かゝる大盛遊のありしにや。

假托するに最適なるものなりしならむ。其後といへども終に義経は風流なる大將たるを免かれず、奢侈を以て傾倒する一家は多く平家に比せられたり。平家と義経との迷惑は知らず、その端を開きし作者の働は當れりといふ可し。

『案大門屋敷』は近世の續きものに近き浮世草子の一にして、その種の面影を窺ふに足る。卷の一に難波の長者大系圖として、

爰に世の國難波長者とよばれたる徳人あり、長者二代なしといへども、七代相續たる分限、金銀は北斗をさそひ、家は四十八ヶ所に及ぶ、おそらくならぶ方なく、世學つてさかゆく、末を歎みしに、此家半年にたらざるうち破却す、其濫觴嘗て知る人なく、世人不思議のおもひを爲す

とて、八幡侍石堂なにかしが、妾腹の遺子淀の江戸屋與茂四郎が築城の請負より仕出して長者と爲りしよりは、じまりて五代を経て與茂九郎放埒にて、遊所狂に身をもち崩し、大坂屋の傾城大橋を身受して初五郎といふ子を生まれ、終に淫酒に身神を蕩ひて失せ、初五郎家督を相續して江戸屋破滅するに至る物語なり。江戸屋初五郎とは當時浪華に豪奢の夢の跡を残せし淀屋辰五郎がことなり。物語の經緯よりは寧ろ遊所を描くことの詳密なるは、なほ當時下行文學の特徴たる野傾系を

距ると遠からずといへども、此短所を除けば、後の小説と殆んど相近し。而して此物語の中に始終して面白く感ずるは、財物の方より主人を見限りて、有り餘るたから念却じて禍を爲すといふかきかたに在り。則與茂九郎が財貨あるにまかせ、さる大名の國腹の末女を家老の養女と爲して娶り、銀高三百四五十貫目を婚禮の費用に遣ひ捨て、願みず、よつ程見事な兩替屋が一軒出來ると世人に羨ませしに、

ある夜深更人しづまつて多くの蔵々にこめおきたる寶の精、異形異類のかたちをあらはし、輕物藏に參會す、(中略)中にも寶の大將金鷄のかくは丸、とつさかの冠にふがわり金砂の直垂を着し、しだり尾の尻袖かけたるこつきやつかうの太刀を佩き、草にけの指貫を躰瓜たぶやかに着なし、二疊臺の塀座に寛々と居直る、弓手の上座黄金の大納言はんきんかう、小列の中納言光次、子息登歩中將一角、地紙に桐の臺の大紋、元の字織りたる直垂のまだ極印目のつかざるを着し、輕目なげに對座あれば、次男二朱列の小角、稚けれども兄に劣らず、花になれたるありさまにて、きんきめかして對座あれば、馬手の上座は丁銀入道常是、子息豆板の右大將親子ともに背鎧の裝束、うちならんて家臣寛永通寶之助一穴、貫指の素袍に封の印掛烏帽子、背紐とつて確としめ、耳白の太刀一文字にさしこばらせ、嵩高にも居ながれたれ、さて其次には淀鯉龍門の助、元波りのしけぬきをひつちかへ着るまゝに、古金襴の中べり、切ちがへたる直垂にぬんきの一文字、象牙の照輪、眞田の打紐、高に結んで掛け、大床に着陣せり、すこしひき退

きて三疊だいの園の内には茶の湯の一簾三千餘騎、甲かけを大將には、何れも袋を脱いで高紐にかけ、茶巾の白旗を夕風に靡かせ、鹽瀬がふくまに座を占め、さもゆうくとこそ見えにけれ、扱又書院の置物組には、からの鏡、印天覆之助、行成の硯、螺細の硯屏、ぬんすの文鏡、毛氈照日の助、其外金襴、緞子、綸子、縮緬、紗綾、天鶴絨、北國には結の一簾こよるこぶとん、蚊帳の一族、雑物以下の人々まで召に従ひ参集す、時に金鶴仰せ出ださるゝは(中略)抑我出生は辱くも、月蓋長者御佛と心を一つにして、正武の彌陀の三尊の尊像を歸奉り、其あまりの金を以て鶴つがひの形を鑄さしむ、則鳥佛師の作なり、長者夫婦三世の契をたがへじとの誓のしるし、今正に我形なり、文祿年中までは妹春のも、の翼にかはらぬ契をかばせしに、五代以前の興茂四郎、頼智の徳ある御褒美として、わりなきなかをさかれて、此興茂四郎が家に捕はれ、五代の星霜を此職におしこめられ、むなしき月日をおくる段、無念骨髄に徹するのみか、今度世倅興茂九郎嫁を迎へて、比翼の姿の下に、連理の契を重ねるを、我眼前に見きくにつけ、一人妻鳥の戀しさやむとなし(中略)何卒こゝをのがれて、妻の行衛が尋れたし(中略)何とかたゝ力をそへ、此牢風を遁るゝ、思案偏に頼み侍ふと、羽たゝきしてこそ、歎かるれ、時に黄金大納言判金、小判の中納言光次、丁銀入道常是(中略)我々とても色里又は遊興の地にも至らず、上つ御方の手にも渡らず、萬劫日陸に朽ちなんこと、世に口惜しき次第、何卒して此職を出つ可き様の有らめと、陸陸評定まぢくたり(中略)寛永通寶之助進み出て、申すやう、我々此家の世繼興茂九郎が皮肉にわけいり、色狂に銀をすてさせ、身体をだに漬ふさ

337183

せなば、だから世上にわけちり、我々も世に出て、日ごろの思ひて仕らん云々とさし一倍の分別、九十六文掘つたこと、目をたしてこそ申しけれ、かくてはかりし如く、興茂九郎父子金錢を遣ひ捨てしも、容易ならざる大家とて、柏丸等の寶物を手放すに至らされば、寶物どもまたく評議して、曲事をはたらかせ、終に江戸屋を退轉せさせるやいなや、

金鶴はいつくともなく羽蔽をして失せぬ、水精の障子は水と爲り、淀鯉の掛物は忽大川の流水に形を失ふ、其外米鏡もろくの寶物は風塵となつて行がたなし、魂るは強苦むしたる母家蔵々のかたちのみ、松風起つて草深く、主なき屋となれり、是。

くだくしけれど、流石に面白き描法といふ可し。

西澤朝義の『風流義經記』の出づると相並びて、八文字屋が元祿十四年にはじめて公にせし浮世草子は『傾城色三味線』五冊なりき。京より大阪へ十三里、とても結ぶ夢を伏見の一夜船、寝ながら歩むと神通仙術にも優ると北條團水が『一夜船』の序にかきし如く、往來不便なる當時も、京大阪は舟楫の便ありて比隣の如くなれば、もの流行又一つなるまゝに、嚮には京に萌えし假名草子の繁りて、大坂に及びて西鶴の浮世草子と爲り、西鶴歿して朝義文流等その下流を汲むひまに、十三里は夢の通

路はやく、京都にはかへつて直ちに西鶴流の好色本を出だせるなり。若し推擲せば大阪既に西鶴ありてかき盡くしたれば、少しく目さきをかへて風流草子と號し、京は西鶴なきを以て同じとのを真似てたゞその名を新にせしに似たりと雖も之を要するに、ともに當世の肉樂主義に迎合したる抜目なき作なり。「京羽二重」真享二年版に淨瑠璃本屋として二條寺町の正本屋九兵衛則西澤朝義の本店と数屋町誓願寺下る八文字屋八右衛門とを並べ載せたりといへば、朝義と自笑とは同じ商業の縁故深きもの而も年齒僅に一歳の差なれば、豈元祿太平記ていふが如く「大阪の本屋は京へ登り、京都の書林は大阪へ往來して互に本を替へし」間柄にあらざるを知らむや、否少くとも人傳にまれ、間接にまれ、互の消息は知らんと欲し且知り得たるを疑はず。實に戯作には縁ある淨瑠璃本屋の利に敏くして西鶴ものゝ世評を詳にし、その歿後はさなきだにこゝにもと思ひしなる可き八文字屋の正本屋が「新式五卷書」「御前義經記」を公にすと見聞きては如何で袖手傍觀して已む可き。されど大阪にても或は新式と名でけ或は御前風流と冠し、内容さへも多少の新味を加へたり。八文字屋とてもさばかりの用意なくばあらず。まことに江戸時代

三百年の近世を通じてはもとより維新このかた現時にいたりてなほ餘勢衰へがたき下流の快樂とするところは劇場遊里の沙汰、元祿の當時に在りて野郎傾城の盛なるは惟しむにたらず、多くの流行は此厭ふ可き境界より動きしかば、八文字屋は今や直に此に着眼し、役者評判記を傾城の上にならして淨世草子と爲しぬ。役者の評判記は「近世奇跡考」に引きたる貞享五年版の「野郎立役二町弓」などよりはじまりしが如く、元祿十二年には八文字屋も「役者口三味線」三冊を出せしが、のち二年にして遊女の名寄せに遊廓の小話を附したる「傾城色三味線」五冊を世に公にしたるを見れば、昧裁より題名まで彼此連絡なしといふを得ず、寧ろ相擬類せしといふを當れりとせむ。而して此八文字屋本の作者の眞に誰なるやは後久しく知られず、八文字屋本の行はるゝと甚しくして書肆と作者と分離するに及び始めてその中に江島屋其磧といふ作者ありしとを知られぬ。されど到底一ひ得たる八文字屋本の名は失はれず、元祿の末年より安永に至るまで七十年間、淨世草子の本據は八文字屋を離れずして、安藤自笑の名はながく俗文學史上に銘せられたり。その七十年の端緒を開きし「色三味線」出版の時、八文字屋自笑年方に三十六歳、江島屋其

磧は三十五歳なりき。

『傾城色三味線』は京の巻、江戸の巻、鄙の巻、漢の巻五冊にて、各巻の始に島原、吉原、新町、鐘木町、室津の遊女の名とせある外、一卷に五條づゝの小話をそへたるは西鶴直流の浮世草子の體相も變らず、序に

世にきく馴たる鶯の花に鳴くもさのみ身をうつ程にも面白からず、只いつ聞ても魂にこたへて感ト参らすは島原の投節、吉原のつきぶし、新町の鐘節なり、體顔を少し背けて紅舌の動くありさま、月露花紅葉にかへられたものてなし、誠に生あつて始終やむまどきは此分里の契縁、何れ此外に又樂のあるべきや、江戸の飲茶に戀の寄太鼓、京の引舟、難波の鹿歌に、合はせてなかつ色糸ひく手に、置く勤女の品々、替りし賭分を載せて色三味線と是を名付けぬ、
八文字半屋 自笑

とあるにて命題の義は明かなり。然るに此書一び行はれて三味線といふ新奇なる題號は甚く世俗の注意を惹きけむ、三味線と名づくる著作多く世に出でたり。すなはち『風流曲三味線』『二挺三味線』を始とし、『連三味線』『繼三味線』下りては『歌三味線』さては西山朝義の『野傾友三味線』『傾城伽羅三味線』あり。別に『傾城手管三味

る『解放樓』に曰く、『自笑は京二條寺町本覺寺に葬れり今の八左衛門に至りて四代なり』註自笑は延享二年五月十一日に歿す、年八十餘、先年京都にて類焼して後今の八左衛門は大阪心齋橋筋安堂寺町に住ていすかなるくらじに見ゆ

線』あり。後世山東京傳は『風流伽三味線』の序にも『自笑其磧は元祿享保の頃の稗史の作者なり、著述數多のうちになかんづく世に行はれたるは曲三味線、色三味線、友三味線、二挺三味線、歌三味線、連三味線、繼三味線等なり、時の人これを八文字屋の七三味線と稱してめてけるよし、寶永の頃西澤氏朝義といふもの伽羅三味線をつくり都合して八三味線と

『風流伽三味線』は文化六年の春發行。こゝにいふ七三味線のうち『歌三味線』の外は朝義の『伽羅三味線』の序にも見えたれば、其前の刊行と見ゆ『伽羅三味線』は寶永五年の版なり。

す』といへり。野郎傾城の跋扈せし當時の草子界、聲の喧しきもとより明なりと雖も、また盛ならずや。たゞしはじめは名寄の主にして、話柄は客なりしに、終に主客を顛倒して名寄はなくて話の草子となり、また結構は只狹斜の談片をあつめたるものと、兎に角一篇の主人を設けたるとあり。想ふに世の逸事異聞も數を盡くせばやがて盡くる期近きならひなるに、殊に世界を狭き社會の一局面に限りたれば、勢ひ繰返へして同じとを異りたる筆に載せ、故き事を新しき版に彫らざるを得ず、摸倣も剽竊も少なからぬはまたそのところなり。已むを得ざればこゝに稍筋のたちし一部の老説を花柳の情話と羅織するに至らんのみ。

此等「三味線」の聲は素より心の駒の狂ひ勝なる、鄭音士君子の聞くに耐えぬもの多かれど、そのはじめはなほ流石に名家の筆として見る可きふし、少からず。例によりて試にその一ふしを引かば、

(上巻)一生役林もなふ身を浮雲の天水といふ男、盃酒の酔覺しに東邊へ出かけぬるに、向から来る男を見れて、當流の後下りの天慾はやるるとき、原髪にして、しかも鬘をまきたて、神主かと思へば、赤地の裏を羽織につけたり、又大盛かと思れば、つゞく幣間もなし、芝居役者には色黒し、いかさまひとくせあるやつと、近よりて見れば、是はくいにしへ目なかけてとらせし、落のはなしを、うゆう顔の五條あたりに住みし、表辻伊勢之介といひて、浦辻まさりと、滑上いひし、安筆やの浮氣者なり、さて今程は何處に居るぞと問へば、筆の命毛あれば、またお目にかゝると、まだいひかけの口合はやまず、京もすみゆく、多くの借鏡も、腹て伏見の里に、今は賭の師をして、三人口ゆるりと、美事な暮し、されど此身になりても、まだやまれば、御存知の悪性、是も大方ならぬ因果、鐘木町の龜屋の非筒に、ふかきな、ちと賢覽に、供へたし、自然大阪へお下りあらば、かならずお立より待入るなり、さて今日の出京は、餘計のない、話をお教へつゞくして、外百番を、毎日上京まで一番づゝならひに、送つて、又それを、其日に、教ゆるい、おし、ささのみ、これは、苦勞にも、存せぬが、折節お屋敷のお留守居より、雛子の、ある時、分めし、いださるゝには、困りは、つるなり、拍子ば、か、い、も、く、の、拙者め、鳴物、が、邪魔、になつて、さりと、は、う、た、ひ、に、く、し、と

いひさして互に大笑し、ばらくなりしが、何やら上から聲高に鉦太鼓をうちならし、可笑氣なる人形をつくり、焼印の箱籠を、きせて、大勢色紙の采をもちて、傾城買を送るは、く、と、聲々に、わめいて、来る、これ、は、したり、昔から、風の、神を、送るといふ、とは、あれど、傾城買をおくるといふ、と、い、ま、だ、年、代、記、にも、見、當、ら、ず、さ、り、と、は、替、つ、た、お、も、ひ、つ、き、い、か、さ、ま、い、は、れ、あ、る、可、し、と、後、に、さ、が、り、し、采、持、親、父、に、尋、ね、れ、ば、我、ら、が、あ、た、り、は、老、若、と、も、に、家、業、に、う、と、く、島、原、狂、に、賢、く、な、つ、て、(中、巻)面、々、杉、焼、も、鯛、背、盤、な、ら、で、は、味、は、れ、ず、と、宿、て、に、大、唐、米、に、五、斗、味、噌、を、へ、て、喰、ふ、な、り、し、て、伽、羅、も、鹽、釜、は、し、た、る、き、と、こ、ろ、あ、つ、て、悪、し、と、黒、木、た、く、身、代、に、て、無、用、の、贅、を、や、つ、て、(中、巻)す、べ、て、町、中、四、十、二、軒、の、内、賣、家、三、十、七、軒、残、り、五、軒、も、家、賃、に、入、れ、て、あ、れ、ば、是、と、も、我、も、の、な、ら、ず、是、皆、傾、城、狂、よ、り、事、起、る、な、れ、ば、片、時、も、早、く、此、傾、城、買、の、心、玉、を、人、形、に、移、し、町、送、り、に、し、て、丹、波、越、さ、す、可、し、と、才、覺、な、お、宿、老、殿、の、仰、せ、に、從、ひ、お、く、る、は、く、と、よ、い、年、し、て、わ、め、い、て、ゆ、く、な、(中、巻)伊、勢、之、助、又、親、父、を、招、い、て、何、と、其、人、形、に、お、の、く、家、々、よ、り、十、二、灯、を、一、づ、づ、と、そ、へ、て、我、等、に、渡、され、ま、し、き、や、さ、も、あ、ら、ば、御、町、へ、道、切、の、咒、し、て、ま、わ、ら、せ、ん、と、い、ふ、も、と、よ、り、愚、に、作、つ、た、る、親、父、こ、れ、か、た、け、な、し、と、町、中、の、若、い、も、の、片、は、し、よ、り、天、慾、わ、り、に、十、二、文、宛、出、させ、子、々、孫、々、ま、て、傾、城、買、は、申、す、に、及、ば、ず、茶、屋、狂、小、屋、狂、も、せ、ぬ、や、う、に、御、祈、念、な、の、む、と、伊、勢、之、助、に、人、形、と、も、に、わ、た、し、て、か、へ、り、ぬ、(下、巻)色、三、味、線、京、之、巻、

然れども仔細に點檢せば、此「三味線」の類書のみならず、當時の浮世草子が、いかなる文章結構の脈絡をひけるか頗るあやしきものあり。例之ば「曲三味線」の一の巻

『並の岡の隠家』の條に

此より機嫌を勢に、いざ氣をかへてお室の花と、頓飄なる末社が申し出す、これかはつて然る可しと大臣勇みたまひ、辨當は最前の亭主仕出しと直に仰せつけられ、町の内は駕籠にて急がせ、千本あたりの野道より、いづれもかごよりとびおり、さまさまのもんさくつくしてゆくほどに、妙心寺をすぎて兼好の舊跡並の岡山の麓に、梵音なして一屋の軒まばらに見越の松杉枝をふらせ、びやくしん龍につくり、つゝの帆かけ船櫻山吹のおのれとさきしほかは、皆兼好の嫌らはれし庭木、どころにすみながら徒然草さへ知らぬと涙ましく見入れば云々

など趣ある筆つきと思ひきや(既に『西鶴名残之友』元禄十二年板)の中に出てたる文字と露たがはぬ剽竊なり。『名残之友』の五の巻の末、入齒は花の昔の條に

俳友五七人其日の晝前より草庵を尋れしに、見越の松杉さま／＼に枝ふらせ、びやくしん龍につくり、つゝの帆かけ船こてまり山吹おのれとさきしほかは、皆兼好が嫌ひたる庭木、へうだんの手水ひしやく、さて釣瓶の古きに招鉢させたる燈籠、何れを見ても仔細の過ぎ氣のゆつまる物好なり、發句望まれて八吟の歌仙詠草書にしてしまへば主釜仕かけ置て(中略)大ぶくに立てましてあげんと、手前つくるひ過ぎて昔挽なり珠に盆たてして見せ、親に正客にさし出せば、身をつくりてのみかゝりしが其次へもまわしかれ、俄に赤面して、これはこれにて任舞ひますと一人して吞んで茶碗うち

さて改め、近頃面目なけれど私の入齒此中へ落こみまして、如何にしても外へは進じ、難くてかゝの仕合なれば御免と断りいひたて、廣坐敷へいてける、

『見越しの松杉』より『兼好のきらひたる庭木』いかに西鶴の流を汲むとはいへ、甚しからずや。されどまた色三味線作者と署名せる『寛濶役者氣質』下の巻の『野郎隠藪に身をうちこむ道頓堀』の中には右にひきし、入齒は花の昔』の全文と殆んど一字一句の差なき一段の文字あり。聊以て當時頻出の内情を推すに足らむ歟。

『三味線』はもとより野傾の玩なり。その名奇にして類本頻出すといへども、質に於て之と差異なき傾城野郎の浮世草子は並行するを慥しませず。寶永年間に於て出てしその著しきものを擧ぐれば西澤朝義に『茶傾ひそり貌』四冊、『野傾百物語』五冊、『男傾城文枕』五冊、『衆道戀暮櫻』三冊等あり、錦文流に『好色手柄咄』五冊あり、八文字屋ものに『野白内證鏡』五冊あり。然れども前にもいひし如く、いかに野傾の俗世間にすたらぬまでも、年々歳々同じ花の姿は見るとも、同じ草子の陳套には飽かむ。

、因にいふ、此外『役者氣質』上の巻、名残の人形は物いほの『寛濶の池』といふ條中には、『名残之友』の巻の四、小野の炭焼かしらも消え時の條と四五百字の長段、全く國文なるなり。なほ此種のと多かる可きも心つきし一二をいふのみ。

されば一面には之を巻説傳奇に繋けてその結構を新にせんとし、一面には三味線の可笑しく引なして聞く耳を新にせんとするに至れば、益新なるもの、喜び迎へらるゝを見て愈新ならんとするは名を求め利を射るの心なり。寶永五年に菊屋の出版せし西澤朝義が『風流三國志』の三の巻に『志の男』京都二條に古き淨瑠璃本屋なり。色講談『志の禁談義』などいへる條ありて、當時世俗に流行せし法論談義に摸擬して男色女色のうへを辯論せしに一時の機慧なりしが、忽八文字屋作者の着眼するところと爲りしが如し。すなはち、後二年八文字屋よりいでし『傾城傳受紙子』の卷末尼と爲りし傾城が法話を爲すところに『傾城禁短氣』出版の豫告、同年の出版『野白内證鏡』の三の卷の末にも、來月中にちがひなく出し候といふ豫告ありて、翌寶永八年その書世に出て、八文字屋自笑の名を喧傳するに至れり。

彼の『志の禁談義』といふも、此の『傾城禁短氣』といふも、『替敷記』の名を摸倣せしものにて、『禁短氣』枕本六冊、一部の趣向は、序に

衆道門の窮屈なる物堅き宗旨を破し、老若ともに女の道に赴かせんと草庵を出て、洛東水邊衆道盛の場におゐて、一七日の説法は何と有難い事ではないかチン

とある如く、擬法論摸倣教なり。さればその目にも、島原の女郎方便の一枚起請、付リ太夫の内證眞實報恩謝といふに始まり、『五重相傳一重紙子』仕掛の淵に深入せぬ大臣の觀念』に終るまで、『女郎方便品』といひ、『色道因果經』といひ、皆悉く法文めかせし新趣向にて、終に

上人今までのばされし鼻毛をほつすにして、終には無師自悟の石佛となつて、席の高屏の外にもたれかゝつて、毎年七月二十四日には、禿どもが手にかゝつて地蔵祭に花をやりぬ、誠に悟れば粹、迷へば月、八萬寶蔵の黄金をもつて此道を明らむ可し、自無量の手管をばかり見る、分知とはひとりなれり、たゞ夢の浮世に無念無想にして、遊ぶところが極楽

と結びたり。云ふまでもあらず、正經の書にあらず。然れども其比譬の巧妙にして或は佛經の字句を借り、或は論辯の口調を用ひ、諷誦の辭に托し、喃喋の詞を雜へて、縦横無礙に書きこなしたる筆力痛切に、大に從來の浮世草子と異なる點ありと見えしかば、世間の看官は大に之を歡び迎へ、八文字屋自笑の名は此書によりて甚高くなりしが如し。蓋し『三味線』の音色艶にかきならし、おとに忽『短氣』の論辯、激しく法話の鈴の音とかはりし、可笑しければ、當時の喝采も理無きにあらざりけ

む。従つて彼に一時、友びき、連びき、繼棒の音喧すくひきたてしが如く此『禁短氣』の餘談ながく聴衆を有して相續きて若干の類書を世に見るに至れり。すなはち後の江島屋其碩が『傾城情の手枕』寛保四年版五冊、更に下りて江戸大傳馬町鶴隣堂より出てし『禁短氣』次篇、同三篇、明和二年版五冊等之なり其碩の『情の手枕』は『禁短氣』の談義的趣味少きも、作者未詳の『禁短氣』三編は五十餘年の星霜を隔てながらかへりて『禁短氣』に近きところありて『女郎』一人に客二人は三物情讚佛乘の飲宴、『遊事は錢ほど光る阿彌陀笠』、『黄金の肌は千五百兩の光明』、『肝煎和尚の五重相傳』などの目を立て、文中にも西鶴の『一代男』、『一代女』を一代男經、一代女論とかき、戯言(華嚴)野魂(阿含)抱童曹洞(娼婦)繫若(艶客)圓覺(童奴)金剛の諸興文など興じたり。また『禁短氣』の喝采ありしを證す可し。

八文字屋の『傾城禁短氣』の自序に寶永八年卯月中旬とあり、其月二十五日改元ありて正徳元年となりたり。されば七年西鶴の草庵を守りし北條團水はこの『禁短氣』を見ずして歿したり。想へば西鶴世を辭してより茲に十八年、そが開きし浮世草子はますく幾多の作者に祖述模倣せられて世に布くに至りしが、彼西鶴が述

作は所謂一代男經、一代女論さては男色大鑑の二色兩道の經鑑たるに止らず、別に『武道傳來記』、『日本永代藏』、『本朝二十不孝』、『懷視』、『新可笑記』の類ありしを忘る可からず。然らば野傾の諸物語、諸三味線、若しくは傳奇的艶話の行はるゝ上の如き元祿寶永の世には此種武家町人の氣質を描出せしもの、若しくは雑話お伽話流の浮世草子の系統は全く絶えたりやといふに決して然らず。西澤錦、八文字屋の以上列記の諸作の外、また別に後者の數多く世に行はれたるなり。

此等かの野郎傾城ものゝ外に、文壇に一旌旗を樹て拮抗下らざりしは武家町家の物語諸種の雑話をまとめたる教訓もの、及びお伽草子、諸國百物語の類なり。もしその文辭の華麗、筆致の巧妙を概論せば、此は彼に對して多少の遜色あらん、また浮華なる當世の人情に迎合するに於ても、或は讓るところありしならん、と雖も、要するに決して野傾の淫靡談の爲に當時の文壇を奪はれざりしは特記す可きことたり。或は此等のもの多くは巷談俗説の斷片、逸事異聞の蒐輯に過ぎざるもの多からん、野傾物語と雖もまた多くは然り、或は彼の如き文學的變化なくして事實の叙述に傾くの嫌あらん、後に變化し來る可き俗文學の命數はまた此事實に

近き材餘に負ふところ多きを想はゞ、優に彼此對觀の價を附して可なり。况んやその中の半はまた野傾物語と等しく西鶴が美文の流を汲み、或は然らざるも少くとも了意が波をあぐるもの、決して無味嚼蠟の敘事にあらざるをや。請ふ少しく方面を轉じて西鶴歿後寶永正徳の際に及ぶ間の諸雜物語に就きて數言を費さむ。

西鶴に『日本永代藏』貞享五則元祿元年版六冊ありしが、後廿五年を経て守慮の門人北條團水の『日本新永代藏』六冊世に出てたり。『日本新永代藏』は正徳三年の版なれども、著者團水は之よりさき二年既に世を辭したれば、その脱稿はその前に在る可し。團水は京人、橋堂又は白眼居士と號し、戯作には鳳城團水、滑稽堂主人、團粹然和尚などの諸號を用う。椎本才麻呂の門に入りて俳諧を善くし、資性恬淡、生涯清貧に甘んじたりといへば、もとより浮世草子に於て西鶴が業を紹く可き器量にあらざりけむ。守慮七年も俳諧點者として師の舊庵を守りしにて、世間には俳諧師として立ち、俗文學の述作はその餘業たりしに似たり。されば流石に俳諧者流の博識を銜誇し、神儒佛を羅へ諸史百家に出入せるその文章は當時に文名を稱せられたらんも實は殆んど古人の成句を點綴し、古書中の事實を臚列せしに過ぎず。そ

の述作に至りては多くは隨筆風にして、未だ寛文章粹時代の稚氣を脱する能はず、况んや一代の文豪西鶴が才氣縱横筆力痛快なるとは比較す可くもあらず。これかの朝義、文流、自笑の輩をして名を爲さしめし所以なり。されば『新永代藏』も團水の諸作中にてこそ瑕疵少き出色の作なれ、西鶴が『永代藏』の後編として實に貂に續ぐの狗尾たる譏を免がれざるなり。月尋堂は北

て、團水は戯作の外に『團袋』一、
『くやみ草』二、心の紫』一、
『蘭館』二、
『秋津島』二、
『特牛』二、
『狂言』二、
『彌み助人形』一、
『未曾有格』一、
『塗笠』三、等の著作あり、

また石砂子の號あり、石砂子或は石別子ならんといへど明ならず、また定延狂書、麻長などの印を用ひたり、寶永明和頃の人なれども、通稱人物詳ならず。

『商人家職訓』享保十六年以前の作、五冊、『商人軍配圖』同十八年版、五冊等はみな『永代藏』の流を汲むものなり。

次に武家物語の脈派を討めれば、元祿の末年に『通俗唐太宗軍鑑』正徳に『十二朝軍談』等唐山演義の翻譯出て、古くは『太閤記』以來、近くは『義貞勳功記』正徳五年版に至るまで雜史演義の類多く出でたれば、當時實際に起りしち家騒動武家の意氣張、果し合などを或は時代に敷衍し、或は美辭に和らげて續出するに至り、西鶴ののちまた

此種の作少からず。例之は團水に『武道張合大鑑』一名、おとこだて『五冊』、武道一覽『八冊あり、月尋堂の作には『武道真砂日記』五冊あり、林文會堂は『武家堪忍記』八冊の著あり、下りて享保に其積の『武道近江八景』また此種のものなり。但し『武家堪忍記』は淺井了意が『堪忍記』を武家に移したる名なり。

此外武家町家などの種別無く、諸種の雜話を編述せる所謂教訓もの、お伽草子、百物語の系統に屬する者また尠からず。例之は、寶永五年版青木鷺水の『本朝新堪忍記』七冊全、じき六年版行の月尋堂の『兄弟善惡車』六冊、今様二十四孝、六冊の如きは趣意主として教訓に在るが如し。鷺水は京人、通稱は治右衛門名は五省、白梅園三省軒、歌仙堂等の號あり、西鶴團水等と同じく俳家の士にして、初野々口立圃の門に學び俳諧を善くせしが、その壯年は恰も京に淺井了意浪華に西鶴が浮世草紙好色本を出だして世上の歡迎を受けて名聲噴々たる時に相當したれば、頗る詞才に富みし鷺水も晩年終に述作に従ひて寶永時代の一作

此書及世間用心記はとも
に明和年間の版なれども、こ
は再版もしくは作者歿後の
版行なる可しといへば暫く
寶永、正徳間に繋けて此に併
叙せり。

鷺水は享保十八年三月二
十六日享年七十六にて歿し
たれば、了意が浮世物語の版
となりし延寶九年則天和元
年には年二十四、四鶴の好色
一代男の出版せられし天和

家に數へらるゝに至れり。但し世に鷺水は西鶴の流を汲みて浮世草子の作多しといふは洵に當れるものから、なほいは、西鶴よりは多く了意系統をうけし伽はなし、教訓もの、作者たりしに似たり。そは『丹前艶男』の如きものは少くして『新勘忍記』百物語の類多ければなり。その『新堪忍記』は文會堂の『武家堪忍記』と等しく、また淺井了意の『堪忍記』に倣ひて了意は多く材を和漢の故事に採りしに、鷺水は概ね現時の事例を用ひし差異あるのみ。『お伽百物語』はまた了意の系統、近代因果物語は鈴木正三の『因果物語』に對せし名なるもその證と爲す可し。而して其作は水谷君がよく事を叙したるまでにして波瀾もなく全躰に趣味を缺けりとの評を當れりと爲す可し。月尋堂の『今様二十四孝』も了意が教訓草子なる『太和二十四孝』に對して鷺水の『新堪忍記』と似たる關係を有せるが如く、西鶴が名作『本朝二十不孝』の裏面をゆきし作なり。當時の世話に上りし孝子二十四人の身の上を一部に收めしは題號の示すが如く、

二年には年二十五、了意の歿
せし時は三十四、四鶴の歿せ
し時には年方に三十六歳な
りき。

四鶴の『二十不孝』も新因果
物語の名あり。鷺水、戯作な
らざる此外の著作には、『人
なと』、『此菜』、『春の物』、『手習』
、『下』、『書』、『増補糸扇』、『俳諧
八重垣四』、『全新式』、『全指扇』
、『全』、『良材』、『萬葉假名遣』
、『徒然草集』、『四』、『故事要可』
、『一』、『萬葉樂附言』、『鷺水閑談』

平易なる俗文にて野卑ならずして細緻なるところに——等十數部あり。當時有数の著作者たりしと知る可し。味あり短篇ものゝ好模範として採る可く此種中の出色文字と謂ふ可し。

お伽草子百物語の類に至りては其數甚多く、鶯水も寶永三年に『お伽百物語』六冊を出し翌年その後編として『近代因果物語』六冊を出だし、なほその續篇六冊合せて全部十六卷を出す計畫なりしよしなり。その外また『芭蕉翁諸國物語』年月未詳六冊の著なり。林文會堂が『近代お伽百物語』も鶯水の『お伽百物語』及び俳林子の『諸國新百物語』柳絲堂の『拾遺お伽婢子』等と前後一系に屬するもの、寶永六年出版の錦文流の『本朝諸士百家記』十冊また然り。また元祿寶永の際に出でし文會堂の『玉櫛笥』七冊、寶永三年版の『玉簪子』六冊は了意が『犬張子』の續集になぞらへたりと自誌し、正徳二年、全じ人の『當世智惠鑑』六冊公にせらるれば翌正徳三年には北條團水の『本朝智惠鑑』五冊世に出づ。團水の『一夜船』五冊は正徳二年に出でしが、後享保に入りて『権談諸國物語』と改題して再版せられたり。此等の書或は智惠鑑といひ百物語といひ、諸國物語といひ因果物語といふも、その實等類にてみな諸種の雜話小話を一部に編述したるものなり。例之ば『玉簪子』に著者自叙して

怪しく新なる雜話、小話を聞およびては、心によろこび、筆にしるして俗むことを知らず、ひとり書編に求るのみにあらず、凡當時博識好事の人々、此堂に過れるには、まづその郷里を問ひ、その所に聞えし奇事をたづねてしるしといふめ、かく書編に搜り人々に使へて草稿せしを、先年友人のもとめに應じ繕寫して玉櫛笥七卷をあらはし、了意狗張子の續集になぞらへり、今年猶またその遺るを集め、いまだしらの田舎人の慰めにもせよとすしむるに、例の技癢にたへずして、また『玉簪子』六卷をいだしぬ云々、

といひ、また『お伽百物語』の著者は

春くらし九かざれの内も外も分きてみらしのけふは長閑きと打ずして、外面のかたを詠やれば、來ぬ人も誘ふばかり、やゝ縫ひそむる梅が香いとなつかしう、夕日の影ながら袖に移り心にしむる夕風はぞと、まづ思ひいづる頃、我梅園の扇に、例の二人三人ぞ見え來つる、それが中に珍かりしは、此四五年が程、あづまの方に浮れありきて、名ある山、勝れたる地、跡たれます神の社、行ひすませしといふ佛の寺、尊きくまゝ、殘りなく修行し、行ひありきたりといふなる聖の、いと老ほれて、頭白く眉鬚なども黒き筋なしと見ゆるをぞ、ともなひ出て來たる、こはいかなる人にか、思ひの外にとや、もてなさまし、そも何人そと問せたるに、此將來人のいふやう、是は六十六部の御經を治めて諸國をめぐりあるといふ、うきめ、恐ろしきと見もし、聞きつくして此春はこゝにものしたまふ世捨人にあんなり、よべよりわが方に宿をかしまぬらせ、夜一夜かたりあかし、

法文など承りつるに、また二なき稀有の物語も侍ふにつきて、よし我ひとりきかんも無下なりとおもへば、今宵はこゝに伴ひはべりつるといふに、我もやこゝる動きてさちばよ、かばるゝあとうち給へ、まるは物忘のせん方なれば、書留めてもよしあるは残す可かりけりとして、現ひきよせつゝ、二ツゝかきて見るに、いさや浮たることどもしらせど咄しはなしけり、聞きもききたるかな、すゑるにことのはのしげりゆく敷のやかて十つゝ十にもやとおもふばかり、息もつぎあへず、何くれとつもりて、はてゝは手もたゆく、ねふたきまでになりたるに、なほやますぞいふ云々、

と長々しく來由を作り、また「一夜船」の初には團水、同じ趣向の六十六部のはなしを

京より大阪へ十三里、とても結ぶ夢を伏見の一夜舟、鹿ながら歩むこと神通仙術にも優りて、安樂の世や、關東關西の乗合の中に、管より辯舌遊者なる聲は、四方山を修行の六十六部の初發心、見聞にふるゝ事を咄しつゝ、けて、さりとて睡りをさませしかば、耳にとゞまりし端々を、思ひ出づるまゝにかきつけて、閑夜雨中の伽とす、船中の記なれば題して名くると然り。

と短かくかきて開序と爲しました「當世智慧鑑」も、諸國行脚の六十六部、東國にて一夜夢に源三位頼政を見て古今の成敗、善惡の去就を論ずるより始まり、行脚中に見聞遭遇したる奇事異聞を輯めたるもの、「芭蕉翁諸國物語」またその名の示すが如きもの、「本朝諸士百家記」は一とせ著者堀江の河岸に病を養ひし時きゝし諸士の話を綴

りて「宇治拾遺」に據せし作なり。以て以上の同種のものたるを推知す可し。因に云ふ林文會堂は西澤八文字屋と同じく京都の書肆なれども、伊藤仁齋の門に入りて學殖あり、かの奇骨の士、兵戸鐵舟都の錦の如きも、同一「元禄太平記」の八門の故好による可けれど、大に之を稱せり。文會堂通稱九兵衛名は義端字は九成或は戲號に往悔子の名を用ひしが如し、戲作外また若干の著編あり。

シ、「當世智慧鑑」
ト、「扶桑名賢詩文集」
「詩林真材」
「文林真材」等、数部あり。

以上は西鶴歿去より正徳に至る京阪俗文學界の主なる作者、主たる著作に就きての概要にして、則野良傾城種の浮世草子若しくは傳奇的淨世草子は、都の錦、西澤朝義錦文流、八文字屋等の諸作者、教訓ものも伽草子、百物語に北條團水、青木鷲水、月尋堂、文會堂の諸家ありて、都の錦の作は亦此うちにも入る可く、所謂多士彬々、旗鼓相當るの感あると十餘年、廿年に近かりしが、正徳の際に及びて形勢漸く定まりて、諸作者多くは退き、獨八文字屋の聲譽甚高きを見る可し。然れども之と共に八文字屋は忽江島屋との對抗と爲り、從來世に知られざりし其蹟の名初めて顯はれ、また從來の浮世草子の内質、茲に一轉するに至れり。請ふ章を改めて之を叙せむ。

第壹章の四 浮世草子の三

浪華の鶴翁世を辭して後諸家その浮世草子の系統を傳承して京攝の俗文學界に對立し、そのの特長を以て相競ひしが、二十年ならずして正徳の始、霸柄は終に八文字屋の手に歸し、終に天下後世をして浮世草子を總稱して八文字屋ものと汎稱するに至らしむ。蓋し西澤、北條、青木、林、錦の諸家、或は世を去り、或は筆を閑き、方針を變じたりと、八文字屋ものが最時流の好尚に投合するの妙を有したるに由り。勢此の如きを看取せし八文字屋の主人、八右衛門は既に出版發市の實利を得しを以て足れりとせず、更に一步をすすめて世人の耳目を引かんために寶永の末に及び作者八文字自笑の名を署せり。されば自笑の名は忽地にして「色三味線」の絃に鳴り「禁短氣」の法談に著く、讀書社會に喧傳したりしに、その内證を照らせば法談を脱くもの、三絃を撫するものは實に署名の作者自笑にあらず。自笑が八文字屋もの、世に歎び迎へられてきた比敵する者なきを視てみだりに著作出版の名實を斷せんとしてしより、禍忽内より起りて端なく内情を暴露するに至りし

が爲に隠れたる名を史上に著はすを得しは作者江島屋其磧なり。正徳四年出版の劇部評判記「役者目利講」は

役者評判本は中頃出水通和泉屋八左衛門と申す草子や板行いたし、年々古板に書き加へて、或は役者舞臺、又は櫻園等など、外題を替へて出し候ところ、此役者目利講の作者其磧と申すべきもの、三津を三巻にわけ、ひときりつつの序をつけ、御慮に上中、又は「白字」の上など申位付を致して役者口三味線と題號をつけ、ふや町八文字屋八左衛門へ遣し申せば早速板行に致しぬ、それより毎年せがまれ(中略)例年たえず仕遣し候、五六年以來は(中略)評判の仕方を教へ、八左衛門に致させ、外題目錄三津の序を仕遣し候、然るに此作者其磧一所の江島屋市郎左衛門と申す新本屋と役者評判本は向後八文字屋と相版にいふされ、未々まで入魂にせらるゝやうにと作者いふ、申せども、八文字屋一人していつまでも仕るべき由申きり、不同心にて却て江島屋方をさして似せ、本又はおきらばしき草紙など出し候と、八文字屋いり断書出し候段、作者身に仕候ては心外の至りに仕候と八文字屋江島屋手切れの次第を述べ、さして八文字屋か年來の内證を發きて曰く、

抑八文字屋八左衛門と申す草子屋は何にて世間へ廣く名を發し候や、二條正本屋、岡崎屋は古來より淨瑠璃本にて名を取、八文字屋は京芝居の歌舞伎本を版行仕候外、その名家名を御存知にて無之候、然る處此作者其磧、松本治太夫方へ淨瑠璃を作り遣し、其器り本を八文字屋へ遣はし板行させ候て、いり年々の評判本は申におよばず、傾城色三味線、又

は曲三味線禁氣傳受紙子色情あひ離形御伽音の類なきのみ書数多遊し候
 處に各々様の御意にいり八文字屋といふ是より浮世本評判本の名取のやうに罷りな
 り候事八文字屋の功にて候や作者其積のにて候や此段はいかりなから世上の人さま
 御了簡可被下候殊更作者の實名を出さず作者八文字屋自笑と致させ出さば候程の深
 切をかへりみず今にては八文字屋と名をとり候上なればたとへ鳥の母と書て板行仕
 出しても八文字屋と申す名にて賣中すとの所存高島盛きて耳耳かくとやらんにて
 功を立遣し候作者の中分用ひず作者一所の高島屋を削り一人の功に可任存念云々
 と。以て知る可し「傾城色三味線」「曲三味線」「禁短氣」等の八文字屋自笑の名を世
 に高からしめて浮世草子は從來世に知られざりし作者江島屋其積が筆なりしを。
 水谷氏の小説史は推論して曰く「思ふに當時發賣高の最も多かりしは草子よりも
 評判なる可ければ其積は此評判記にてその利とかれの勢とを殺ぎかくて自家の
 骨折に報い聊か不平を慰めんと思ひしなる可し」と。然るに八文字屋江島屋相板
 の議合はずして分離するに至り分離と共に江島屋其積の名と業とはじめて世上
 に公にせられたり。要するにその名を争ひしが利を争ひしか草子に於てせん歎
 評判記に於て離れしかは討尋の要なし名實二つながら相合はざるに及びて八文
 字屋の内情は露せり。江島屋其積は抑如何なる人ぞ。

其鯛庵の「翁草」によれば京都京極通り誓願寺の門前
 にむかしより餅賣る家ありて大佛餅とて世にもては
 やされ京名物の一に數へられしかば繁昌大方ならず
 家富み榮へしがのち業をかへ誓願寺通り柳の馬場へ
 轉り富めるまゝに子孫自ら奢侈に流れ遊里にもたち
 交り風流を事とす。江島屋市郎左衛門の家これなり。
 寛文七年に生れし市郎左衛門は則後の其積にてその少壯の頃はかの天和貞享元
 祿の盛時に當りしかば富家の子弟自柳巷花街の風に泥まざる能はず漸くに財を
 散じ産を失ひ四條御旅町に移轉せしも家道は大に衰へたり。されど富豪の子弟
 にして驕奢遊興の爲に落魄せし市郎左衛門は自風流韻事に通じ詞才に富みまた
 よく當時の人情世態に明なりしかば或は役者評判記を作り遂に浮世草子の作者
 其積とはなれり。願れば西鶴が「二代男」の浮世草子の地を拓きしは其積が十六の
 春その「二代女」の出てしは近松巢林子が始めて竹本義太夫の爲に「出世景清」を作り
 しと共に其積が年二十の時に當れり。のち其積二十七にして西鶴は世を去りし

其鯛庵此口は大阪京町奉
 行附典力神澤與兵衛といへる
 雜學者にて讀書を好み俳諧詩
 文をよくし早く隱遁して著述
 に従ひ著はすとこる「翁草」
 百卷「續翁草」百卷「ちりひら」
 三十卷等あり。寛政七年三月
 廿七年卒す。八十六。

も巢林子はなほながく世に在り評判記、浮世草子の作者たるにいたる。其磧は假令此二文豪と親交なしとするも、生前未曾て相見ざることなからん假令相見ずとするも其作に接し其人の感化を受けざりしとはいふを得ず、當時の諸作者とともに其磧も亦二文豪に得しところ多きや疑莫し。此作者其磧が八文字屋との關係は上にひくところの手切れの文言にいへる如く、松本治木夫方へ淨瑠璃を作り遣はし、其語り本を八文字屋へ遣はし、板行させしに始まりけむも、寡聞未だ此淨瑠璃とその板行の時を知らず。『役者口三味線』の八文字屋より出でしは元祿十二年三月にて其磧年三十三頃なれば、此時より正徳の分離に至る十五年間は『役者返魂香』(正徳五年板)の序にいふ如く、其磧八文字屋の作者たる可く、八文字屋の諸著は實に其磧の手になりしもの多かる可く、中ごろ其磧はまた三條通正本屋九兵衛に頼まれて『役者一挺鼓』といふ評判記をかきしとあるも、二書店かけもちなりがたしとして、正本屋のかたは圓水といふにたのみ己は専ら八文字屋の作に従事したりといへば、それよりのちは更に其磧の手になりし八文字屋もの多き理なり。勿論評判記のことは自笑に教へたりといへども、浮世草子にいたりては明に其磧が作といへり。

想ふに、其磧は富豪の末にして治産の才乏しき風流漢たりしかば、始は懸半券に文筆を遊びしなる可く、従つて自名を公にするを憚りて八文字屋に著作を與へけむ、所謂作者八文字屋自笑と署名せし深切は此間より出たる可し。然るにその作は圖らずも八文字屋の利を致すのみならず、其名さへ爲さしめしに、眞の作者たる其磧の名は埋れたりしかば、心快からざりけむに、身は落魄の境にありて、他人が己の力にて年々巨利を占むるを見ては、ます／＼忍びがたく思ひ、終に其子江島屋市郎左衛門を書肆と爲し、相版の議破れて、正徳四年春より其磧自笑の分離を見るに至りしなり。

事此に及びては、當時の世人が所謂八文字屋本の作者争に疑惑せしむとく、今日に於て、自笑が文豪の有無著述の才の如何に疑惑するなり。後世の見るところは概ね自笑を以て世才に老け射利に鋭き商賈にして、文筆なきものと爲し、甚しきは自笑といふ名さへ多田南嶺が命名なりと貶すに至れ。

○山本が『福旅漫録』に見えたる橋本經亮がはなしなり。

り。實永の末には漸く十二三歳なる南嶺が八右衛門に自笑の名を命ぜしなどは不詮鑿の空言採るに足らずと雖も、自笑は全く不文なりしにや、素より其磧を要せ

ずして文壇にたつ程の文筆はなかりしと明なるも、後世貶すが如く甚しき文盲なりしやは確證なからむ。さばれ茲に自笑が『女男伊勢風流』の自序に

久しく拙翁の遺冊を讀ひて、これこれかきつられけるに世には物むつかしき人あり、それも他の筆をかりて我名を顯はすといへり、されば同門相れたむならんとは侍れども、是又絲竹の道にもあらず、生兵法のほててんがう、戯遊者の手柄話いけすのよれの客よ

ばより、庸者の堅い自慢、世間法師の受賣談、いづれかそしりの種ならんはあらざりきなどいへる薄弱なる辯疏を信するにあらず、寧ろ其蹟の去るや八文字屋は別に新作者を聘用せしを信せんとす。正徳五年の江島屋の口上に、

八文字屋方より出て候評判本、其他風流本ともに前の作者(其蹟なり)とかはり素人の新作に御座候、自今は江島屋と申す本屋の方が御な、かの作者に紛れ無御座候間、珍敷趣向共御よみくらへ被遊御覽可被下候

といへるは強ちに同業相れたむ辭のみにあらずして、八文字屋の實情なりけむ。但分離の後八文字屋が續々出版をついけたるを見て、その素人たる無名の作者の如何なるものなりしやを知らず、従つて作者として自笑が地位の不明なるを憾むなり。

正徳四年に其蹟去りて後の八文字屋本と新本屋たる江島屋市郎左衛門が出版

とを比較すれば、著しき差異を發見するは容易し。例へば正徳五年に八文字屋より『風流説平家』『義經風流鑑』各五冊を出だせば、江島屋にては『丹波太郎物語』三冊、野傾旅葛籠』五冊、『世間息子氣質』五冊を公にし、翌正徳六則享保元年に八文字屋分里鮫行脚』五冊を版行せしに、江島屋は『當世名代男』五冊、『世間娘形氣』五冊を刊行し、享保二年、八文字屋の相もかはらず、『野傾咲分色好』五冊、『野傾髮透油』五冊を出だし、に對して、江島屋は『國姓爺明朝太平記』の如き傳奇ものを出版せり。役者評判記は其積自笑分離の導火と爲りしも、俗文學に重きを爲すにあらざれば暫く措く。上の書目を見れば八文字屋がなほ野郎傾城の内話をつづけて依然好色もの、陳套を襲踏せるに反して、江島屋の出版は『野傾旅葛籠』等を除けば概ね新様を出だせるを見る可し。御なじみの版元たる八文字屋はあながちに「たとへ鳥の母と書て板行仕出しても八文字屋と申名にて賣申との所存」にはあらざらんも、新作者の手腕はかへりて新案を出す能はず、二十餘年の舊様によりて胡盧を描くにひきかへて、御なじみの作者と自名乗り出でし其蹟は如何にもして八文字屋を壓倒せんと苦心焦慮の結果にて珍しき趣向を御覽に入る、約束を實行せしなり。ましてや此時

其積は齒既に四十九、五旬に近き身は漸く蕩樂の夢に飽き、世態人情を視る眼自一變じて思索漸く着實と爲り同じく鶴翁の遺冊を懐ひても『二代男』『一代女』ははや見盡くしたるをや。而して八文字屋が變化茲に及ばざるは自著作の筆を執るとと妙くして主として書買發市の事を自己がつとめとなせばなり。『國姓爺明朝太平記』五冊は所謂傳奇的浮世草子の一なり。傳奇ものは之よりさき既に野傾物語の外に流行の一生面を開きしとは前章に説けるが如く、寶永七年の『傾城傳受紙子』五冊は作者自笑と署して赤穂義士復讐の始末にがらみし傾城陸奥のはなしなれば、たとひ眞の作者は其積にもせよ、八文字屋ものにはやくも傳奇もの、一生面を開きたれば、此『明朝太平記』は今さら敢て變化の妙を論す可きにあらず、野傾物語の輕浮なるに聞き飽きし世間の風潮と伴ひて既にあらはれし流行に従ひしにすぎず。唯注目す可きは『世間息子氣質』の著なり。『世間息子氣質』は『傾城傳受紙子』がたゞといふ語は後世は堅固にして浮薄ならぬ意に用うれば堅氣と開ゆれども、寧ろかたは容形きは氣にてかたきはそのもの本來の性情形質の意なりと見るを妥當とす可し。かの西鶴の『五人女』を『當世女容氣』といひしる、その婦人の諸種

の特質を見するほどの意なり。想へば其積は流石に奇構の作者なりけり。その八文字屋に在るや、色三味線『禁短氣』等の妙趣を以て世を驚かし、いま八文字屋と離るるやこの氣質本のかはりし趣向を立てたりしかば、新奇を喜ぶ世俗はまた直ちに此新趣向を喜び迎へんとせり。正徳より後、明和安永に至るまで氣質もの、續出せしは偶一面には更に新趣向を立つる才人なきによるといへども、また其積が着眼の奇警なりしに因らずはあらず。當時の社會は久しく八文字屋の名に馴れて、江島屋其積の新しき名を信ぜず、所謂鳥の母と書きても八文字屋といふ名にて買ふの趨勢なりしとも斯の如き俗界は又た動かし難からず、之を久しくせば恐らく其積の妙趣名筆は八文字屋の顧客を奪ひ得たるや必せり。然るに其積は顧客を奪ふの時を待つ能はずして、また八文字屋の名を爲すに至りしは最惜む可し。八文字屋は業用盛にして全力強大に數多の文士書師を籠蓋して世間の信用を博し利を射富を積むと多かりしかば、新しき江島屋は獨立を以て之と對抗する能はず、八文字屋の盛大を忌める正本屋鶴屋、菊屋、谷村等の諸肆と連合して僅に之を陥れんす。されば初は尙信用なくして草子評判記のうれゆき抄々しからずと雖も流

石の八文字屋は其積彼に在りて久しくして勁敵たらんを慮りしかば享保四年に至り自笑其積の和は成れり。正徳四年より此に至りて六年なり。

和睦成りてのちなほ四年の間は江島屋の名存せしもその後見えすといへば其積の書店は此頃よりやみしか。されど其積はこれよりのち八文字屋の作者たるとともにまた諸方の書店の依頼に應じて全盛を極めたりしかば從來の浮世草子は八文字屋本たりしごとく爾後元文にいたる浮世草子の世界は殆んど其積執柄の下にありきといふも溢稱にあらす。故に其積の勢盛なるや八文字屋が僅に残墨を保ちし野郎傾城の内幕話は殆んどその跡を絶ちて稀に餘脈を存するのみ。假令上來述ぶる如き事情ありて自笑其積が著作の範圍は其出入なきを得ざるも試に享保年間其積の諸作として見る可きものを擧げて之を檢すれば思半に過ぐるものあらむ。例へば『傾城竈昭君』(享保四年版)五冊、『女將門七人化粧』(同八年)五冊、『櫻曾我女時宗』(全)五冊、『風流七小町』(全)五冊、『出世握虎昔物語』(全)十一冊、『本朝會稽山』(全)十三冊、『記録曾我女黒船』(全)五冊、『奥州軍記』(全)十六冊、『義經倭軍』

此書は作者不詳なれども八文字屋江島屋和解の年の板にして流屋辰五郎を材料にせる傳奇ものなり。

談』五冊、『花實義經記』五冊、『薩本平記』(全)十七冊、『補軍法鏡櫻』(全)五冊、『鬼一法眼虎の巻』(全)十八冊、『梅若九一代記』(全)十九冊、『咲分五人娘』(全)二十冊、『武道近江入景』(同)二十一冊、『兼好一代記』(元文)二冊、『高砂大島臺』(同)五冊、『橋三代壯士』五冊、『大友真鳥』五冊の類は畧『明朝太平記』と相似たる傳奇。此は著者没後の版。ものにして其積著作の多數を占め、世間手代氣質、享保十五冊、『浮世親仁氣質』(同)二十二冊はかの『息子氣質』、『娘氣質』等と等類に屬し、此他『善惡身持扇』(享保十五)三冊、『商人軍配圖』(同)十八冊、『渡世身持談義』等は西鶴の『永代藏』より脈路をひける教訓的草子にして中に就きて風流好色本は『風流東大全』(享保十六)五冊、『傾城歌三味線』(同)十七冊、『風流西海硯』(同)二十冊、『風流軍配圖』(同)五冊、『傾城情の手枕』(寛保四年版)五冊等に過ぎず。これすら半は傳奇ものに近く、また従前好色本流行の比にあらず。元文の始其積世を去り南嶺等之に代りて八文字屋の浮世草子なほ世に出でしも此大勢はまた挽回す可からず。回顧すれば西鶴が『好色二代男』の名太く世俗の視聽を聳動せしより茲に三十餘年を経て轉變の氣運熟し、好色もの殆んど衰頽に歸したるは洵に社會意慾の大趨勢に因ると雖も其積が轉振の功

は遂に没す可からず。其積の作は前章八文字屋の諸三昧線及び「禁短氣」を叙する條下に一言せしが、その作の妙は最其時代にありて、其積獨立の後にあらず。是前には自作り自樂み必ずしも述作を以て業とせず、たゞ八文字屋の爲に筆を執りしに既に自世にあらず。是前には諸方の本屋の依頼に應じて修養創案に違あらず。年餘また五句をすきて湧くが如き奇思妙想漸く枯渴したらん、強めて多く作りて責を塞ぐに至れば、勢翻案摸倣に陥りて濫作多ければならむ。さきに其積が作りし淨瑠璃の語り本を八文字屋にて版行せしより八文字屋と相識りしといひしが、後に至り其積が傳奇的浮世草子を作るに多くは竹豊諸座の淨瑠璃の筋立を摸倣せり。例之ばその八文字屋と分離時代に出版せし「國性爺明朝太平記」七冊は紀の海音の「傾城國性爺」正徳三年五月興行、近松巢林子の父は唐土母は日本「國性爺合戦」正徳五年十一月興行等を藍本とし八文字屋と和睦の年に出だし、「傾城竊昭君」も亦近松の「淀鯉出世瀧徳」元祿十三年四月興行と同材にして八文字屋と和睦の後享保十一年に刊行せし「出世握虎昔物語」はその前年五月竹本座狂言竹田出雲の「出世握虎稚物語」を綴りしもの同じ

き十三年の「記録會我女黒船」は正徳五年豊竹座の狂言として戸川不麟が作りし「記録會我玉笄」を享保八年再演せしによりしが如く、越えて同十六年の「風流東大全」は寶永元年豊竹座の狂言、東大全作者未詳より、また同年の「奥州軍配」は二年前に並木宗輔等が豊竹座のためにかきし「後三年奥州軍配」より名題を探りしと争ひ難く、同十七年の「職太平記」は享保八年竹本座の竹田出雲の「太塔宮職證」を翌十八年の「鬼一法眼虎の巻」は十六年九月文耕堂の「鬼一法眼三略巻」をうつし、享保二十年の「咲分五人娘」は十二年竹田出雲が作に成りし「三莊太夫五人娘」を種子とせしと疑ひなく、同じとしの「風流西海硯」は十九年豊竹座の八月狂言にとて並木宗輔、同じき丈輔が作りし「那須與一西海硯」より題名と趣向を假りしと明白なり。其翻案摸倣に出でて千篇一律變化の妙なきはまた是非もなきとなり。况んや之よりのち筆力詞才其積よりも下れるものが此弊を踐踏するに至りては浮世草子の益下るや知る可きのみ。

斯る事情の下に其積が後半盛時の作は妙少しと雖も、なほ當時よく敬するものなく、殊に氣質ものはその創意に出でたれば、たとひ千篇一律の嫌ありとも、茲に一

二の例を擧げて享保以後の浮世草子の典型を示さむ。「國姓爺明朝太平記」は享保二年の版「鬼」法眼虎の巻は同じき十八年の版にて彼は早出是は其碩が末年の作なれどもともに有名なる院本より出てたり。「明朝太平記」の目録を見れば一の巻の「大明宴樂殿重陽の戯れ酒」より六の巻の「日本の風に移して見る姿見の女鏡」に至るまで筋といひ段落と曰ひ其文字に至るまで直ちに「國姓爺合戦」を寫し三の巻の「和澳調合親は唐人參子は和藥者」の下半は虎狩「古郷の子胤は生盛榮花の城廓」より「勇が指した盃吞込ぬ聲が心底」は樓門甘輝館の裏をあてたるもの。「虎の巻」にては四の巻の「奥女中は色盛美男は戀の菊島」則例の菊島にて知恵内虎藏の喧嘩等をかきその六の巻の「子故の闇に盗人を捕へて見れば秘藏娘」は菊島のかへしにて奥庭虎の巻傳授の場當れり。

（上巻）不審や僧正房の御影の表具おのれと頭下よりまき上れば、襖開きて鞍馬山の正風の僧正坊我儘の衣に増長慢の袈裟をかけられ、眼は日月の如く光り流りて、左右の脇より飛行の翅あらはれ、右の羽がひの脇に十四五ばかりなるはつばをいひこみ、怒れる御氣色にて現れ出て、中巻牛若に向ひのたまふは抑此三巻の巻は陣制八十一變、順逆百廿八變、千變万化の秘法悉くかきのせたる兵書にて大將たる者の學び熟せざればな

らざる秘密の書なり、日本に渡り世々大江の家に傳へて重寶し、秘して他見を許さず、然るに汝等先祖八幡太郎義家、大江中納言匡房卿に種々の心を盡し懇望ありしによつて傳授ある後匡房の長男式部大輔維順靈夢によつて三略の巻を鞍馬の多聞天の軍の内奉納ありしを鬼一法眼亦多聞天の御告に任せ奏聞して鞍馬の軍内より出し預り、今法眼が寶藏へ籠めをきぬ

牛若君には御覺候はん、先年鞍馬へ御入の時分、何卒兵法劍術の道を教へ奉らんと思へども、平家の恩が邪覺となり、我名を出しては御指南も致し難く、松杉茂りし深山の小暗きところを幸ひに、此天狗の面をかづき、此靈體にて顯はれ、僧正坊と名乗り、劍術兵法悉く教へ申せしそのときの面影御見忘はこれあるまじ、

といふに至り、三巻の巻とともに皆鶴姫を托するまで今に傳はる菊島と殆んど差異なきを見る。想ふに鬼一法眼の談は「義經記」を以て典據と爲す可き歟。彼此相對せば筆致と筋の變化時代によりて漸く移るを見る可し。次に其碩に八文字屋ものゝ上に一新生面を開きし氣質ものに就いて一言せむ。

「世間子息氣質」は所謂氣質ものゝ始にして近くは明治の文壇にも「書生氣質」を見たりき。「子息氣質」の序に曰く、

人生れて八歳より小學に入り、十又五にして大學にいたる、古の法なり、今時の子供を見るに、八歳にて烟管を咬へ、十有五にして死一倍をかつて傾城を請出す魂膽、是人たる者の道と思へり、宜なるかな、教ずして人生れながらに知るものにあらざれば、若子様ともてはやされて我儘に育ち、無性に高うとまつて、己が家業に心を寄せるは至らぬかなと賤しめ賭博色遊にかゝつて放埒に身を持つを銀持の風俗はかくこそと思ひ込んで自ら非を改むる心はなくて、分際不相應の遊びに、親の譲り銀を皆になし、昨日までは大臣と呼し男、今日は太鼓の鉦立坊となつて、老て辛勞する人あまたなり、是皆幼少より父子の禮儀たがひ、親は子に孝行をつくし、身の脂を出して設けてあてがひ、子は親を不粹なりと見くだし、今あの堅さでは世間はつとまりませぬ、随分異見致せど、誰に似てか片意地て直されぬに困ると、彼方此方に異つたる世間の子息氣質さま々なるをかき集めて、すぐに題號として梓に彫り、孝にすむる一助ならんかし、

其略目を列挙すれば

- 卷の一 一、木賊賢は心を磨く正直な百姓形氣
- 二、勘當は請大刀親の家を頼走る侍形氣
- 三、取付世帯は表向を張てゐる太鼓形氣
- 卷の二 一、異見はきかぬ藥心を直さぬ醫者形氣
- 二、内証は知らぬが佛有難ひ出家形氣
- 三、大力は身の疵、身代なげた相摸取形氣

- 卷の三 一、世間の人に鼻毛を讀まるゝ歌人形氣
 - 二、正直な親父を一呑にする上戸形氣
 - 三、勘當は世帯藥効き過た始末形氣
- 以下省略

また『世間娘氣質』は毎巻の巻端に『子息氣質追加』と題し、

- 卷の一 一、男を尻に敷金の威光娘
 - 二、世間にかくれのない寛潤な驕娘
 - 三、百の錢よみ兼たる歌好の娘
 - 卷の二 一、世帯持ても錢銀より命を惜まぬ侍の娘
 - 二、小袖單筋引出して言はれぬ悪性娘
 - 三、哀なる淨瑠璃に節のない材木屋の娘
 - 一、格氣は鋭い心の劍白齒の娘
 - 卷の三 一、不器量て身を齧く抹香屋の娘
 - 二、物好の染小袖心の花は咲分た兄弟の娘
- 以下省略

などの目を並べたり。『親父氣質』『手代氣質』また千篇一律の筆法、細説するを須ひざるなり。されば『翁草』に其積を以て近松巢林子に對比して、

八文字屋自笑が浮世草子の編者に江島其磧といへるあり、よく世の情をのぶ筆勢おさ
い、近松に並ぶ所謂曲三味線、色三味線、契情禁短氣はたもろくの容氣類などは今の
世の人も之を驚ぶ、されども浮瑠璃をかくとならず、近松は又双紙を作るを得ず、其差別
をいかにといふに、其磧が作文にては人形の働き薄く、近松草紙を綴れば文勢過きて人
情くはしからず、己々が得たるどころ古今同ト

といはれたる、其磧も亦譽ありとす可し。其磧の末路は詳ならねども、『其磧置土産』
の序に『堅固なる筆の七十年はたつものとしのみな月比に此世を去りぬ』とあるによ
りて、世に元文元年六月歿、享年七十として傳へたるのみ。

其磧の歿せし元文元年には自笑は尙世に在りと雖も、齡既に七十餘歳また往年
の銳氣なく、子其笑と連名にて浮世草子を出したり。然れども後に其碩に代りて
八文字屋の爲に筆を浮世草子にとりしは、多田南嶺な
り。南嶺は博學強識なる國學古典界の大家なれども
天資豪宕不羈にして常規を脱し、奇才に任せて人を欺
きしかば、えせ學者として學界の士に指彈されしが、こ
の時年齒三十九縦横の奇才を用ひて八文字屋の作に

従へり。たゞ當物の自笑の如く、南嶺も名を署せざれ
ば其碩の歿後は八文字屋本悉くその手になりや、將た
何れの草子を著はし、やは不明なれども、之よりのち
自笑歿して南嶺の世を辭するまで十餘年間の草子中
にはその手になりしもの少からざるを知る。いま其
間に八文字屋より出てし浮世草紙の著きものを數ふ
れば左の數部あり。天文四年に『武遊双紙巴』出て、作者
自笑と署すれども南嶺の作と傳ふ。恰も東都の作者

市場通笑の生れて俗文學東移の緒漸く解けんとするの年、俳界には乙由の歿年に
當れり。この翌年四月豊竹座に『本田善光日本鑑』の興行ありて、作者は爲永太郎兵
衛なりしが、翌元文六年に八文字屋の浮世草子には『善光倭丹前』あり。また院本よ
り轉作の一例たり。而して自笑は齡既に八旬に及んとすれば此草子よりは其子
其笑と作者連署となりて、以て其歿去に及べり。次で紀海音(貞峨)の歿せし寛保二
年には『女非人綴錦』出づ、また元文元年の『敵討鑑樓錦』によれり。翌三年には『鎌倉諸

の軍學を京師に指南し、また
半時雅淡々と交りて俳諧に
遊ぶ、又桂左衛門武起と稱し、
秋齋と號せしとあり。著述
は『秋齋閑語』、『すなわ草紙』、『則
南嶺遺稿』、『南嶺子』、『職原開
書』、『遊和草』、『神明憑談』、『宮川
日記』、『故實秘要』、『鳥追歌註』
その行状は其甥雅の『諸草』に
詳なり。その傳によれば俳
優七部の書の『耳塵集』も南
嶺の編輯なりといへり。

藝袖日記』出て、延享二年に『今昔出世扇』出て、同三年に『勸進能舞台櫻』同四年に『自笑樂日記』五巻を出だせり。

『善光倭丹前』より此『樂日記』に至るまでの數部署名の作

ラ。此年東都に唐衣桶洲生れ、延享元年には戀川春町生る。此年十月の末菊岡沾涼歿す。其著、江戸砂子、最も著はる。

者はみな自笑其笑の連署なりしが、此年次で出せせる『彩色歌相摸』よりは、其笑瑞笑の連署にて、また自笑の名無し。『樂日記』は恰も其積の『置土産』と似て、自笑が最後の草子にて、その尾末に『總て若きよりかき草紙を六十部、目録としぬれど聊は漏れ侍りぬ、只末ながく子孫の御最負を松かしはの常盤の色ぞ久しき千秋樂』とかき納めたり。その五巻の目録に見ゆる六十部の草子といへるは、『白狐玉』、『七代長者』、『扇軍』、『内證鏡』、『蛇行脚』、『大島台』、『裾野櫻』、『やつし雛形』、『蝦夷噺』、『色仕組』、『身持扇』、『一睡記』、『手管の漣』、『友三味線』、『昔色扱』、『玉子酒』、『出世握虎昔物語』、『綴錦』、『無間鐘』、『妻戀笛』、『長者右衛門が一代記』、『女筆始』、『世帯藥』、『情の鶴』、『連理玉椿』、『燈櫻』、『高名松』、『二面鏡』、『會稽山』、『兄弟鏡』、『燒蛤』、『壽門松』、『軍配團扇』、『俵系圖』、『廓の錦』、『伽平家』、『東大全』、『常盤染』、『東海硯』、『七人化粧』、『双紙巴』、『野傾せんや』、『歌三味線』、『盛衰記』、『袖日記』、『三津扇』、『二女さくら』、『伊勢風流』、『出世扇』、『色ふた子』、『西海硯』、『國歌舞伎』、『

『舞台櫻』、『逆澤湯』、『傾城始』、『噺太平記』、『女舞鶴』、『住江高砂對の盃』、『節分掃』なり。

此六十部中、『白狐玉』は則『晴明白狐玉』五冊、『裾野櫻』は『富士淺間裾野櫻』五冊、『玉子酒』は『傾城玉子酒』五冊、『色仕組』は『役者色仕組』享保五年版五冊、『女筆始』は『愛護若女筆始』五冊、『高名松』は『當流會我高名松』五冊、『兄弟鏡』は『女會我兄弟鑑』五冊、『燒蛤』は『野澤名物燒蛤』五冊の略稱にして、『無間鐘』は天文四年版、『丹波餘作無間鐘』五冊にして前年の院本より出て、『俵系圖』の享保十六年豊竹座の『藤原秀卿俵系圖』、『傾城始』の享保五年の『日本傾城始』、『女舞鶴』の元文元年の『和田合戦女舞鶴』より出てたるは其積以來院本改作の常套なり。此外右六十部の目中既に説けるものは曰はず。六十部に漏れたる目は何々にや明ならねど享保十八年豊竹座の『吉野忠信』より翻作せる『互光恭盤忠信』、『元文元年竹本座の狂言をとりたる』、『赤松同心縁陣幕』等の若干部と、『禁短氣』等の若干部を指すなる可し。此等は其積歿後といふにあらず、八文字屋前後草子を總括せるにて、なほ『樂日記』の末に、佛原の狂言に寄せて、『禁短氣』の後編をかき、『花月論』と題して殘せしといふをも加へて、自笑其積其笑等が名の下に公になりし八文字屋草子の概目を知る可きなり。然れども此に一言す可きは自笑

が歿去なり。「樂日記」は延享四年正月の新版なること前述の如く、八文字自笑の名ありて、序に「僕わかゝりしより狂言綺語を草紙にあやなせる事數十部、九十歳にちかき長壽筆とるともいたづき多くは其笑に物ずきして書せしに、今是を書納めと思ひふるへる筆にまかせ」といひ、編末に「其笑は子なり、瑞笑は孫なり、向後の作意かれ等に命せぬれば常盤の松のいろかはらず、緑の竹の久しき久しき恵を仰ぐ」といひて「霜枯はさもあれ龜の長齡草」と辭世に似たる結尾の句あり。一見すれば自笑は此年に物故せしが如きも、實は既に二年前延享二年十一月に歿し、「樂日記」の世に出でしときは、二條寺町本覺寺中に永眠せるなり。されど「樂日記」は其筆納として、の作意なれば歿後年餘を経て出版せしもなほ自笑の名にて出せしと、同年版の「歌相模」は所謂子たり、孫たる其笑、瑞笑の連署と改まれるにて知るべし。「歌相模」の後、延享五年則寛延元年に「盛久側柏葉」、二年に「花楓劔本地」、「義貞艶軍配」同じき三年に「教訓和儘育」、何れも其笑、瑞笑の連名にて世に出でしが、此年九月十二日多田南嶺は五十三歳を一期として世を辭したり。南嶺が井。並木宗輔また此寛延三

ウ。曲亭馬琴の「飄漫録」に出づ。自笑四代の孫に聞くと、ころなれば確憑と爲す可く、諸家みな之に定めたり。

作として知られしは「武遊双級巴」「袖日記」等にしてその遺作たる「世間母親容質」は歿後二年に世に出でたれども上に述べ來りし其碩の歿後此に至る八文字屋草子中なほ幾多の南嶺の手に成りしものありと信せざる可からず。

年に歿し、古賀精里は此年に生れたり。

享保に江島屋、八文字屋の和睦成りて其碩が多作世を驚かし、浮世草子の内容變化して濫作多く、盛衰の境を此間に分ち、元文に其碩歿し、延享に自笑去り、今また南嶺の世を辭するありて、寶曆、明和より浮世草子の運命は八文字屋の命數と稍衰殘の傾あり。南嶺歿後の諸作を一括すれば、その翌寛延四年改寶曆元年に「優源平歌囊」五冊、「道成寺」岐柳「五冊」同じき三年に「歲徳五葉松」五冊、「檀の浦女見臺」五冊、翌くる四年に一瓢軒の「赤染右衛門綾鞆」五冊、同じき五年に「地獄樂日記」、六年に「中將姫誓糸遊」、越えて同じき八年には李秀、自笑合作の「陽炎日高川」、十年には「今昔九重櫻」、十一年には白露、自笑の合作「歌行脚懷硯」、十二年には自笑の「柿本人麻呂誕生記」、十三年には其樂齋の「風流菊水卷」等なり。寶曆に自笑といふは其笑の改名にして、のち瑞笑も、其子の八左衛門も自笑の名を襲ひ、李秀、素玉、白露等の作者あれども、みな祖先の餘徳

により古人の糟粕を嘗めて僅に一時を糊塗するに過ぎず。『塵塚談』に『京都八文字屋浮世双紙五冊、役者評判記のこと、自笑其積といふもの述作して、毎年正月二日定式にて大傳馬町鱗形屋孫兵衛といふ繪草紙問屋賣出せり(中略)延享寛延のころは兩書とも皆人待兼見ることにてありしが、五冊ものは寶曆の末より絶て梓行莫し』といへり。寶曆より後浮世草子の梓行なきにはあらねど此文を以て江戸に觀水堂丈阿等の草雙紙盛んに後期俗文學の先途を開くに反して、京攝浮世草子の既に衰へてまた江武に行はれざりしを視る可し。

京攝浮世草子の末路たる明和安永に最數多きは其積が餘瀝を嘗むる氣質ものなり。既に其積の條下に云ひし如く、氣質の題筈を以て此類を枚舉すれば、古く西鶴の傑作『好色五人女』の一名『當世女容氣』に始まり、其積の作に『世間息子氣質』『世間娘容氣』『世間手代氣質』『浮世親仁氣質』『寛濶役者氣質』『諸商人世帯氣質』等數部あり、また『和漢遊女容氣』あり、一洞の『寛濶大盡氣質』あり。然る後其積に代りて八文字屋の立作者と爲りし南嶺が遺著に、其積が『親仁容氣』に對せる『世間母親容氣』五冊ありて、著者の歿後、寶曆二年の春世に出で、夫より二年のち其笑、瑞笑合作の『世間長者氣質』

出でしが、此等は寶曆年間のものとして東武にも行はれたればにや、同じ寶曆四年の秋、江戸の作者升瓢が『世間御旗本容氣』五冊世に出でたり。之を以て八文字屋浮世草子の寶曆に到るまでは江戸に行はれしと、寶曆、明和の頃より俗文學の氣運漸く東武に動き始めしとを察するに足らむ。然るに明和より安永に及びて浮世草子は最も氣質ものを多しと爲せども、また東武に及ばざると實に『塵塚談』のいふところの如かりけむ。寶曆の末に山東京傳、並木五瓶生れ、明和の始に十返舎一九、曲亭馬琴相次て關東に出で、風來山人は明和二年を以て戯作『根なし草』を公にせり。洵に東西盛衰の轉振期近く目睫の間に迫るの感なくばあらず。然るに文壇の奇兒上田秋成が和譯太郎の戯號を以て『諸道聽耳世間猿』『世間妾氣質』を著はしたるは、明和三年にして、實に東都の奇人風來山人『根なし草』成りし翌年なり。斯くて明和五年には無跡散人の『世間學者氣質』同じき六年には自笑の『略縁起出家氣質』ありて世に出で、翌くる七年には多田南嶺に代りて八文字屋の爲に筆を執りしと聞く、永井堂龜友の作『風流茶人氣質』及び『當世銀持氣質』の二部あり。明和八年に版行せられし『當世傾城氣質』は増舎大梁の著にして、『世間化物氣質』も大梁と半井金陵とが合

著なり。是よりのち永井堂龜友が名を著せる氣質ものは、明和十年に『世間姑氣質』
 同じ年なる安永二年に『小兒養育氣質』翌くる安永三年
 には『世間旦那氣質』『笑談醫者氣質』の二部安永五年には
 『世間仲人氣質』あり、外にも『大和言葉風俗俳人氣質』『赤
 烏帽子都氣質』等の諸作あり。龜友はまた兵作堂と號
 すれども其傳詳ならず、以上幾多の氣質もの、外には、明和八年版『風流酒吸廳』安永
 六年版『立身銀野蔓卷』各五冊などありて、多作の人と謂ふ可し。『世間侍婢氣質』の作
 者蛙文盛は如何なる人なるを知らねど、其序に龜友の名見ゆれば、また此間の作者
 なる可し。安永六年に半井金陵の『當世芝居氣質』同じき十年、作者未詳の『當世宗匠
 氣質』此外『夫婦氣質』『當世貞女氣質』『和國小姓氣質』『諸國武道容氣』等はみな此一類
 に屬するもの、之を總括するに普通見聞の及ぶところのみを以てするも氣質もの
 の草子は三十餘種の多きを數へつ可し。若し更に下りて江戸の俗文學に及び、三
 馬の『歌舞伎樂屋通俳優家最負氣質』京山の『當世男女之鏡教草女房氣質』等を數へ、終
 に今の博士春のや氏の『書生氣質』の當年に及ばず、或は四十部に及ぶ可き歟。假令

○。明和は十年なし、九年十
 一月廿五日改元して安永元
 年と爲る、故に明和十年とい
 ふは其翌年即安永二年とい
 となれども、正月の新版なれ
 ば前年冬改元以前の脱稿影
 刻にて明和十年とせしもの
 と知らる。

安永の末氣質もの以外なほ『銀野蔓卷』『月華通鑑』の類ありとも氣質もの、俗文學界
 に一大系をひけるを見よ。

然れども氣質もの、一大叢書を爲せるにも關せず、浮世草子の昌運は既に盡き
 たり。天下の大勢滔々として東し儒經の學士、國學の徒相率ゐて東武を文飾し、江
 都の豊富殷昌また京師儉薄の及び難きに至りては、俗文學も自其流潮に抗し難し。
 強弩の末は魯縞をだも穿たず、天和以來茲に一百年の星霜は社會の大勢を移すに
 餘あり。數十年來浮世草子を代表せし八文字屋の没落は京攝俗文學の衰運に伴
 へるはまた必須の趨勢のみ。而してよく此に殿たるものは上田秋成が華文の妙
 を推さんかな。

上田秋成は享保十七年の出生なれば『諸藝聽耳世間猿』『世間妾氣質』の世に出て
 し明和三年には年三十又五なり。秋成は通稱東作、號は餘齋、休西、無鴈、鶉居、剪枝、畸
 人、和譯太郎等の諸號を用う。浪華の娼家に生れて父
 を知らず、幼にして母を失ひ、數奇にして京都に落魄し、
 國學茶道に深かりしとは世に著るきも、其傳は殆んど捕捉し難き奇生涯なりき。

○。其父は生田傳八郎なり
 とは『言狂作書』の脱なれど、信
 憑し難し。

蓋し此人を以て八文字屋一派の浮世草子作者に比肩せんはもとより不倫なる可けれど、『世間猿』『妾氣質』は實に浮世草子の一類たるを以て、勢其上に及はざるを得ず。若し翻つて之を曰はば、寛延の頃近路行者の『繁々夜話』五冊、『英草紙』五冊は和漢雅俗の文調を折衷して、後來江戸に隆起する讀本小説の濫觴を爲し、安永の始、建部涼僂が『西山物語』三冊、『吉野物語』一名『本朝水滸傳』十冊に至りて讀本漸く起りしが、秋成が有名の著『雨月物語』また此と相類し、京傳、馬琴が藍本のひと爲りけり。近路行者は都賀六藏名は庭鐘、字は公聲、大江漁夫の號ありて、また浪華の産。若し奎運なほ關西を去らずば之につぐに秋成を以てすれば、後の讀本小説の江戸に起るを待たずして、京攝の俗文學なほ見るに足る一新生面を開く可きに、一轉の新機軸を出しなから、徒らに浮世草子の殿後と爲りしは關西文壇の爲に惜しまざるを得ず。然れども前を承けて一新し、後を開くもの此二人ありて、天和以後一百年の京攝の草子の歴史を結ぶを得んかな。蓋し俳句二萬三千句、豪放なる西鶴が俗氣紛々たる天和の社會を描きて世間意慾の驕奢放肆を表する『好色一代男』に始まりし者を、茲に隠士秋成が奇骨凌々世と容れず、明和安永儉薄の世に落魄して哀怨の調多き『雨月

物語』に結ぶ、また對比照應の奇なしとせむや。若し内容の性質を以てすれば、『雨月物語』の如きは『英雙紙』と與に讀本の條に置きて其來歴を示す可きものなれども、此にその一二節を引くは關西文運の轉局を示し、地氣文運推移の楔子と爲すのみ。『雨月物語』中最優秀なるは、西行の『撰集抄』の一段を材と爲せし、『白峯』の一條なる可く、後世馬琴の『月張月』の一節之によりたるあり。然れどもこゝには鬼氣腥慘たる『吉備津の釜』の條を引かむ。材は彼牡丹燈に似て女鬼の爲に男の災に遭ふとをかけるにて、その末節左の如し。

朱符を門に貼し窓に貼して重き物齋にこもりける。其夜三更の比、恐るしき聲して、あなにくや、こゝに尊き符文を設けつるよとつぶやきて、再び聲なし。恐るしきのあまりに長き夜をかこつ。程なく夜あけぬるにいき出でて、急ぎ彦六が方の壁をたゞきてよへのことをかたる。彦六もはじめて陰陽師が圖を奇なりとして、おのれも其夜はいれずして、三更のころをまちくれける。松ふく風物を儼すが如く、雨さへふりてたゞならぬ夜のさまに、壁を隔て、聲をかけあひ、既に四更に至る。下屋の窓の紙にさと赤き光さして、あなにくや、こゝにもほりつるよといふ聲、深き夜にはいと凄まじく、聲も生毛も悉くそばだちて、暫く死入りたり。明れば夜のさまをかたり、暮ればあくるをまたひて、此月日頃千歳をすぐるよりも久し。かの鬼も夜ごとに家を繞り、或は屋の棟に叫び

て恐れる聲夜ましにすままし。かくして四十二日といふその夜にいたりぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊につしみて、やゝ五更の天もしら／＼とあけわたりにぬ。長き夢のさめたるとく、やがて彦六をよぶに、壁によりていかにと答ふ。重き物いみも既に満ちぬ、絶てこのかみの面を見ず、なつかしさに、かつ此月ごろのうさおそるしさを心のかぎりいひなぐさまん、眠さましたまへ、我も外の方にいふ。彦六用意なき男なれば、今は何かあらん、いざこなたへわたりたまへと、戸を明ると半ならず。隣の軒にあなやと叫ぶ聲耳を貫きて、思はず尻居に座す。こは正太郎が身の上にてこそと、斧ひきさげて大路に出づれば、明たるといひし夜は未くらく、月はなかな空ながらかけ隠／＼として、風冷やかに、さて正太郎が月はあけはなして、其人は見えず。内にやにげいりつらんと走り入り見れども、いづくにかくる可き住居にもあられば、大路にや倒れげんと求むれども、其わたりには物もなし。如何になりつるやと、あるはあやしみ、あるは恐る／＼、灯し火を挑げて此處彼處を見廻るに、明たる戸脇の壁に生々しき血溜ぎ流れて地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば軒のつまに物あり、ともし火を挑げて、てらし見るに、男の髪の髻ばかりかりかりて外には露ばかりのものもなし。云々。

鬼氣人に迫るを見る可し。然れども此に此種讀本の系緒を解くものを詳説するの要なし。楓葉散りて蘆橋開く。後期江戸の俗文學は既に始まり來れるなり。茲に驪りて八文字屋が末路を一言して此章を結ばむ。

八文字屋の末路は曲亭の『羈旅漫餘』に出てたれども、烏有山人子虚子が傳ふるところ、更に詳細なり。曰く。『自笑が曾孫八左衛門に至りては其才遙に父祖に及ばず、自笑と號して漸く評判記を出すのみなりしに、寛政初年の京都大火に類焼して家も大に衰へ、遂に大坂に下りて心齋橋筋安堂寺町にかすかに渡世して評判記を出し居しか、夫さへその身歿してのちは、其子何かしなるもの、放蕩無類の破落戸にて、産を破り家を失ひ、中々評判記つゝることも出来ざりしに、四代目自笑が家に子かひよりめしつかひし卯作といふ者、記憶よくして評判記の綴り方を覺へ、自笑が悴の家を破りしのうち、御靈前瓦町に住して、和泉屋卯作と稱し、梅枝軒伯鷲と號して新古の芝居、繪本番附類買買を家業とし、折節には淨瑠璃の作をもなしたれども、芝居の典故に詳しきにつき、専ら評判記を出せしかども、己一人の名を出さず、亡師の八文字屋自笑の名を記して己と合作の如く記せり。天保九十の年病て歿す。享年五十餘歳』と。

第三 後期

第二章の 一 草雙紙、小本

東武の文運は京攝の移植なることは上來しばく説きたり。されば上方に於て寛文前後の假名草子漸く迹を收めて天和貞享元祿より西鶴の浮世草子一世を風靡し下りて正徳享保に及び八文字屋本の盛世に及びしころ江戸の下行文學は未だ見るに足る可き莫し。江戸の下行文學の淵源に溯りて古きを探れば丹波少掾平正信が金平本あり。承應萬治の頃より東派の淨瑠璃稍起り江戸肥前掾櫻井丹波少掾土佐石見掾等輩出せしがその中に就きて丹波は薩摩淨雲が門下の四天王の一人にて始は和泉太夫といひのち丹波少掾と爲りかの藍より出でて藍より青き譬諭の如く淨雲の剛快を受けて更に淨雲より剛快なる一派の樂風を起して當時なほ剛快殺伐なる東方偏武の社會意慾に投合したる者なり。而して此等の淨瑠璃行はるゝや之を繪入の正本として世に行ふに至りしかば最樂界に有力なりし丹波少掾が正本の最有名なりしは理の明なるところなり。丹波が剛快なる

淨瑠璃樂の主人公は坂田金時の一子にして到るところに鬼神を取ひしぎ大敵を塵殺し百人斬地獄廻などをして勇武比類なき超人間的猛者坂田金平にして『毎日岩をたゝきわる』丹波が剛快なる熱狂を以て之を語り
1。良佐が代々藍の附合の句に「親丹波毎日岩をたゝきわり」といふあり。
 草入、金平牛蒡など後の世迄も唱へらるゝほどなれば其樂章たる『金平法問論』『金平黒熊』『金平天狗問答』『金平千人斬』『金平最後』『金平化粧問答』『金平大酒論』などを繪入にせし小冊の盛んに行はれしや知る可し。稱して和泉太夫の金平本と唱ふるもの是なり。されど東派前期の斯樂が西派上方の淨瑠璃殊に義太夫節の如き長足の進歩を爲さずして已みしによりさしもの金平本もその作者岡清兵衛の歿去とともに廢れゆけり。金平本はもと淨瑠璃の樂章
2。岡清兵衛、名は正俊、金平本の外に「鎌倉結城管領合戦」などの作あり、貞享三年歿去。
 なれば彼東に於ける江戸節以下の諸種の樂章、西に於ける竹豊兩座の諸樂章院本と並せ叙す可きものにして此にいふ可きにあらずれども其書概して小形繪入の假名本にして、体裁よりいへば江戸小冊子の魁首、後世草雙紙の淵源ともいふ可ければ、假に此章に冠冒するのみ。

金平本の末路たる貞享元祿頃より、樂章ならぬ草雙紙漸く世に出てたり。蓋し草雙紙は本來臭草子といふ可きにて、其故は始此等の小冊子は淺草紙の還魂紙の白く薄手なるを二つ切にして灰墨にて印刷せし能惡の製なりしかば、その紙にもその墨にも一種異様の臭氣ありて、俗に臭草子の名は生じたるなり。さればその内容によりての稱呼ならず、製本上の名目なれば、内容の樂章たると御伽話たると小話滑稽談なるとに論なく、苟も此種の製本は臭草子にして、金平本といへども、其舛裁よりいへば亦其一なりき。後世書肆の臭字を忌みて草雙紙と改めしが、名や先ちし實や後れし、小冊其ものにも實に臭草子時代の臭氣は絶えて立派なる草雙紙とはなりぬれば、全く臭草子といひ得可からず。されどそは後のことなるを忘る可からず。貞享天祿ころより行はれそめし草雙紙の外形は紗綾形もしくば毘沙門龜甲形なる行成標紙にて、その内容は種々の繪卷ものを小く印刷したるものなりしが、漸く標紙を丹色にして一面に標題を記したるものとなりてより、世人は之れを赤本ととなへ、後世にいたるまで赤本の名を残したり。是亦草雙紙のごとく製本によりて名けし名目なり。されど移れば變はる流行の赤本も變化を免が

れて、黒き標紙に青または赤色の外題箋を貼りたるもの出て、一卷の價五文を過ぎりしといふ。すなはち黒本といへり。斯くて江戸は斯る見處に等しき草雙紙の變化を見る間に、京攝には早くも八文字屋の盛世は享保元文に過ぎ、延享に入りて衰運に向ひしが、機運一轉、下行文學東移の勢は漸く此間より動き始めたり。見よ、享保二十年には明誠堂喜三二生れ、元文四年には市場通笑、翌五年には、朱樂菅江、其翌寛保元年には栗枝亭鬼卯同じき三年には唐衣橋州、翌延享元年には戀川春町、同じき三年には梅暮里谷峨、萬唐丸等陸續生れ出て、將に來らんとする東方平民文學の氣運漸く熟せんとす。此頃享保の末通り旅籠町の地本屋鱗形屋にて盛に草雙紙を出だし、延享に至り、黄標紙本年を逐ひて行はれ、一巻の紙數は五枚にて、上下全二冊にて價十二文、三冊ものは十八文、次で寶曆に入りては萌黃の標紙に鳥居風の繪をかきたる青本出て、黒本もなほ行はれ、文溪堂、米山耕雪亭、桂子、鳥居

3. 朱樂菅江、唐衣橋州等は狂歌の方戯作より主なれどもまた戯作なきにあらざり。菅江は江戸市ヶ谷廿四町に住せし御先手興力にて山崎彌之介景賢といふもの、俳名を貫立といひしを人みな貫公と稱し、呼びしより改めて菅江といひ、橋州は小石川御軍司町に寓せし田安家の臣小島源之助名を泰恭といふ者、これは享和二年に歿し、彼は寛政十二年に逝けり。栗枝亭は姓を大須賀、名を知白といひ、遠州日坂の人なれども、系統上東武の作家に列す可し。文政六年歿。

清經等その作者たり。當時最著名なる草雙紙の作者
 觀水堂丈阿の著に始めて名の下に戯作と署せしかば
 後の作者皆之に倣ひ、また丈阿の青本の標題をはじめ
 て紅刷にせしかば後の作者またみなこれに倣ひ、獨鱗
 形屋の草雙紙ばかりは古風を墨守して流行に趨らざりしも、安承の中ごろに及び
 て遂にはまた紅刷と爲り、鳥井風の繪も一變して當世の錦繪風となるに至れり。
 のち文化の始に及びて戯作の戯の字は削除され、單に何某作とするすやうになり
 しもなほのちにいたるまで戯作もしくは戯作者の名は存せり。丈阿が一時草雙
 紙界を風靡せしこと知る可し。惜いかな、其の人につきて殆んど傳ふるところを
 知らざること。安永の中ごろには黒本稍衰へしが、その六年に明誠堂喜三二の作
 『新板桃太郎』といふ草雙紙一冊丁數五枚にて藍染標紙を紫絲にて袋入りなりしが
 之を袋入雙紙の始にて、同じ喜三二が名作『文武二道萬石通』の出てし天明の末より
 藍榻標紙は茶色とかはり、内容の趣向は教訓ものと爲る。安永年間より寛政の始
 まてに數多の草雙紙を出せし市場通笑は専ら教訓の趣向をたてしを以て、人の爲

5。文溪堂は米山郡我がこ
 となり。

6。耕雪亭桂子は江戸の人。

7。鳥居清經は鳥居繪の開
 祖一世清信の門人なり。

に教訓の通笑と呼ばれたり。享和の末、楚滿人の敵討本大に行はれしかば、文化の
 始に及び草雙紙もすべて敵討本と爲り、文化三年に式亭三馬の『雷太郎強惡物語』十
 冊出づるに至り、世上の草雙紙は悉く合巻と爲れり、合巻とは五丁一冊の草紙を三
 卷宛一卷にまとめて世に出すをいふなり。後來錦繪の如き美麗なる臭草子なら
 ぬ草雙紙はみな此合巻時代のものなれば、草雙紙の變遷は畧上に盡きたりと謂ふ
 可きなり。
 合巻前の草雙紙は片々たる小冊、未だ文學と稱し得可きほどのものならず、且之
 を詳叙するの間に有せざれば、こゝに當時の戯作六家撰と稱せられしものにつ
 て略言して已まむ。
 天明の頃、喜三二、春町、全交、萬象亭、三和、通笑を戯作六家撰といへり。明誠堂喜三
 二は羽州秋田の藩士にて、下谷三味線堀の邸内に住し、狂歌に手柄岡持、狂詩に韓張
 齡、俳諧には月成の名至るところに傳唱せられしが、本名は平澤平格、諱は常富とい
 ふもの、その最傑作として世に迎へられし草雙紙は上にいへる『文武二道萬石通』に
 て、之に次ぎて名高きは『鐘入七人化粧』、『案内手本通人藏』の類なり。

質勝文野暮也、文勝質高慢也、文質元結人品として、月願育き君子國、五穀の名に挽接の御
剛去らずの重忠が、智恵の斗辨に計られし大小名の不知の山、三國一斗一升の耻を晒し
七湯の垢とけて流れて三島にあらぬ大磯の化粧の水にしらげすませし文武二道萬石
通云々

と序文にあるが如く、重忠が頼朝の命をうけて鎌倉の大小名の文武何れにかかた
むくもの、乃至は文でもなく武でもなきぬらくら武士を見わけるとを洒落てをか
しくかきなしたるもの、此「米搗の千石通から存むつきて御座ります」といふ「萬石通」
の筋道なり。

寛政元年に四十六歳にて歿したる倉橋壽平といふ小島侯の臣は、逆算すれば延
享元年の出生なり。小石川の春日町に住みたれば、やがて號して戀川春町とはい
ひけり。春町の名は安永四年「金々先生榮花の夢」の作によりて高く、此より青本の
趣向一變せりと稱せられ、翌春引つゝきて「高慢齋行脚日記」を出して名聲ますく
揚りたりしが、實に春町三十三歳の事なり。片田舎の貧しき男にて金村屋金兵
衛といふもの貨殖して浮世の樂を盡くさんと思ひ立ちて、江戸へ奉公に出づる途、
目黒の不動に參詣し、粟餅屋に休憩し、その餅の出来るを待つうち、まどろみて、粟

富と爲る榮華の夢を見、さめてののち、人間一生の樂もわづかに粟餅一臼の内の如
しと悟りて、江戸へはゆかて田舎へひきかへすと、いふ盧生が夢の翻案、則「金々先生
榮華の夢」なり。此外、あふむ返文武二道「花鳥かくれん坊」「鼻峯高慢男」「三幅對紫會
我」「くすのきむたいき」等春町の作にして名あるもの甚多し。

芝全交は江戸赤羽親世の能樂の狂言師山本藤十郎が戲號にて、その作「適一聲女
暫」「烟鏡蕎麥屋の薪」「南無大通佛開帳」「合羽大佛縁起」御手料理大悲千餘本」等時好
に投じたる佳作少からず、寛政年間に及び草雙紙の作——8。春町は寛政元年に歿し
たれども、なほ五人は存せり
者雲の如く輩出せしも、後に讀本の大家と爲りし山東京傳が妙筆と相顔顔して下
らざりしは、獨り全交一人なりきといふを以て、其時評の噴々たりしを推斷す可し。
その作たとへば「大悲千餘本」といふは、千手觀音不景氣にて千の御手を貸貸すると
いふ可笑し味なり。その他推して知る可きなり。

萬象亭とは森羅亭萬象がとにて、桂川中良が戲號なり。中良學和漢に涉り、且蘭
學に兼通し、刀圭の餘暇俗文學界に遊び、天明年間喜三、三和等と多く草雙紙を著
はし、竹杖爲輕といひては狂歌を作り、源平藤橘の號を以ては淨瑠璃曲を作る。蓋

しその師平賀鳩溪の才を嗣ぎしものにて、文學また師風あり、森羅亭の號も鳩溪の譲りしところなり。草雙紙にては春町の『補無題記』になりひし『夫従以來記』最名あり。文化五年五十五歳にて歿したれば寶曆四年の生にて、春町よりは十歳弟喜三二よりは十九歳若し。

唐來三和は加藤某といふ武家なりしが落魄して萬重の義弟と爲り、本所松井町の菰樓和泉屋に入婿と爲り、源藏といふ。其作文の巧妙なるなきも趣向の佳なるを以て多く行はれ、天明九年に世に公にせし『天下一面鏡の梅鉢』といへる黄標紙は洛陽の紙價を狂はせしといへば所謂天下一面評判なりしならむ歟。

市場通笑則教訓の通笑は横山町の骨董商市場小平次にて安永八年はじめて『酒の癖正直咄』を發兌してより寛政の始までに『大道人穴探』『御物好茶白藝』『芝居好目くら仙人めあき仙人』等數十種の作あり。

此外後に讀本の泰斗となりし山東京傳の如き、曲亭馬琴の如き、滑稽本の作者式亭三馬、十返舎一九の如き、何れもその初此草雙紙に筆を著けざるはなし。蓋し草雙紙のものたる簡單にして處女作者にも容易に筆を下し得可きを以て、また當時

流行の盛なる未名を爲さる徒をして容易にその名を江湖に喧傳し得可きを以て、また當時讀本大冊のもの未多く行はれざりしを以て、事此に出でたるにて、則草雙紙の直系は合巻の草雙紙と爲りて柳亭種彦が成名の下に歸せしも、江戸後期の諸大家は殆んどその文壇馳騁の初鞭を此點より着けざるはなく、傍系は諸種の下行文學と連りしや論なし。京傳は馬琴の先輩として讀本界の北斗たりしも、其一面にありては實に草雙紙則黄標紙小本則菟蓐本の作家として名あるものたりしを以て、其間の繫絡を知る可きなり。京傳が『心學早染草』に善玉悪玉といふとを用ひてよりのちに善玉悪玉といふ詞久しく行はれ、『江戸生艶氣樺燒』よりやけ男をその主人公の名艶次郎とよぶと始まり、後に春水の『梅曆』によれる艶郎丹次郎の名とともに俗間に残り、また此艶次郎に書きし獅子鼻より低き鼻を京傳鼻といひしかば、京傳の鼻は爲に高くなりしとを想見するに餘あり。六佳撰の一人三和は京傳を評して『京傳は草子繪組とよく機を取ることに妙を得たり、されは草雙紙は更なり、讀本と雖もまづ挿繪より腹稿して後文章に及ふといへり、(中略)草雙紙には第一の作者と稱せらるゝと論なし』といへり。天明の始り。太田蜀山人。

四方赤良の『繪雙紙評判記岡目八目』にも京傳の『御存商賣物』を以て總卷軸上々吉とまで稱揚したり。但し此ころ草雙紙の盛に行はれしは斯る評判の出るにても知る可く、馬琴の記せしとして疑なき『伊波傳毛の記』にも『所々の小賣店より板元萬屋へつめかけ朝より夕まで恰も市のごとし、製本に暇なければ、摺本の濡れたるまゝ、表紙と糸を添へてうり渡したりたゞ小賣店のみにあらず、其春三月の末まで町々をよびて賣りあるきしなり、其頃流行の様想ひやる可し』といへり。なほ合卷草雙紙のことは他の章に述べ可ければ此にはいはず、他の小冊子なる小本に移らむ。

小本といふも草雙紙といひ黄標紙と名付くるが如く、その冊子の体裁より名けし名ながら其内容は自定まれり。すなはち浮世草子より一轉化出したる、遊里洞房の癡情を穿ち風俗を寫し、嫖客の戯語に滑稽洒落を盡くせし、通人向のなぐさみ本なり。その起源は明和の末多田¹⁰爺といふもの『遊子放言』一冊を作るに始まり、此書行はれしより作者、其筆法を摸倣するもの漸く多く、かの唐來三和¹¹蓬萊山人¹¹橋等その作を以て名あり、その書の體裁は吉原細見に

10. 江戸堀江町四丁目の書
買多田屋利兵衛がことにて、
『等野者談』には丹波屋とせる
も多田爺といへば多田屋の
方、正しからむ歟。

11. 歸橋は上州高崎の藩士
河野氏にて、草雙紙をも作り

倣ひたる半紙二、切の小冊子なれば、之を小本といひ、土器色なる唐本標紙の切付にて、恰も一挺の菟蓐に似たればとて菟蓐本ともいひ、また洒落本ともいへり。安永の末ごろ田螺¹²金魚と戯名するものありて、その頃鳥山檢校が松葉屋の妓瀬川を落籍せしといふ巷談を材として『傾城買虎之卷』といふ小本を出せしかば、小本是より大に行はれ、かの萬象亭三和狂歌に名高き四方山人、さては吉田の錦江、振鷺亭梅暮里谷峨等の作者世にもてはやされ、山東京傳、輕快靈妙の筆致を以て洞房遊里光景を描くに至りて洒落本の隆昌其極に達したり。振鷺亭は江戸本船町の富家猪刈與兵衛といひ鳥居派の繪を學び讀本洒落本の作多く、谷峨は江戸本所なる埋堀の藩邸に住せる久留米藩の大目附反町與左衛門といへる秀才にして、その作『傾城買二筋道』はその『虎の卷』と伯仲すと稱せられたり。

斯くて小本、則洒落本の流行太しく、享和二年梓行の『戲作評判花折紙』といへる洒落本の評判記によれば、『虎の卷』を惣卷頭極上々吉、『二筋道』を立役之部上上吉、『遊子方言』を惣卷軸の真上上吉となして、惣計百七十一部の洒落本の目を列擧したり。而

しも、小本則洒落本の作の方
更に長下たりき。

12. 金魚は神田三河町邊の
町醫の子なりといへども傳
詳ならず。

して京傳の傑作として傳へられし、『仕懸文庫』『絹飾』『錦の裏』等は此外に在り。蓋し幕府は洒落本の流行を以て風俗を壞亂するものと爲し、寛政二年その出版を禁止したり。然るに半紙二、三、四十丁多きも四十丁を出でざる切付標紙の龜本巻頭に畧畫の一二葉あるもあり、なきもの多き洒落本の賣價はと問へば一冊一匁五分、中本形に至りては二匁五分に上り、貸本屋にての見料は一冊二十四文、舊版ものにては十六文の見料を取りて、尙看客頗る多かりしといへば、版元はさらにもいはず、貸本屋の利潤といへどもまことに少からず。されば書肆萬重の如きは此禁制の法網をくぐりて、窃に名作者京傳に勸めて二種の洒落本を作らしめ、表袋に教訓讀本と題して發布し、なほ利を射んとせしがば、事露顯し、寛政三年の夏京傳は萬重とともに捕へられ、作者は手鎖五十日、版元は身上半減の罰所に處せられたり。『花の折紙』に『仕懸文庫』以下を載せざるは此に遠慮せしならむ、後數年を経て洒落本四十二種悉く絶板せられ、貸本屋は各三貫文の過料に處せられたり。而して此洒落本の三打撃は江戸俗文學の一轉機と爲り、幾多の作者をして方針を變ぜしめ、京傳は之より草雙紙にかへり、更に讀本に轉じて大成し、三馬一九の聲は一種の滑稽ものを

を作るに至れり。また此頃より怪談本、一代記、軍記の類の盛に行はれしも、此洒落本梓行禁止の結果にして、敵討本の行はれじまた此に因りしが如し。願れば寶曆以來四十年前後にして江戸俗文學は漸く簡より繁に入り、粗より密に移るの盛運に向へりと謂ふ可し。乃かりに、寛政の洒落本禁止を以て一段落と爲す所以なり。

第二章の二 實録讀本

江戸時代前期俗文學の中堅は西鶴の浮世草子なるが如く、後期の極盛は京傳、馬琴の讀本に在りて、世に所謂元祿文學に對する文化文政の稱ある所以なり。讀本は遠く演義體歴史、物語等より傳統せる實録ものと、院本戯曲とより融化綜合折衷して一變化を生じたるものなれば、其前驅として實録につきて一言せざる可からず。

實録とは其名の示すが如く、實事記錄の義にして、一種の歴史傳記の演義にして、則事蹟人物の實を骨子と爲し潤色を加へ興感を添へたる戰記、隱謀、報讎、傳記の類なり。前期文學の間に附記言及せし太田牛一の『太閤記』、竹中の『川角太閤記』、唐山演義の翻譯なる元祿年間の『通俗唐太宗軍鑑』、正徳の『十二朝軍談』等は其淵源を爲すものにして、當時武強の士風なほ銷せず、前代武家の事功軍談を追想し、或は唐漢君臣治亂の事實を揣摩して此種の書、武家制度の社會に入りたるは明なり。従つてや、下りても此一派の文學は武門の墨によりて他の俗文學の爲に容易く其地を奪は

れず、陰然たる勢力は實録と曰ひ、實事、實蹟といふ名目によりて人心を繋留して、前後二百年を縦貫し來れり、想ふに美醜の甄別は尙明ならぬも、眞偽の情を動かすは更に夙きものあり、確なるものあり。實事といへば、その蹟の如何は措きてもまづ人心を動かし易し。况やその實といふもの、實は附會假托半以上に居るも、素朴の文はその結構の濫據せる人物事蹟年處の實と相待ちて、巧に實らしく見せしむるものあるをや。實録ものゝながく命脈を保持して、似せらしき實よりは實らしき似せの古今世を掩ふ所以なり。乃見る、元祿に赤穂義士の復讐談あるや、僅に一兩年にして、之を作せる『忠義太平記』、『武道播磨石』等の實録もの多く世に出て社會に歡迎せられ、正徳享保のころ京都の馬場玄隆の如きは盛に此種の實録を編纂し、其作といふものを列擧すれば、『中興源氏一統志』十六冊、『北條太平記』二十一冊、『義貞勳功記』十五冊、『北陸七國志』十二冊、『曾我物語評判』十二冊、『曾我勳功記』十五冊、『義經勳功記』二十一冊、『北國太平記』十冊、『楠一代記』十二冊、『武家勳功記』十八冊、『南朝太平記』三十冊、『朝鮮太平記』三十一冊、『西國盛衰記』十六冊、『本朝三國志』十二冊、『中國太平記』十冊、計

一。名は信濃、儒家馬場信武の子、國學を修め神道を唱へて、その名一時に高し。のち柳屋子、山川素石と號す。享保十三年歿す。

十五部二百五十餘冊の多きに上り、また崎陽の岡島冠山は『通俗忠義水滸傳』『通俗天明軍談』『通俗明清軍

名は漢字は玉成漢學者にて京江都に來往す。享保十三年歿。享年五十五。

談』等多く支那演義の翻譯を爲し、諸家の興亡騷動等みな此より世に行はるゝに至れり。中に就きて『太閤記』最行はる。初寶永の頃浮世

名は助五郎、江戸の人、島居清信の門人にて、始めて泥畫をかけるもの。

畫師近藤清春『太閤記』のところへ挿繪を加へて開板せしより、『太閤記』俗間に流布し始め、のち寛政年間難波の法橋玉山『繪本太閤記』を出だし、一篇十二巻づゝ世

岡田玉山、名は修徳字は子秀、江戸に來り神田錦屋町に住す。文化九年歿す。年七十六といふ。

に布き年を重ねて七篇に及びしより、海内に普遍し、後何『太閤記』と名くる書續出し、錦繪にも描き、走童趨卒に至るまで太閤記の人物事蹟を上下せざるはなきに至れり。さればその結果、徳川家の祖宗、創業の功臣なども批判をうくるに至らんを恐れ、文化元年幕府は『繪本太閤記』及び之に關係せる草雙紙、錦繪の類は悉く絶版を命ぜしと雖も、從ひて世に出てし實録ものはなほ堅き根底を有して、諸種の御家騷動復讐譚『大岡政談』『大久保武蔵燈』の類、或は寫本に或は板本のまゝに行はれて、以て徳川幕府の末に及びたり。其筆路平坦にして行文簡易に、何人にも理解

され易きとは、其事蹟の實なりといふと相よりて流布の因となりしや明白の事實なりとす。其作は淨瑠璃作者が閑餘の業なりといふは實ならんも、その何の書の誰の手にたりしやは多く明ならず。また其書の數は汗牛充棟言ならねども、事實の異なるほかに文章趣向等は千篇一律、殆んど優劣あるなければ、何れを傑出せりといふこと無し。然るに此等の實録ものと表裏して起りし讀本に至りては精華徳川三百年の俗文學を壓倒する大文章を爲せり。然れども讀本小説の詳論を爲すは僅に残れる紙白と時間との許さゝるところにして、また近世俗文學中從來最多く、最詳に世人に知られたるは此讀本にしあれば、茲にはその大概を叙して已む可し。

讀本といふは草雙紙の屬と相對する稱呼にして、かの雙紙類は挿畫を主として文章は其補たるに過ぎざるに反して、此讀本は文を主とし、挿畫は僅に本文を了解し易からしめ、または幾分の興味を加ふるために僅に數葉を挿み、主として本文を讀む可きものなれば讀本といふ名を生じたるなり。讀本の起源はまた京攝より發じたり。世の見るところによれば大抵延享年間に大阪の近路行者が著はし、

『英草紙』『繁々夜話』等を以て讀本の嚆矢と爲せり。近路行者は都賀六藏、名は庭鐘、浪華の一畸人なり。のち明和五年建部綾足は『西山物語』を著はし、同じき十年、則安永二年『吉野物語』一名『本朝水滸傳』を著はしたるを讀本の系統と爲す。然れども此二物語は雅文古言を用ひし擬古の新物語にして、和學者の好事のすさびたること、猶後の石川雅望が『飛彈匠物語』、村田春海が『笠志船物語』などの如く、後の讀本とは大に庭徑あり、且其當時に行はれたりしや否を知らず。かへりてその上田秋成が『雨月物語』は一篇の體裁より論ずれば、怪譚百物語の面影を脱せぬものから、其文辭よりいへば後の山東、曲亭が藍本として、讀本の先途を開きしに近し。伊丹の椿園主人が『坂東忠義傳』『雨劍奇偶』『女水滸傳』の類こそ、讀本系の先達といふべき歟。しかもなほ世は草双紙、洒落本を歓迎して、未だ讀本の流行を來たさず、その流行に趣きしは寛政の洒落本禁止の後に在りと知る可し。寛政八年馬琴が作『高尾千字文』を以て讀本興隆の始と爲すものあるも、寧ろ同じき十年、山東京傳が作『忠臣水滸傳』を以て之に當つるを穩當と爲す可し。但し寛政時代の讀本の體裁は、毎卷の紙數大約十五六丁乃至二十丁をすぎず、文字も細密ならずして、大抵半丁に九行、若し

くば十行より多からず、挿畫は毎卷に畧畫二葉、無地または模様つきの厚表紙をか
け、全部五卷にて賣價五匁許なりきといへり。

實録ものはわが近世の一大偉蹟たる『太閤記』を以て起りしが、讀本小説は支那傳
奇の傑作『水滸傳』によりて草莽を拓きたり。綾足一ひ『本朝水滸傳』を著はしてより、『水滸傳』の漸く人の知るところと爲りしかば、椿園の『坂東水滸傳』『女水滸傳』等は
之によりて出てたる可く、遂に手を洒落本に鎖されし山東京傳が『忠義水滸傳』より
想ひよりて忠臣蔵にあてたる『忠臣水滸傳』十卷とはなれり。京傳、馬琴が如き大家
の傳を此に説くの間と要とを見ず。『水滸傳』の遇高而開の高を高師直の高に當て、
四十七義士を百八好漢に配し、第一星座は大星といふも可笑しく、足輕寺岡を神行
太保戴宗に擬したるなど、奇中の奇を弄したる此新作は『作者部類』の著者にすら
『綾足が本朝水滸傳ありて以來、かゝる新奇の物を見る世評高かりしかば、多く買れ
たり』と傳へられ、こゝに讀本は始めて其地を得、のちの馬琴が『八犬傳』もまた『水滸傳』
に擬したれば、讀本と『水滸傳』の因縁深しといふ可き哉。時に京傳年三十八。

京傳が讀本中の主要なるものを擧ぐれば、文化元年に『優曇華物語』七冊、文化二

年に『櫻姫全傳曙草紙』五冊同じき三年に『昔語稻妻表紙』五冊同じく四年に『善知鳥安方忠義傳』六冊翌五年には『稻妻表紙』の續篇たる『本朝醉菩提』十冊同十年に『双蝶記』ほか刊行年月未詳の『安積沼』『浮牡丹』の二篇あり。中に就きて『稻妻表紙』最も著はる。道は不破伴左衛門名古屋山三郎の善悪二主人を設け例の鞘當を山に綴りたる芝居仕立の趣向なりしも行文意匠の富麗なるより面白く世に迎へられ、太く時好に投じたと挿畫の山三が衣裳に雨中飛燕の模様ありしより劇部にも必ず之を用ひて電光閃々たる不破の衣裳と相對するに至りしにても知る可し然れども嚴酷に言はば京傳の才學は讀本よりも頗る草雙紙洒落本に在りと謂ふ可く讀本の妙は曲亭馬琴の靈脫を待てり。かの三和が讀本は文を主として書を後にするものなれば京傳は遂に馬琴に及ばずといへるは畧眼識ある評といふ可き歟。曲亭馬琴は寛政享和の間既に數部の讀本を作りしも未だ見るに足らず文化のはじめ『小夜中山石言遣響』『四天王刺盜異録』等あれどもまた妙といふを得ずその三年馬琴年三十九にして『椿説弓張月』前編六冊を出せしより始めて讀本界の大家と推すを得可し。文化十二年に江戸俗文學界に空前絶後の大作たる『南總里見八

犬傳』の初輯五冊また終に未完に終りしも曲亭四大著の一に數へられし『朝夷巡島記』の第一編五冊を并せ出だし文政元年に此二書ともに第三編に及ぶとともに『犬夷評判記』三冊世に出づるほどの盛況。文政十一年には『八犬傳』第七輯に及びしかば別に『近世既美少年録』の第一巻を出だし天保元年に及びて『開卷驚奇俠客傳』を世に公にせり。『弓張月』の鎮西八郎爲朝が外傳たる『巡島記』の朝夷三郎義秀が傳奇たる『美少年録』の毛利陶の前身たる『俠客傳』の楠新田の遺孤に假託せし杯今さらにいはずも皆世の知るところなれど此等の述作何れも數編數十冊の大作にして殊に『八犬傳』が文化十一年秋九月の初輯に始まり天保十二年秋八月の大尾にいたるまで年を開すると二十八巻葛巻冊積みて九輯一百零五巻の宏翰となりしは馬琴の勞苦想ふに餘あり。况や晩年失明して文字なき媳婦に文字を授けて代筆せしめし

『難捨の松のふる葉も言の葉も子等に教へてかゝするぞ憂き

哀れにも殊勝なりし作家と謂はざるを得ず。此他馬琴の著は『三七全傳南柯夢』

『皿々卿談』『夢想兵衛胡蝶物語』以下二百餘種。

山東、曲亭の外にして讀本の述作ありしはかの栗枝亭鬼卯、高井蘭山、咸和亭鬼武等なる可く、三馬、一九種彦等は讀本を作るといへども、他に更に特能あるものなり。栗枝亭には『更科草紙』『初瀬物語』『夕霧書替文章』、蘭山の作には『星月夜顯晦録』『三國妖婦傳』『孝子嫩物語』等、鬼武には『自來也物語』等あり。

文化に入りて讀本大に流行せしより、體裁も漸く一變し、挿畫を増して精緻をさへめ、文字は行を詰め、紙數も毎冊三十葉に上り、價格も一部八匁に至るものありき、

第二章の三 合卷、滑稽本、人情本

合卷は草雙紙の合卷にて柳亭種彦の『偽紫田舎源氏』に至りて精華美麗の極に達したり。享和のころ、袋入の上本出來て糊入紙にすりたて、以て王侯に呈す可く、また見輩の玩弄す可きにあらずと評せしとありしが、『田舎源氏』に至りては實に王侯に呈す可く、また實際呈せられし玩弄たりき。京傳も馬琴も草雙紙の作多くありしがごとく種彦にも『淺間嶽面影草紙』『銀手摺昔木偶』等の讀本ありしも、その本領はそれに在らずして此草雙紙に在り。『田舎源氏』は文政十二年梓行の桐壺に始まり、天保十三年その三十八編、藤ばかりまきまきばしらに終れり。要は『源氏物語』を足利時代の事柄に醜案せしものなれども、其足利時代といふは人物事蹟の顯著なる外輪廓を假托せしばかりにて實は徳川當代の事相に描きし『源氏物語』といふ可きものなり。

種彦はまた『邯鄲諸國物語』數編を草し、劇の盛なるに乗じて劇場のさまを合卷に移せし『正本製』あり。『諸國物語』は前期京攝の浮世草紙のそれに擬せしものなれど

も『正本製』は種彦の獨創にして、お仲清七、小いな半兵衛、二代源氏時代物、一名顔見せ物語、お菊幸助、二つ蝶々、お染久松、夕霧伊左衛門、花咲綱五郎等すべて十二編あり。その劇を擬するは文字のみならず、挿畫も俳優の肖像に描き、或は劇部かき割道具立を寫し、或は見物を示し、チョン／＼の拍子木にて巻を終るなど、徹頭徹尾劇界を摸したり。種彦また義太夫節に擬したる讀本を作る、『勢田橋龍女の本地』三冊にして馬琴の『化就丑滿の鐘』と相似たるものといふ可し。

滑稽本は草雙紙、黄表紙の滑稽、洒落本の洒落等より轉化し來り、式亭三馬の『浮世風呂』、『浮世床』、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』等に大成し、以て瀧亭鯉丈の『花暦八笑人』、『滑稽和合人』、梅亭金鷲の『七變人』等に及べり。就中一九の『膝栗毛』は筆路の宛轉自在にして、彌次郎兵衛、喜多八の旅行を目睹耳聞するが如く、後世或は英吉利文壇のピクナク、ペーパーに擬す可き滑稽ものと爲す。其第一編は享和二年に出で、その第十二編は文政五年に梓行せられしが、大に世に行はるゝを見て、更に『金毘羅道中膝栗毛』より、中山道、陸奥の膝栗毛を續出するに至れり。然れ共一九の才と筆は到底三馬の慧才と妙筆とに及ばず、一九の作は一讀輒然笑殺せられんとすれども、

また故らに設けて笑を買ふの傾向あるに反し、三馬は深く世態を穿ち、敢て奇を街はずして巧に頤を解かしめ、滑稽の笑の外に嘲嘘の諷刺を含むと多し。二人者の稍趣を異にするところ。而して他の末流に至りてはたゞ此等の皮想を擬し、糟粕を管めて、所謂味噌を擧ぐるに過ぎず。また人情本と稱するは、草雙紙の合巻と爲りしが如く、洒落本の一轉して續きものとなりしにて、名は異に趣はかへたれども、實は變ぜず。洒落本寛政の禁に遭ひてしより、東里山人『雛の花』、『契情肝粒志』などいへる少しく體裁の異りたる洒落本を作りしが、寛政十年三馬が『辰巳婦言』後其續篇として『船頭深話』を出だし、より洒落本續きもの始まり爲永春水に至り大成して人情本と爲れり。京攝にては此書類を稱して粹書といへり。春水の名を爲せし作は『梅暦』、『春告鳥』の類にして、たゞ男女の痴情を細寫せるのみもとより鎖猿讀むに耐へざるもの多く、いろは文庫の如きは正徑に近きものなるもかへりて著者の本色にあらざるは惜しむ可し。而して曲山人の『娘太平記』、『娘節用』、『清談若縁』、紀山人の『仇競今様櫛』、松

吾幕府の家人にて麻布三軒家に住せし細川浪次郎といふもの、又鼻山人、九陽亭などの號あり。安政六年歿す。年七十四。

曲山人は三文舎自撰。

亭金水の『閑情未摘花』梅亭金鶯の『柳の横櫛』等はみな

爲永の末流を汲めるものなり。但此に注意す可きは

滑稽本も洒落本も此人情本も通篇文章少く俗語の直

寫多く文辭はたゞそのつなぎに過ぎざると也。此等

は當時の社會に入れられんが爲に俗語を用ひし爲に時好に投じたる必至の勢な

らんも文體變化の上に一期を畫すと謂ふ可し。彼讀本の如きは專向上の傾向を

具して雅俗の兩調を折衷し和漢の文脈を綜合し誦讀の妙あれども文と言と離れ

て當世の俗と隔るところあるに反し滑稽本人情本の類は俗は則ち俗なれども巧

に當時の言語風俗を活寫して眞に迫る殊に現用の言語を用ひたるは着目留心す

可き文學上の一現象と爲す可しされば利弊相伴ふは勢の必至にしてかの爲永の

人情本が太く當時に行はれしは益其書の惡感化の大なるを證す可く元祿の社會

がいかにかに西鶴の浮世草紙と相感化せしやは措くも人情本が近く幕末の社會人心

を腐浸して今もなほ有害の書たるは事疎に時隔てる元祿文學の比にあらざらむ

歟。若し社會人心の感化は文學以外のとに在りとするれば顧みて近世俗文學中に

一八〇

き起山人は二世一九にて本名は絲井風助。

ハ金鶯は本名を爪生政和と

いへる擊劍の達人にて團圓

珍聞の記者となる。明治十六

年に歿す。年七十三。外に『砂竹

林話七偏人』の著あり。

就きて泰西の所謂文藝の標的を以て準繩と爲し規矩と爲す可き者をよく幾干を得可きを知らず。またかの曲亭が讀本に儒家見の道義を説きて武家制度の社會を描き種彦が草雙紙にやさしき稚幼婦女の面白味を高尚に導きしを得たりとし京傳の洒落本妙得て摸す可からず一九の滑稽三馬の冷罵はその下層社會の眞を發するの筆とともに稱揚す可きといはれ爲永もまた洞房の隱微を漏らすに於てよく比肩する者なきを誇る可き歟。見よ、現の世にも明治の丹次郎の艶福を世間にすゝむるの廣告あるにあらざや。わが我の文學は上流縉紳の間に起り且行はれて千百年來下行の文學なかりしに江戸時代の昌平治安に遭ひてはじめて平民文學を得しかも其昌隆なりしは予輩が喜に耐えざるところなり。嘗之をけむるに元祿の好色本を以てし之を終るに天保の人情本を以てせしは元祿天保社會一部の人が歡び迎へしどころならんも文藝を律するに道義を以てするほどに愚ならぬものなほ以て榮とす可きにあらざらむ。

後期の俗文學界に於てはなほ南仙笑楚滿人を説かざるを得ず烏亭馬馬に及ばざる能はず文界の奇見風來山人は少くも一段の叙論を要するものなれどもたゞ

其間を得ざるの故を以て省略せざるを得ず。憾まことに少からざるなり。然りと雖も信ずるところをいはば、後期江戸の作者と著作ことに文化文政以後のものは其作のすぐれたると多きと、時代の今を距ること遠からざるとによりて必ずや諸賢の多く知るところたむ。されば今已むを得ざる省略によりて此後段を畧するはかの前段を省くよりは稍自安んずるところと爲す。若し講者が多病と多忙とによりて事此に至りし罪は茲に千萬謝して已まむ。

近世俗文學史

雑報

●東郷大將の名譽

昨年三月以來引續き海上の勤務に従事し遂に旅順艦隊をして全滅に至らしめたる東郷大將の絶大の功勳は内外の普く知る所なり、大將は去る廿二日旅順艦隊全滅の状態を大本營に報告せしが廿三日天皇陛下より辱くも左の勅語を賜はりたり。

旅順方面ニアル我水雷艇隊ハ連夜風雷ヲ冒シ強固ナル防禦ヲ排シテ敵ノ艦隊ヲ襲撃シ艦艇相接ケテ寸毫ノ混亂ナラズ其ノ任務ヲ果シ倍々操縦ノ技術ト敢爲ノ氣力トヲ發揮シ得タリト聞ク

大將の奉答

旅順ノ殘存敵艦ヲ襲撃シタル陛下水雷艇隊ノ微功ニ對シ優渥ナル勅語ヲ賜リ一同感激ニ堪ヘズ水雷艇隊ハ尙今後敵ニ對シ爲スベキ所甚ダ多シ益々勇奮ニ報イ奉ラントナリ

雜報

右語ヲ奏ス

大將の偉勳に對して面のあたり感謝の意を表せんことは國民の切望する所なるを以て天皇陛下また國民の至情を察せられ、上村第二艦隊司令官と共に上京することを命ぜられたるを以て、去る三十日を以て兩將軍相携へて凱旋し、市民の歡迎沸くが如くなり、兩將軍の榮大なりといふべし。

●旅順降伏

さしも頑強に抵抗せし旅順の敵も攻圍軍の勇敢なる攻撃に堪へず、正月元日を以て遂に降を請ふに至れり、此の報一たび到るや朝野の歡聲天地を震撼せんとし、衆議院は特に臨時開會して祝賀の上奏案と、攻圍軍に對する感謝の決議案とを議したり、攻圍軍の榮や大なり

●質問一策

(答) 二學年第二號論學四四八頁四行の故爲之立若上之執以

確之、明確義以化之、起法治之、重刑罰以禁之、の體方を伺ひ
 たし。
 (答) 意外の誤植ありたれば、正誤して反點を附す、「故爲」
 之立、君上之執、以臨之、明確義以化之、起法治之、重刑
 罰以禁之。
 (問) 一學年第一號支那文典十頁十四行「私はと云ふ主、此事
 の格が文でず」は何等の誤植なるか。
 (答) 「私はと云ふ事」が此文の主格でず」の文字を前後に入れろ
 がへたるものなり。
 (問) 同上支那文典五頁に「小學科の一なり」とある小學科とは
 如何なることか。
 (答) 支那の教育法は六歳より家庭の教育を始め八歳より小學
 に進ばせ十歳より師を擇びて之に従はしめ外泊を罷す、其學
 科は數學、國語、音樂、射御の初歩と習字と禮儀とにして、其體書
 は主として文字を覚えしむるに在り、これ即ち小學なり、今
 「國文」「國語」等は文字の事を配する書なり、故に學者の專
 門に之を研究するに對しても此等の書をば小學の書と稱する
 なり、事は體配並に小學等に詳なり。
 (問) 同上支那文典五十七頁十三行の「方」に此抑も如何。
 (答) 「抑も」の二字を行なり削るべし。
 (問) 同上支那文典三十二頁十行十一行の「是用、夫人の前既同
 的執照といふ所以を伺ひたし。
 (答) 是用、夫人之爲(備ス)の二つは共に之を精確に云へば後
 既同的執照にして前既同的執照にあらず、以是とか爲(夫人)
 とかが前既同的執照なり、されど此兩者は只語の形が異なる
 のみにて精神は同一なれば前既同的執照といふも誤りなし法律
 に法理を尙ぶ如く文法研究者は能く文法の原理に通せむこと
 を勉むべし。
 (問) 日本倫理學史十二頁九行の「同漢高安茂の同漢とは何の
 意に候か。
 (答) 同じく漢の高安茂と讀むべし、五經博士にして漢人の
 となり。
 (問) 日本倫理學史十五頁三行の「鬼冢集斯」は何れが姓にして
 何れが名なるか伺ひたし。
 (答) 鬼冢が姓、集斯が名なり、共に音讀すべし、なほ日本書
 紀天智天皇十年正月の條参照せらるべし。
 (問) 日本倫理學史十五頁三行の「應化の時代」とは如
 何なる意義なるか伺ひたし。
 (答) 應化は英語の assimilation なり、日本の國體國風に佛敎
 が同化するを云ふ、即ち最澄空海の二師はかゝる時代を作り
 出したりとの意なり。

出版部創設廿週年紀念出版 戰後經營

(目次)

戰後の經營	伯 爵	大隈 重信
余の海軍眼に映する戰後經營	海軍少將 肝付 兼行	
戰後の外交	法學博士 中村 進午	
戰後の社會政策	法學博士 浮田 和民	
滿州の處分	法學博士 戸水 寛人	
日本人は侵略の語を解する歟	久米 邦武	
宗教家としての戰後經營	文學博士 村上 專精	
戰後に於る經濟的經營に就て	法學博士 天野 爲之	
有價證券と外資吸收策	法學博士 井上辰九郎	
軍國の商民	法學博士 森田 壽一	
戰後の政治	法學博士 鳩山 和夫	
戰後に於ける教育の方針	法學博士 高田 早苗	
日露戰役の敎訓を觀察して戰後經營に及ぶ	文學博士 建部 遯吾	
戰後經營の最大要件は國字國文を改良するに在り	男爵 前島 密	
戰後事業の一としての人類學的博物館設立	理學博士 坪井正五郎	
國劇刷新の必要	文學博士 坪内 雄藏	
戰後の美術	文學博士 瀧 精一	
戰後の豫防	法學博士 岡田朝太郎	
戰後經營論に就て	文學博士 土子金四郎	
本邦農業の現在及將來	法學博士 松崎藏之助	
海	法學博士 和田垣謙三	

洋裝 全一冊
 紙數 二百五十餘頁
 正價郵稅共
 金參拾五錢

發行所 東京牛込早稻田 **早稻田大學出版部**
 東京神田 東京堂 有斐閣 京橋 東海堂 其他

ナ3L-96

明治三十八年九月十日內務省許可

明治三十八年度 第一學年 文學教育科講義 第七號

不許複製

明治三十八年一月十日印刷
明治三十八年一月十日發行

定價金三拾五錢

東京市牛込區下戸塚町廿七番地

編輯兼發行者 種村宗八

東京市牛込區市夕谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 森潤 二

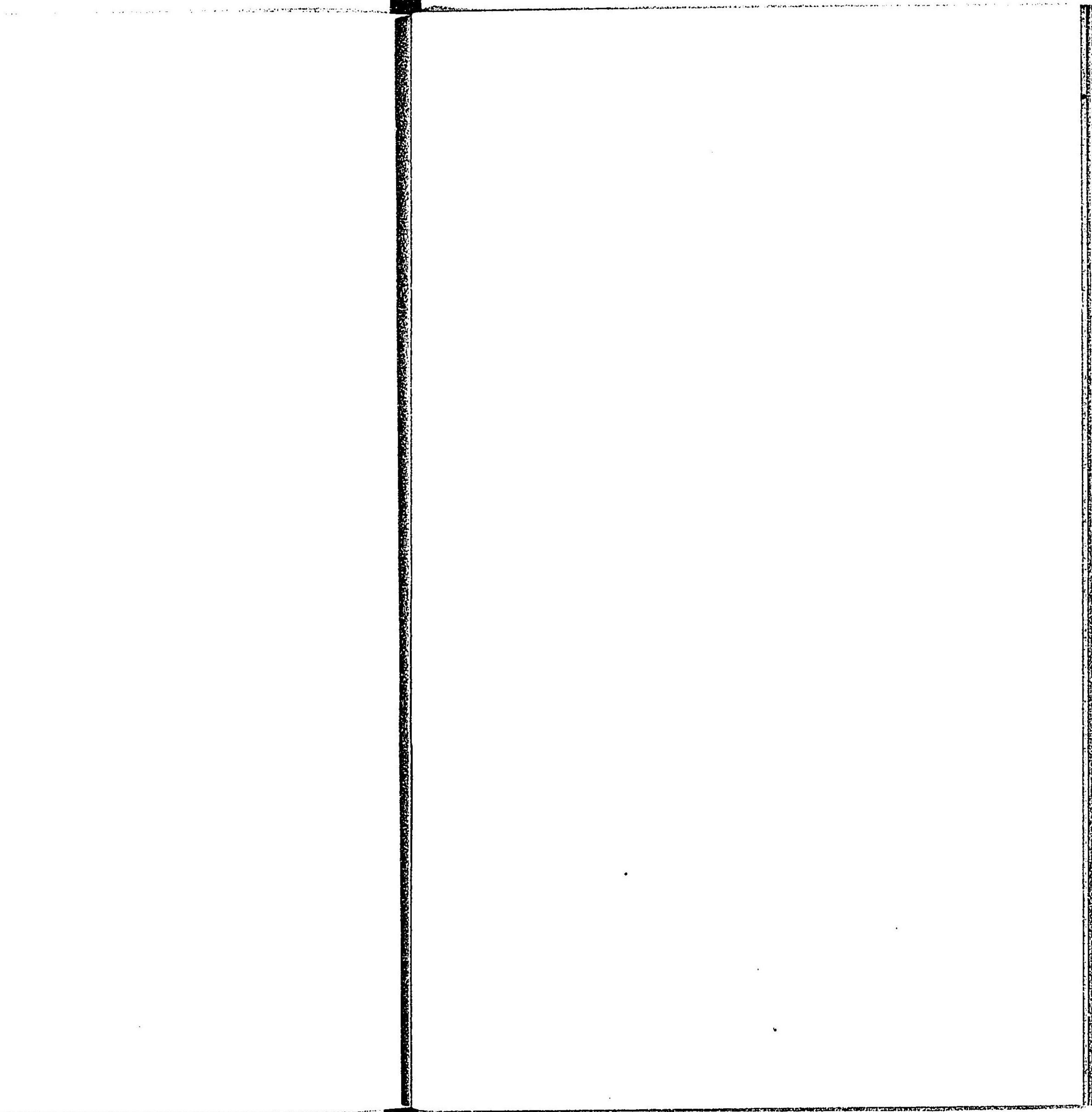
東京市牛込區市夕谷加賀町一丁目十二番地

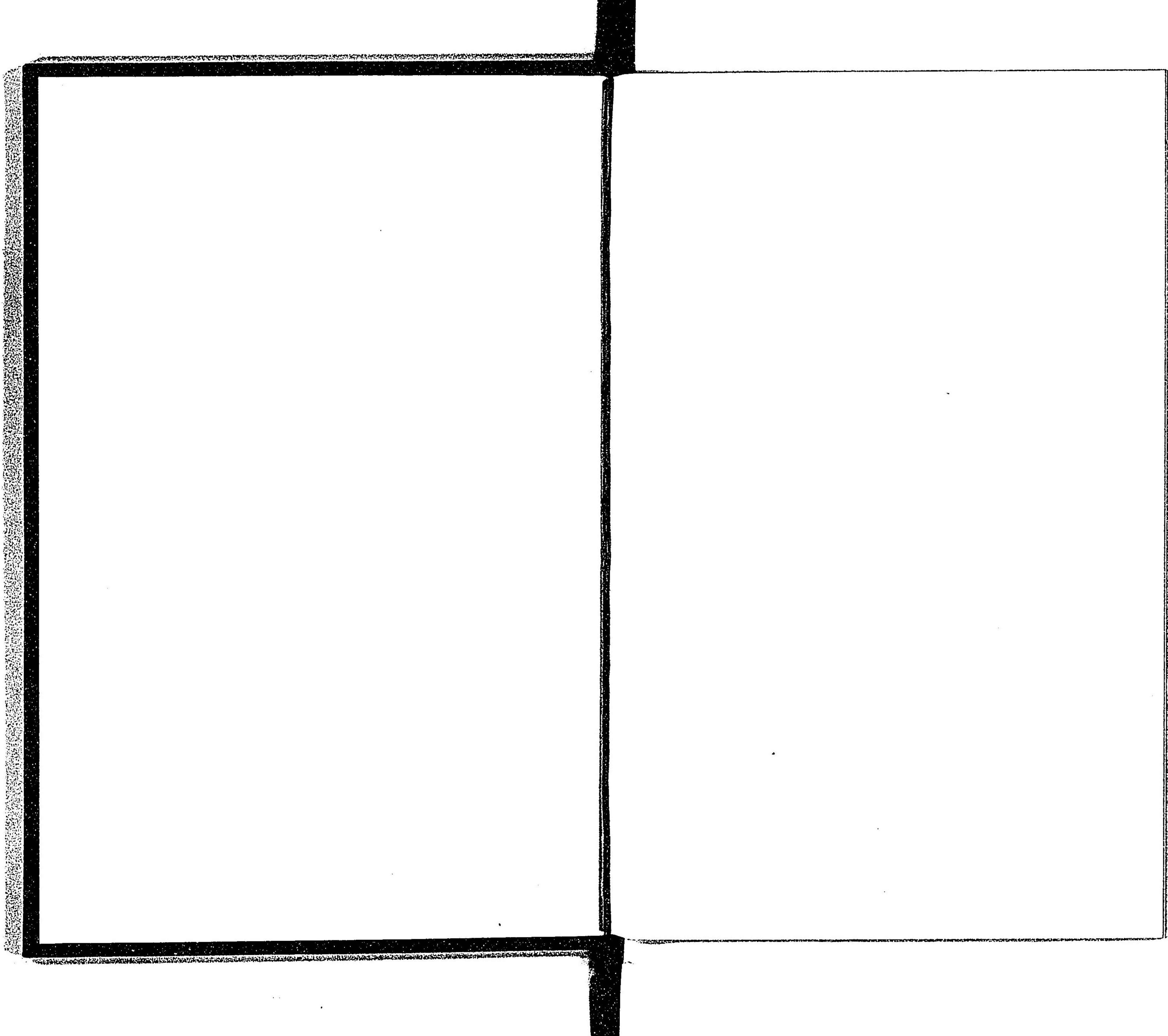
印刷所 株式會社秀英舍第一工場

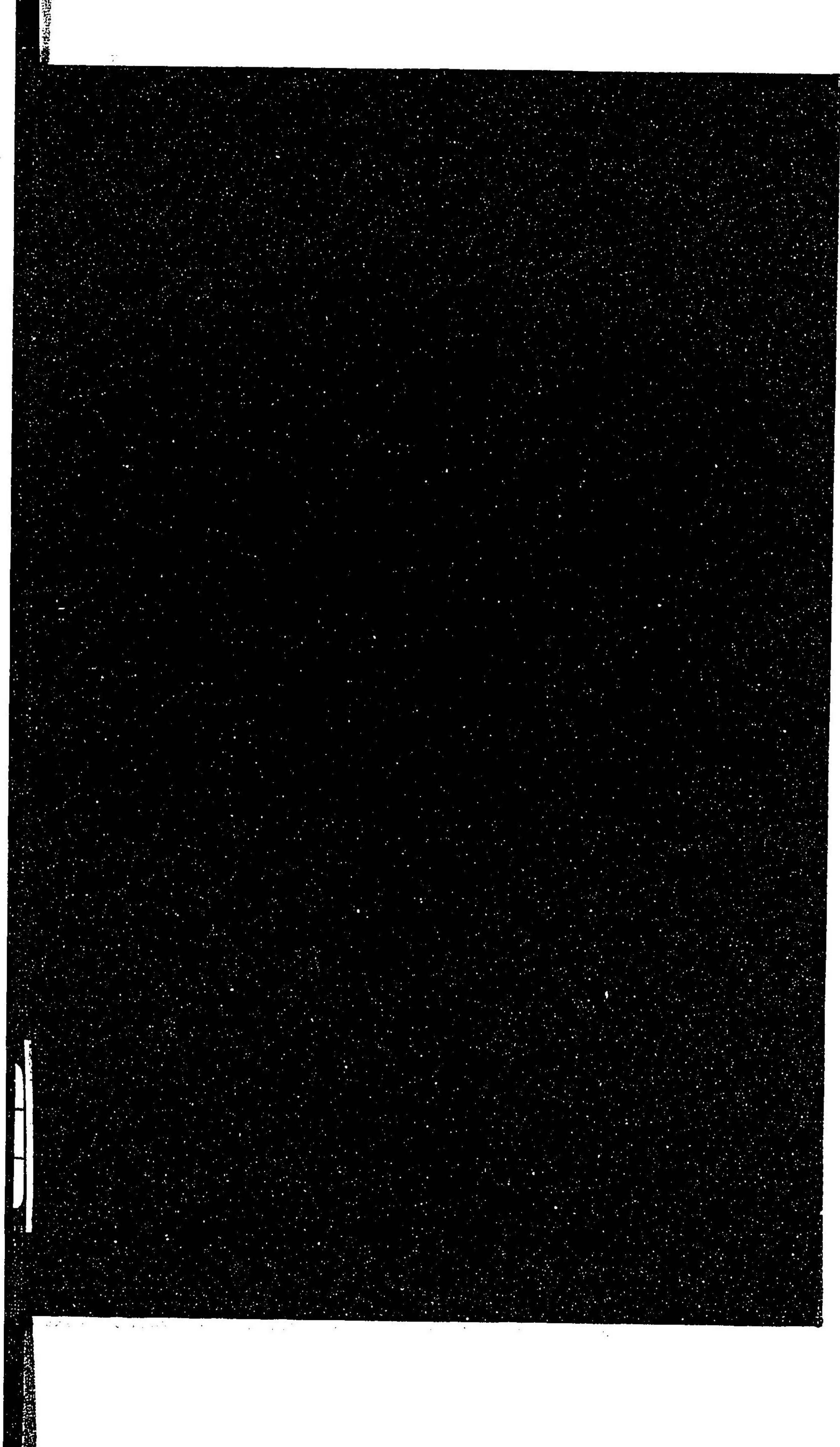
東京市牛込區早稻田

發行所 早稻田大學出版部

(電話番町三七四番)







910.25
Sa445K
60

084864-000-9

910.25/Sa445K(s)

近世俗文学史

坂本 健一 / 述

M38

DBB-0018

